

第12回 保育実践研究・報告集

平成 30 年 3 月



社会福祉法人 日本保育協会

はじめに

保育所や認定こども園等に対する地域の要望は様々であるが、子育て専門機関、専門の職員が常駐する場所は地域ではそれらをおいて他にない。日々の保育実践の中から課題を見つけ、複数の職員の手でそれを分析し、検討を加え、より良い方向へと改善することが保育の質を高めることに繋がる。

この「保育実践研究・報告」は、「研究論文」と「報告と考察」の2つの方向性により、保育者の実践について募集したものである。本年度は第12回目を迎え、会員各位のご協力による11件の提出をいただいたことに感謝申し上げます。また、業務多忙の中、応募された皆様に対し、敬意を表する次第である。

第7回から、課題研究の取り組みを評価することとし、各賞の区分の見直しを行い、従来3区分だったものを5区分に変更している。第12回ではこの区分の見直し後初めて、課題研究部門の「優秀研究賞」受賞作が誕生した。大変喜ばしいことである。

なお、この事業はあくまで保育実践の研究・報告について募集したものであり、各施設における保育内容の評価を目的としたことではないことを申し添える。

会員の皆様にはより積極的に応募していただけるよう課題等について更に検討を加え、第13回の募集に生かしたいと考えている。内容がより充実していくことを期待し、併せて積極的に保育研究を行っていただくことを願うものである。またこの報告への応募を、保育現場がいかに様々なことを行っているかを発信する手段としても活用していただくことを願っている。

平成30年3月

「保育所保育実践研究・報告」企画審査委員会

第12回「保育実践研究・報告」募集要綱（概要）

1. 目 的

日本保育協会では、保育の専門性の向上を図るため、日々の保育を振り返り、検証していく保育実践に関する研究・報告を募集します。

応募いただいた研究・報告は審査を経て表彰し、報告集やホームページ、「保育界」等で公表することにより、今後の保育内容の向上と充実に資することを目的とします。

2. 主 催

社会福祉法人 日本保育協会（日本学術会議協力学術研究団体）

3. 応募資格

日本保育協会会員施設の施設長、職員（個人研究、施設内グループ研究、地域のグループ研究等）及び保育科学研究所研究会員（保育所等との共同研究を含む）

4. 部 門

（1）課題研究部門

以下からテーマを選び、課題や取り組みについてまとめてください。関心を持ったきっかけ、疑問などの課題又はどのような仮説を立てたのか、保育にどのように取り組んだのか、そこからどのような発見、気づきがあったかを、出来るだけ掘り下げてください。必ずしも問題解決の成果や成功例を求めているわけではなく、課題の発見とその解決に向けたプロセスをまとめてください。保育所保育指針をもとに、具体的にどのように実践されているかを示す機会としてお考えください。

① 人との関わり

子どもが人への信頼感や主体性、社会性を形成していくために人間関係は大切です。子どもと人との関係性をつないでいくための関わりについて取り組みをお寄せください。

② 遊びと学び

遊びや日々の生活においても子どもが学ぶ機会はたくさんあります。日常的な遊びや生活が学びにつながっていくことについての取り組みをお寄せください。

③ 子どもの健康・安全

施設での保健活動、感染症対策、事故防止対策、防災等の危機対応などについて、具体的な取り組みの内容をお寄せください。

（2）実践報告部門

テーマは自由です。日誌に記載された日常の実践や、地域・保護者に向けて実施した調査結果など、保育実践・事例報告・調査報告等を対象とします。日々の記録の中から得られた事柄や傾向の変化など、客観的な記録・報告をもとにした考察に注目するものです。

- （例）
- ・施設での実践事例（感染症・食中毒への対応、特別な配慮の必要な子どもの保育、乳児保育での課題、苦情解決の取り組み、保育環境向上のための取り組み（物的、人的）、入所の際の配慮、保育日誌の工夫・改善等）
 - ・施設（地域）での調査など
 - ・施設として実施した子育てに関する特別活動、子育て家庭への支援・地域との連携など
 - ・災害への対応（防災計画の策定等）

5. 審査において評価する内容

応募作の評価は企画審査委員会が行います。目的や課題を明確に示し、それに対しどのように取り組んでいったかという経過等について、事実を基に客観的・具体的に記述され、その結果に対して考察がなされていることが大切です。また、問題提起が明確か、論旨が通っているか、オリジナリティはあるか、データは適切か等についても評価を行います。

第12回「保育実践研究・報告」入賞作一覧

○優秀研究賞（課題研究部門）

・課題研究②遊びと学び

「あそびは教育である」を可視化する～砂時計・水時計づくりでの子どもの姿を通して～」

森本 敏子（三重県・幼保連携型認定こども園明和ゆたか園）

○研究奨励賞（課題研究部門）

・課題研究②遊びと学び

「遊びを通してしなやかな体を育てよう」

山段 育代、貝塚 希、足立 久美子

（京都府・（公財）鉄道弘済会福知山保育所（さくら保育園））

○優秀報告賞（実践報告部門）

該当なし

○実践奨励賞

「自ら遊べる環境作り～やりたいことをとことんやれるを考える～」

渡部 誠也、倉根 靖子

（埼玉県・（公財）鉄道弘済会与野本町駅前保育所（おひさま保育園））

「絵本の世界への興味・関心から広がる探求の物語

～絵本を見直すことから見えてきたこと～」

杉山 典子、二神 美絵

（研究会員・福岡県・（公財）鉄道弘済会戸畑保育所 わかば園）

「保育ドキュメンテーションの導入から保護者支援、連携の在り方を模索する」

砂川 幸（沖縄県・ひよどり保育園）

「保育環境の充実と危機管理伝達に向けて」

野原 裕実（沖縄県・第2愛心保育園）

○奨励賞

「子どもの将来の学力を伸ばす 絵本の読み聞かせ～学ぶ力・基礎学力の定着に向けて～」

大橋 友佳、藤田 彩香、大井川 栞理、荒川 梓、菅野 裕美、大友 彩子

（福島県・みそら保育園）

「子どもと遊び～遊びの中で輝く子どもの姿・育ち～」

齊藤久美子、佐藤 遼子、菊池 都、井上 明香莉

（群馬県・（公財）鉄道弘済会高崎保育所（ひばり保育園））

「乳児期から始まる『歯』についての考察」

加藤 隆次、大槻 仁美、吉野 月七、松永 ゆかり（神奈川県・亀井野保育園）

「サーキットあそびを通しての育ち」

兵頭ゆかり、鎌田 彩乃、上間 彩香

（大阪府・幼保連携型認定こども園都島児童センター）

「音楽活動による人づくり保育の実践報告

～音体教育によって子どもが成長する。子どもたちの健やかな成長を願って～」

森本 暢（岡山県・やよい保育園）

目 次

はじめに

第12回「保育実践研究・報告」募集要綱（概要）

第12回「保育実践研究・報告」入賞作一覧

| | |
|--|----|
| 1. 総評 | 1 |
| 総 評..... | 3 |
| 委員長 小林 芳文 | |
| 2. 入賞作の紹介及び講評 | 5 |
| (1) 優秀研究賞 | 5 |
| 〈課題研究部門〉 | |
| ・ 課題研究②遊びと学び | |
| 「あそびは教育である」を可視化する～砂時計・水時計づくりでの子どもの姿を通して～ | |
| 森本 敏子（三重県・幼保連携型認定こども園明和ゆたか園） | 7 |
| (2) 研究奨励賞 | 13 |
| 〈課題研究部門〉 | |
| ・ 課題研究②遊びと学び | |
| 「遊びを通してしなやかな体を育てよう」 | |
| 山段 育代、貝塚 希、足立 久美子 | |
| （京都府・（公財）鉄道弘済会福知山保育所（さくら保育園））..... | 15 |
| (3) 実践奨励賞 | 23 |
| 〈実践報告部門〉 | |
| 「自ら遊べる環境作り～やりたいことをとことんやれるを考える～」 | |
| 渡部 誠也、倉根 靖子 | |
| （埼玉県・（公財）鉄道弘済会与野本町駅前保育所（おひさま保育園））..... | 25 |
| 「絵本の世界への興味・関心から広がる探求の物語 | |
| ～絵本を見直すことから見えてきたこと～」 | |
| 杉山 典子、二神 美絵 | |
| （研究会員・福岡県・（公財）鉄道弘済会戸畑保育所 わかば園） ... | 31 |
| 「保育ドキュメンテーションの導入から保護者支援、連携の在り方を模索する」 | |
| 砂川 幸（沖縄県・ひよどり保育園） | 36 |

| | |
|----------------------|----|
| 「保育環境の充実と危機管理伝達に向けて」 | |
| 野原 裕実（沖縄県・第2 愛心保育園） | 42 |

(4) 奨励賞53

〈実践報告部門〉

| | |
|---|----|
| 「子どもの将来の学力を伸ばす 絵本の読み聞かせ～学ぶ力・基礎学力の定着に向けて～」 | |
| 大橋 友佳、藤田 彩香、大井川 栞理、荒川 梓、菅野 裕美、大友 彩子 （福島県・みそら保育園） | 55 |
| 「子どもと遊び～遊びの中で輝く子どもの姿・育ち～」 | |
| 齊藤久美子、佐藤 遼子、菊池 都、井上 明香莉 （群馬県・（公財）鉄道弘済会高崎保育所（ひばり保育園）） | 61 |
| 「乳児期から始まる『歯』についての考察」 | |
| 加藤 隆次、大槻 仁美、吉野 月七、松永 ゆかり （神奈川県・亀井野保育園） | 67 |
| 「サーキットあそびを通しての育ち」 | |
| 兵頭ゆかり、鎌田 彩乃、上間 彩香 （大阪府・幼保連携型認定こども園都島児童センター） | 75 |
| 「音楽活動による人づくり保育の実践報告 ～音体教育によって子どもが成長する。子どもたちの健やかな成長を願って～」 | |
| 森本 暢（岡山県・やよい保育園） | 81 |

「保育実践研究・報告」企画・審査委員会

| |
|--------------------------------|
| 委員長 小林 芳文（横浜国立大学名誉教授・和光大学名誉教授） |
| 天 野 珠 路（鶴見大学短期大学部教授） |
| 石 川 昭 義（仁愛大学教授） |
| 酒 井 かず子（神奈川県・金目保育園園長） |
| 清 水 益 治（帝塚山大学教授） |
| 馬 場 耕一郎（聖和短期大学准教授） |
| 日 吉 輝 幸（石川県・平和こども園園長） |

1. 総 評

総評 委員長 小林 芳文

日本保育協会では、保育士等が保育の専門性の向上を図るため、日々の保育を振り返り、その取り組みや実践に関する研究・報告を可能にする機会を設定しています。毎年研究・報告の募集を行っており、今年度（平成29年）で第12回目となりました。

募集の要綱は、協会機関誌「保育界」4月号の付録として全会員の施設に配布し、昨年11月の締め切りで全国から多数の保育実践の研究・報告がありました。保育士等の皆さんが日常の保育に追われ、研究に十分な時間が費やせないと思われる中で、意欲的に取り組まれ応募していただき、立派な研究・報告を拝見させていただきました。

募集要綱に挙げている保育実践研究・報告の部門は、「課題研究部門」と「実践報告部門」の2部門を設けています。

課題研究部門は、以下の3つの課題の中からテーマを選んで課題や取り組みについて研究を行うもので、①人との関わり、②遊びと学び、③子どもの健康・安全のテーマを定めています。また、実践報告部門では、テーマは自由で、日常の実践事例、日々の記録の中から得られた報告、施設（地域）での連携、特別な配慮の必要な子どもの保育、子育てに関する家庭支援に関するもの等になっています。

今回は、課題研究部門が2件、実践研究部門が9件、合計11件の応募がありました。昨年度より2件少なくなりましたが、概ね平年通りの数になりました。

応募作の研究・報告の評価は、平成30年2月15日に開催された企画・審査委員会による厳正な審査（各応募作毎に3名の委員）で協議して、委員全員で各賞を決定しました。その結果、「課題研究部門」では、最も評価の高い優秀研究賞1件、研究奨励賞1件、「実践研究部門」では、実践奨励賞4件、奨励賞5件の各賞を決定しました。今回、「課題研究部門」の実践奨励賞及び奨励賞、「実践報告部門」の優秀報告賞については該当作品がありませんでした。評価基準として、研究・報告の目的や課題の明確さ、その取り組み経過等、それが客観的・具体的に記述され、適切な考察がなされ、また問題提起が明確か、オリジナリティーはあるか等で全体として審査を行いました。

なお、優秀研究賞は、賞を設置して初めての受賞作が生まれたことで、委員一同の喜びとなりました。応募状況を見れば、今年度も同じ法人の複数の施設から応募もあり、法人としてこの事業への応募を目標に向けて取り組まれている状況が伺われました。

テーマによる取り組み内容では、これまでの応募作以上に保育所での子どもの「遊び」に関する報告が多く、遊具や物作り等を通しての「学び」、「心身発達」との位置づけによる研究報告もあり、また、絵本への関心、読み聞かせ、配慮児の保育実践等、保育に関わる多様な課題に対する報告も見られるようになりました。

企画・審査委員会では全ての研究・報告に対して、応募者への努力を称え、一研究に各3名の委員から、今後の保育実践や保育内容の向上に資するべく参考となるように講評を添えました。

保育実践研究・報告が、今後の我が国の保育の方向性を定める先駆性に繋がっていくこと、そして更なる研究・報告の応募を期待したいと思います。

2. 入賞作の紹介及び講評

(1) 優秀研究賞

〈課題研究部門〉

- ・ 課題研究②遊びと学び

「あそびは教育である」を可視化する

～砂時計・水時計づくりでの子どもの姿を通して～

森本 敏子（三重県・幼保連携型認定こども園明和ゆたか園）

課題研究②遊びと学び 「あそびは教育である」を可視化する ～砂時計・水時計づくりでの子どもの姿を通して～

三重県・幼保連携型認定こども園明和ゆたか園 森本 敏子

1. はじめに

当法人は「あそびは教育である共に学び共に育ちあう」という保育方針のもと、子どもたち一人ひとりが愛情を感じ、心身ともに安心して過ごせ、いろいろなあそび体験を通して強い心と感性豊かな子どもを育てる環境づくりに努めている。

その中で、保育者は子どもたちの発するつぶやきを聞き逃すことなく拾い、そのつぶやきの中にある子どもたちの知的好奇心を広げ、あそびを通して子どもたちが様々なことを学べる経験・体験を大切に日々、教育・保育を行っている。

2. 研究の目的

子どものつぶやきから始まり発展してきたあそびを研究することで、保育者が常に意識している「あそびは教育である」という保育方針が、当園においてどのように実践されているか検証し、可視化したい。

3. 研究の方法

子どものつぶやきから始まった時計作りの実践事例を用いて、教育・保育要領等をもとに考察していく。

4. 事例と考察

【活動のきっかけ】

6月中旬、コーナーの一つとして設けられた虫コーナーでは、子どもたちの中で、ザリガニが人気で、ザリガニの動く様子をより近くで見たいという思いが重なり、ザリガニの入ったケースの周りでは場所の取り合いが起こった。みんなが平等にみることが出来るようにと考えた5歳児が、年少児に「みたら交代しやなあかん！」と声をかけたが、年少児は場所を譲ることが出来なかった。

話し合いの末、「10秒かぞえたら交代」ということで落ち着いたが、いざ数を数えると、「まだ10秒になってない」「数え方が早すぎる」などという子が出てきた。

子どもたちの様子をみた保育者が子どもたちの前に時計を置いたが、時計を読むことができない3歳児は譲ることが出来なかった。どうすれば10秒で交代というルールをみんなで守ることが出来るのかを考えていると、rくんが「ママ、お風呂で砂時計つかってるとつぶやいた。

そのつぶやきを聞いた周囲の子どもたちから、「僕も砂時計がなくなったらお風呂から出る約束しとる」など

の声が聞こえた。

子どもたちが砂時計について話をするうち「砂時計やったら3歳さんでも見たらわかる」という言葉がrくんから聞かれた。そこから「自分たちで作ったらいい」と思いが一致し5歳児数人が素材を集め、作り出したことから今回の活動は始まった。

活動のきっかけ



【事例1】

アトリエにある様々な素材から、どの素材が砂時計に適しているかをみんなで考え、形が似ているという理由からペットボトルで作ることにした。ペットボトルを洗っていると、ペットボトルから出る水の動きを見たhくんtくんが「水でもつくれるんじゃない」と話だし、「水のがペットボトルに入れやすい」「水やったらすぐに落ちてくる」などの意見が出て、砂時計づくりをする子と水時計づくりをする子に分かれて作ることになった。

砂時計を作る子どもたちは、中にどんな砂を入れたらいいのか話し合い、「本物の砂時計はサラサラの砂が入ってる」「大きな石は入れたら詰まる」「ペットボトルがいっぱいになるくらいの砂がいる」「水に濡れてしまうと土がドロドロになって落ちてこない」などの意見が出た。話し合う中で、砂時計にはサラサラの砂が必要という答えで一致し、園庭に出てサラサラの砂づくりが始まった。

【考察1】

砂時計を何で作るのかを話し合う中で、本物の砂時計はどんな形をしているのか、どんな砂が入っているのかなど、一人ひとりがイメージする砂時計について意見を出しあうことでペットボトルに似た形でサラサラの砂が入っているという共通の形を見出した。意見を出し合い互いの思いや考えを共有したことは、協同的なあそびの

始まりだと考える。

また、水の動きをみて、水時計を作りたいと考えたhくんtくんの環境への主体的な関わりは、その実現に向けて試行錯誤し、作り上げる達成感を味わうことで、自立心へとつながると考える。また、水でも砂時計と同じものが作れるのではないかという思いを保育者に共感してもらい受け入れられたことから、彼らの自己肯定感が育まれるのではないかと考える。

【事例2】

砂を入れたペットボトルを重ね合わせ、つなぎ目を手で押さえて砂時計のように砂を流してみると、つなぎ目の隙間から砂がこぼれてしまった。「ずれてるからこぼれる」とつなぎ目部分からこぼれることに気づいた子どもたちは、つなぎ目にストローを入れてみた。ストローだと細すぎるためなかなか落ちてこないことを知ると、「もっと太いのじゃないとだめ」と話が出た。

そこで必要な素材を探すために、保育室や園庭などに探しに行き、その際に、園庭で使わなくなったホースを見つけたrくんが「ホースがちょうどいいと思うんやけど」とみんなに話をした。今度はそのホースを使ってペットボトルにホースを入れてみることにした。ホースは、ストローに比べて太さがありストローよりは砂が落ちてくるが、ホースもペットボトルの口に比べると細いため、子どもたちの思い通りに砂が落ちてはこなかった。

【考察2】

砂時計のつなぎ目から砂がこぼれないようにするためにはどうしたらよいか、なぜ砂がこぼれてしまうのかを自分の考えを声に出して発言しあうことで、ずれないように押さえ方を工夫したりストローを入れてみたりと試行錯誤を繰り返す子どもたちの姿から、言葉によるつたえあいや思考力の芽生えがあるのではないかと考える。

【事例3】

ストローなどを中に入れるという方法では無理だと感じた子どもたちは、重ね合わせた口をテープで止めて間をふさぐことにした。しかし、テープに砂が付くことで粘着力が弱まり、外れてしまうことに気が付いた。テ

プが思うようにくつつかずに悩む子どもたちの隣で、yくんが保育者が切ったホースをパズルのようにつなぎ合わせて太いホースを作っていた。それを見ていた子どもたちが、y君の真似をして太いホースを作りそれをペットボトルの口にはめてみるとぴったりとはまった。ぴったりはまったペットボトルを見た子どもたちの表情からは嬉しさと達成感が感じられた。

【考察3】

ペットボトルの中に筒状のものを入れるという方法では上手くいかず、外側をふさぐことで砂がこぼれない様にならないかと工夫し始めた。2本のペットボトルの間を砂をこぼさずに移動させるという仲間の中での共通の目的の達成のため、自分の意見を相手に伝え、その意見を受け入れられたり、意見をぶつけ合ったりする姿が見られた。意見を受け入れられた子どもは、嬉しそうな表情を浮かべ、自分の意見をより深めようとやや興奮した様子で話を進めていた。反対に、意見を受け入れられなかった子どもは、意見を押し通そうとより強い口調で自分の意見を話す子どもや、受け入れてもらえなかった悔しさを前面に出し、ふてくされたり保育者に悔しさをぶつけたりする子どもなど、仲間同士で意見交換をする中で、様々な心の葛藤を見ることが出来た。こうした関わりの中で、相手の思いにふれ、自分とは違う意見や思いがあることを知ったり、自分の思いが受け入れられない経験を乗り越えたりすることで、他児への思いやりの気持ちが芽生え、社会生活に必要な力や感情知性が身についていったのではないかと考える。

yくんが、砂時計づくりをする子ども達とは関係のないあそびを楽しむ姿を見ることで、そこからヒントを得て細さの為に上手くいかなかったホースを入れるという方法の弱点をカバーする方法を見つけ、自分たちの考えだけでは上手くいかなかった中に筒状の物を入れるという方法を成功させた際の子どもたちは、達成感に満ち溢れていた。共通の目的の達成のため、様々な意見を出しあったり様々な工夫をしたりして、友だち同士で協力し合い、目的を達成する喜びを共有し、共感しあうことで、一人ひとりの自尊心が満たされ、達成感に満ち溢れた表情が一人ひとりに見られたのではないかと考える。

事例3



【事例4】

切ってつなげたホースがペットボトルの口にぴったりとはまり、砂をこぼさずに移動させられる砂時計を完成させた子どもたちは、砂時計を何度もひっくり返し、落ちてくる砂の動きを仲間同士で声を合わせて数えた。「1. 2. 3・・・」と何度も数えながら10秒で砂が落ちきる量を調整した。何度か繰り返すうちに、「s君の数え方はやくない？」など、自分たちで数えるやり方では、正確な砂時計はできないと気づき、時計を見ながら砂の量を調節し始めた。時計の秒針を見る子、砂の動きをみる子に分かれ、それぞれが自分に与えられた役割を正確に行うため、真剣な表情で取り組む姿が見られた。

時計の針をみて、秒と砂の量を合わせることを行ううちに、時計に興味を持ち始めた子が出てきた。保護者などに教えてもらったのか、1分が60秒であることを知っている子どもが、「時計を一周したら60秒、2周したら120秒」などと話をする中で、数字に興味を持ち、1から60まで、1から120までと時計をみながら数を数える姿が見られた。

このあそびを通して、数に興味を持った子どもたちは、ボードゲームの得点や縄跳びの飛べた数など、あそびの中で様々な数に触れる機会において、より数や数字を意識して話をする様子が見られるようになったように感じる。

【考察4】

これまででも、かるたあそびでの取れた札の数や、ランチルームの空いている席を数えてランチルームへ入れる人数を調節するなど数を数えたり、場の状況から必要な数を知って行動したりとあそびや生活の中で数に触れる機会が多くあり、数量や数への関心は高かったように思う。今回の砂時計づくりを通し、砂の量や時計の秒針など、数字や数だけでなく、物質の量や時間など、数字や数をそれにかかわるものと比較して考える経験をあそびを通して行うことで、数や数字への興味・関心がより深まり、時間への関心も広がったように感じた。

10秒で落ちきる砂の量を調節する過程で、砂の多い、少ないを保育者が感じるよりも鋭い視点で感じ取り、細やかに調節する子どもたちの姿を見て、10秒で落ちる砂

事例4



の量を知りたいという子どもの強い思いと、数量感覚の伸びを感じることが出来た。

日々の保育の中で、子どもたちが様々な場面で、数などを用いて生活やあそびを進める経験を通し、数や数量などへの関心や感覚を高めているのではないかと考える。

【事例5】

水時計をつくりたいグループも、砂時計の子どもたちと一緒にペットボトルのつなぎ目をいかに水をこぼさずにつなぎ合わせるかを考え、水時計を作ることに成功した。

自分たちの考える水時計が出来ると、今度は水に色を付けたいと考える子がでてきた。どのようにして色を付けるかを考える中で、「絵の具を入れたらきれい」「色が出る花を入れたらいい」などの意見が出た。園庭に色が出る花を探しに出かけたが、ちょうど花が咲く時期だったため、「枯れてないのにとるのはかわいそう」「まだまだきれいに咲くのに、取ってしまったら咲けなくなる」などの言葉が聞かれ、「また、枯れたときに色水作ろう」という意見でまとまった。色水以外で、水に色を付ける方法を考えるうち、絵の具で色を付けるだけでなくビーズやスパンコールなどを入れるときれいかもしいという事に気が付いた。

ビーズなどを入れると、太陽の光にビーズが反射してきれいだった。「キラキラした」とその美しさに感動し、大きさの違うビーズや色の違うビーズを組み合わせながら、いくつかの水時計を作り始めた。「大きいビーズを入れると、ホースのところで落ちてこやへん」とビーズの量や大きさで失敗する子どももいた。また、ビーズが落ちてこやへんから時間がかかる」とビーズの量や大きさで、水の動きに差が出て、水が落ちるのに時間がかかることに気づく子もいた。いろいろと試すうち、スパンコールが軽くて作りやすいことに気づき、スパンコールで作ることにした。

【考察5】

水に色を付けるためにはどんな方法があるかを考えたとき、それまでのあそびの中で、朝顔で色水づくりをした経験を思い出し、いろいろな色の花で色水を作って、



何色かの色水を作りたいという気持ちで、園庭に飛び出した子どもたちだったが、きれいに咲いている花を摘むことをためらい、花での色水づくりをあきらめた。当園の園庭には、毎年、時期ごとの花を花壇やプランターなどに植え、花の種類や姿から季節感が味わえるように環境構成を行っている。夏が終わるころ、朝顔はしぼんで種が出来るという事が毎年の経験から分かっていたため、「枯れたときに色水づくりをしよう」という気持ちの切り替えが出来たのではないかと感じた。この姿から、子どもたちは自然と関わり、自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化を感じ取り自然への愛情や畏敬の念を持つことが出来ているのだと考えた。

ビーズやスパンコールを光にあてると、太陽光がスパンコールに反射してとてもきれいだった。その美しさに感動したときの心情や、もっときれいに見えるようにするにはどうすればよいか、ビーズの種類や大きさなどを工夫して試す姿からは、心を動かす出来事などに触れ、感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気づき、感じたことや考えたことを自分で表現する様子が見え、教育・保育要領における豊かな感性と表現の姿なのではないかと考えられる。

また、ビーズの大きさや量により、水が落ちる速度や落ちる様子に変化することに気づき、工夫する中では、思考力の芽生え、数量への関心が高まっている子どもたちの姿を感じ取ることが出来た。

【事例6】

水を工夫することに取り組み、絵の具やビーズなどを試してきれいな水時計づくりを達成した子どもたちの興味は、より大きな時計を作ることに移った。家から持ってきた2ℓのペットボトルで試してみたところ、ペットボトルの大きさに比例して中に入れる水の量も増え、重みが増したため500mlのペットボトルと同じ方法では失敗してしまった。

「手で押さえたら大丈夫かもしれない」「壁に寄せて置いたら倒れない」「みずがゆっくりおちたらいいのに」など、それぞれが意見を出し合う中、mくんの「まんなかのホースがビヨンて伸びたら、その分長くなるのに」という意見から長いホースを入れてみた。

事例5



ホースが伸びたことで、水が落ちる速度は遅くなり、数が数えられるようになったが、ホースが絡まり水が出なくなった。それまでの経験から水は上から下に落ちるという事が分かっていた子どもたちは、上から落ちるようにやってみるが、子どもの身長では低いため上手くいかない。もっと高くないといけなと考えた子どもたちは、保育者に声をかけ支えてもらうことにした。「もっと高くして」と保育者に要求するが、これ以上は無理だと分かると、身長の高い男性保育者をさがし、手伝ってと声をかけた。身長の高い保育者に持ってもらうことで長いホースも絡まらずに水がおちるようになり、喜ぶ子どもたちの姿が見られた。

【考察6】

ペットボトルの大きさが変わったことで、それまでと同じ方法では上手くいかない状況が生じたが、子どもたちから諦めの言葉が聞こえることはなく、大きなペットボトルに応じた方法は何なのかを話し合いや試行錯誤を繰り返しながら模索していた。諦めることなく、意欲的に取り組めたのは、500mlのペットボトルで自分たちの思い通りの水時計を完成することが出来た成功体験を通して、自分たちで設定した目標の実現に向けて、辛抱強くやり抜く忍耐力が身につけていたからではないかと感じた。それまでの水時計づくりを通して、達成感や仲間と一緒に作り上げる喜びや楽しさを味わうという内発的動機付けがあったからこそ、諦めてしまいそうな状況になった時でも意欲的に耐え、乗り越えようとする姿が見られたのではないかと考える。

水を流すためには、高いところから低いところに流さなければいけない、ホースが絡まらないためには高さが必要だという事が分かっていた、椅子を使ったり自分たちよりも身長の高い保育者に声をかけたりしながら工夫し、それでも無理だとわかるとより身長の高い男性保育者を呼びに行く姿からは、自分たちの目的を叶えるための手段を理解し、見通しを立てて行動する計画性が感じ取られた。大人が驚くほど、順序よくいろいろな行動を切り替えながら実行し、目的の達成のためにあの手この手で着実に事を進めていく子どもたちには、実行機能が備わっていると考えられる。



【事例7】

水時計が完成してからしばらく経つと、水が蒸発して少なくなってきました。どうしたら水がなくならないのかを自分たちで考えたり、保育者や家族に相談したりした。園長先生に聞いてみると、「洗濯のりをいれてみたら」というヒントをもらった。洗濯のりを入れることで水の動きがゆっくりになった。その動きを見ていたAちゃんが

「この前、宇宙作った。それに似てる」と言い、家からスノードームを持ってきてみんなに見せた。

ちょうどその頃、園外保育でプラネタリウムに行き、星や宇宙に興味を持っていたため、Aちゃんが持ってきた宇宙（スノードーム）をつくってみたいと考える子が出てきた。yくんの「水時計でこれをつくったらきれい。宇宙時計つくろう」という意見に賛同し、洗濯のりを入れた水時計にビーズやスパンコールを入れ、宇宙時計を作った。ゆっくり落ちるビーズの動きに不思議さを感じてずっと眺めたり、ライトテーブルで照らしたりして、宇宙時計の美しさを味わう姿が見られた。

【考察7】

色々工夫して完成させた水時計をそのままの状態でおきたいという思いから、自分たちで話し合い考えるだけでなく、家族や園長先生に相談する子どもたちの行動からは社会生活との関わりをみることが出来る。また、Aちゃんが家族と出かけたイベントで、地域の人に教えてもらって作ったスノードームという物を通して、Aちゃんの経験を共有することで、社会とのかかわりができているのではないかと考える。

【まとめ】

今回の研究を通し、子どものつぶやきから始まり、子どもたちが主体的に進めていくあそびの中には、教育・保育要領に書かれている幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の10項目や非認知能力が様々な場面で見られるのだという事が分かった。

「あそびは教育である」という保育方針のもと、子どもたちにとって、より良い環境とは何かを保育者同士が考え、人的環境としてどのように子どもたちと関わっていけばよいか、子どもたちの主体的なあそびをどのように広げていけばよいか、日々考え、保育者同士が語り合いながら保育をしている。今回、子どもたちの砂時計・水時計を作りたいという目標を達成させるために友だち同士で関わり合い、自分の思いを表現する子どもたちの姿の一つひとつ丁寧に事例としてまとめ、考察することで日々の保育の振り返りが出来たとともに、自分たちが信じて行っている、「子どものつぶやきをひろい、その思いを大切にしながら、子どもたちの主体的なあそびを保障する」という考え方が、29年度に告示された教育・保育要領の提示されている内容とズレがないことに気づくことができ、日々の保育に自信を持つことが出来た。

今回の研究での学びを保育者同士で共有し、より深めていくことで、子どもたちのつぶやきや思いが大切にされ、達成した喜びを感じられるよう、人的環境としての関わり方や環境構成についてしっかりと考え、今後も日々研鑽し「あそびは教育である」という保育理念をより意識した教育・保育を行っていきたい。

事例6



事例7



講評：「あそびは教育である」を可視化する
～砂時計・水時計づくりでの子どもの姿を通して～

評者：小林 芳文

「あそびは教育である。共に学び共に育ち合う」と銘打った課題研究テーマのもと、見事な事例研究、取り組みも非常に解り易く実践例として意欲的に進められたこと高く評価致しました。

今回の研究の目的で、「教育・保育要領」で示されている幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の「可視化」に着眼されて7事例研究を紹介されました。各研究に目を向けていると、いずれも子どもの生き生きとした姿が写ってきて、遊びは、自発性も、創造性も、達成感も、問題解決も有している活動として良く伝わって来ました。私は「遊びとは心身共に参加する機能的な快を伴う活動である」と考えて、特に身体を使った遊びを大切にしています。子どもたちに様々な身体全体を使った遊びを沢山取り入れた保育を進めてください。研究動機にもあるように、日常の保育で行っている子どもの遊びを見逃すこと無く、その子どもの思いを支援出来る環境づくりを今後も期待したいと思います。

どの子も共に育ち、学び合うという視点について強調できる考察を、もう少し加えて頂ければ更に良くなったことを添えておきます。

評者：天野 珠路

時計を読むことができない3歳児のために砂時計を作ろうとする5歳児の試行錯誤が具体的に描かれています。砂時計から水時計、そして宇宙時計へと子どもの発想が膨らみ、興味を深めていく様子がわかります。

幼児期は単に数字を覚えることより、自らの体験を通してものの量や大きさ、長さ、重さなどの感覚を養っていくことが大切であり、その中で比較したり照合したりといったことが行われていきます。心も頭も手も動かして、友達と一緒に何度

も試したり、工夫したり、考えたりする子どもの姿は頼もしく、その姿を見守りつつ、アイデアや発想が生かされる保育環境であることが重要でしょう。必要な材料や用具、素材などを用意したり構成したりする保育者の技量が記録から読み取れます。

「環境を通して行う」という保育の基本がしっかりと認識されているとともに、遊びは学びであることを意識した記録となっているといえるでしょう。今後さらに、日時計や月の満ち欠けや暦など、「時間」とは何かを探求して行ってほしいと思います。大人が想定する範疇を超えて。

評者：日吉 輝幸

明和ゆたか園は、「あそびは教育である共に学び共に育つ」という保育方針のもと、あそびを通して強い心と感性豊かな子どもを育てる環境づくりに努めているとともに、子どもが発するつぶやきを聞き逃さず、子どもの知的好奇心を広げていくように関わっているとのことでした。

本実践研究においては、ザリガニ観察の順番を巡っての子ども同士のやり取りに端を発し、交代時間を分かりやすくするために、砂時計を作るという活動に展開していったものです。子ども同士の試行錯誤の様子と作成の過程、更なる発展を事例と考察にまとめており、事例ごとに読んでいくと、『主体的・対話的で深い学び』（アクティブ・ラーニング）が展開される様子がうかがえ、筆者自身も次の展開が楽しみになっていきました。欲を言えば事例ごとに写真を入れた方が、子どもたちの試行錯誤のプロセスを、更に分かりやすく「可視化」することに有効ではないかと考えます。

明和ゆたか園は、現代の幼児教育・保育に求められている「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」や「非認知的能力の育み」といったことも理解されていると思われるため、今後も好事例を公表していただきたいと思います。

(2) 研究奨励賞

〈課題研究部門〉

- ・ 課題研究②遊びと学び

「遊びを通してしなやかな体を育てよう」

山段 育代、貝塚 希、足立 久美子

(京都府・(公財) 鉄道弘済会福知山保育所 (さくら保育園))

課題研究②遊びと学び 遊びを通してしなやかな体を育てよう

京都府・福知山保育所（さくら保育園）

執筆担当者：山段 育代・貝塚 希・足立 久美子

キーワード：ボール遊び・体の動き・体づくり

I. はじめに

現状の園生活や遊びの場面で体を動かすと、子どもたちが簡単に「疲れた」という言葉を言ったり、すぐに座り込んでしまう姿が見られている。また、それ以上に子どもたちの体の固さやぎこちなさを感じることもある。それらの子どもの気になる姿を踏まえ、保育士間で話し合った結果、子どもの家庭での生活の変化や、それに伴った日中の保育内容や環境といったことへと意見が出た。生活が便利になってきたこと。保護者の就労時間の延長化からの長時間保育利用児の増加。家庭で体を動かす体験も減っている。反対に子どもが実際に活発に活動する時間は園での生活になっている。このことから、日中の保育の中で体全体を動かす遊びを十分に組み込んでいく必要があるのではないかという保育内容に注目する意見にも広がった。そこで、どの年齢の子どもも慣れ親しむことができ、体全体を動かす遊びはないかと考えた。その上で子どもの成長発達の過程で、とても身近にはあったが十分に活用できていなかった「ボール」と「子どもの体の動き」を繋げて考え、ボール遊びを保育の中で計画的に取り組むことにした。

II. 研究の目的

- ・ボールを使った遊びを通して様々な動きを経験し、しなやかな体づくりにつなげる。
- ・ボール遊びの子どもたちの体の動き、使い方にどのような変化がみられるのかみていく。

III. 研究の方法

- ・4、5歳児を対象にボールを使った遊びの子どもたちの様子を観察、検証する。
- ・体の部位や動きを意識したボール遊びを計画し、子どもたちの体の育ちを促進する。

〈研究経過報告〉

実践を始めた1年目の子どもたちの様子は、ボールの扱いに慣れず、ぎこちないものだった。そのため、ボールを用い体づくりにつながっていくのかを検証するまでには至らなかったが、ボール遊びは慣れている子、慣れていない子で扱いには差がでることが分かった。これまでの保育の中では、ボールを使った遊びを十分に組み入れてこなかったことが明らかになり反省する。

実践2年目には、ボールの扱いに慣れるよう、より遊びが充実するようにボールを使った遊びに対して「ねらい」を持ち、遊びを実践することとした。その中で様々な体の動きを経験することができ、ボールを使った遊びに興味を持って自由遊びの中でも自らボールを選んで遊ぶ姿が見られるようになってきた。

IV. 事例と考察

●事例1～ボールであそぼう～

ボール遊びに「ねらい」を持ち、ボールを使った遊びを子ども自ら積極的にいき、様々な動きを経験すると子どもたちの体の使い方、動きにどのような変化が見られるのか実践する。実践する上で、しなやかな体づくりに効果が見られるのか子どもの成長した姿をイメージし段階を踏んだ計画を作成した。

ボール遊びの計画：対象児4歳児 20名

〈クラスの特徴〉

体を動かすことは好きで、意欲的に楽しむ。活動の際に苦手な動きがあると、できるようになるまで挑戦する子、取り組んでみてできないと直ぐに諦めてしまう子がいる。諦めてしまう子の中には身のこなしにぎこちなさを感じる子もいる。

ステップ①ボールに親しむ

〈環境構成〉

一人ひとりがボールを使うことができるように、ドッジボール大・中、ビニールボール、ビーチボールなど人数分用意する。

〈子どもの動き〉

ボールをつく、投げる、真上に投げ上げる、蹴る等それぞれに好きなことをして遊ぶ。ボールをつこうとするがうまくいかず途中でやめてしまったり、ボールが体に当たるとを怖がり、目をつぶってしまう姿も見られる。ビーチボールは形状が柔らかいので、抱えた感触を楽しんだり、当たっても痛くないと、友だちと投げ合いをして楽しんだ。

〈この活動からわかったこと〉

ボール遊びの計画を立て進めることで、ボールに興味を持つ子が増え、ボールに慣れ親しむ事ができるようになってきた。子どもたちは、ボールに興味を持つように

なったが、ボール遊びが得意な子は積極的に遊んでいくが、苦手な子は消極的でボールに触れる機会も少ない。

ステップ②いろいろなボール遊びを楽しむ

<環境構成>

「ボールと遊ぼう」のボードを作成しボールつき、ボール投げ、ボールキャッチ、ボールはさみの4つの遊びの基準を知らせ、チャレンジしたところに個人シール貼るようにする。

- ・使用したボール：ドッジボール大・中
- ・場所：ホール



○ボールつき

- (5月) 両手、片手でボールをつく。
体勢を低くしてつく姿が目立つ。長くつくことができる子は数人しかいない。
- (10月) 両手や片手で、リズムよくつけるようになってきた。ボールが動く方向に体を移動させ、体勢も高くなり、安定してつけるようになってきた。
- (3月) 片手で安定してつくことができるようになってきた。「あんたがたどこさ」の遊びをすると、ボールを足の外側から内側に向かってくぐらせる子が多い。

○ボール投げ

- (5月) 両手で持ち、頭の高さや、肩の高さから投げている子が多くいる。ボールの勢いが弱く、距離も短い。
- (10月) 両手で頭の高さから両足を踏ん張り投げる。両手でボールをしっかり持つことができるようになってきて、投げる勢いが強くなってきた。
- (3月) 両手で頭の高さから両足を踏ん張り投げたり、足を一步踏み出して投げている。両手で構えている側と同じ足を踏み出している子、反対の足を踏み出している子がいる。

○ボールキャッチ

- (5月) ボールを真上に上げることができず、キャッチすることができない。真上に上げるが、手から離れる距離も短い。
- (10月) ボールを真上に上げることができるようになり、



キャッチできるようになってきた。真上に上げて受け取るまでに手をたたくことができる子もいる。

- (10月) ボールを真上に上げて受け取るまでに手をたたく。高く上げられるようになってきて、たたく回数が増えてきた。

○ボールはさみ

- (5月) ボールを足ではさみジャンプする。しっかりはさめず落ちてしまうこともある。
- (10月) ボールを足でしっかりはさめるようになってきた。ボールをはさんだま前に進むことができるようになってきた。
- (3月) ボールを足でしっかりはさみ前に進む。その場でジャンプすると、高さもでてきた。

<この活動からわかったこと>

「ボールと遊ぼう」のボードを作成し、様々な体の動きを経験できるようにすると、子どもたちは興味を持ち楽しむ姿が見られた。到達基準を記し、チャレンジした所に自分のマークのシールを貼ることで、子どもたちが達成感や喜びを感じることができ、目標を持って挑戦しようとする思い、意欲につながっていった。ボール遊びに興味を持てなかった子や苦手だった子も、目標となる基準ができたことで、友だちの様子に刺激を受けて遊ぶ姿が次第に見られていった。繰り返し経験することで、ボールの扱いにも慣れてきて楽しめるようになってきた。

子どものボール遊びの様子を、園独自で作った「ボールの運動パターン観察表」で確認すると(参照資料①)、急にできるようになるのではなく段階を経て、動きを獲得していることが分かる。ボールに触れ、たくさん使うことで、ボールの特性を知ることができ、ボールを操作する動きを獲得している。個人差はあるので、一人ひとりの発達の実態をとらえていくことが大切だと感じた。

ステップ③ボールを操作する感覚を楽しむ

<環境構成>

1. 投げる動きをたくさん経験できるように、新聞紙ボールを子どもが手作りし、段ボール箱や的を用意する。また、投げ方を意識できるように的までの距離や高さを変える。
2. ボールを投げるだけでなく転がす、蹴る等の動きも

自由に楽しめるようにする。(ボーリング等)

3. ボール以外の物を用いてボールの扱いにつながる遊びを紹介する。(紙鉄砲、紙飛行機等)

<子どもの動き>

1. 新聞紙ボールは軽く、手のひらサイズで持ちやすいため、どの子どもも持ちやすく、扱いやすいので、繰り返し遊んだ。段ボールの箱や的があることで、新聞紙ボールが入ったり、当たったりすると喜んでた。
2. ボーリング遊びでは、ボールを転がしピンを倒し、繰り返し遊んだ。真っ直ぐ転がらず、跳ねたり、投げってしまう子もいた。
3. ボール遊びと同様に、腕の振りや手首の動きのある紙鉄砲や紙飛行機の遊びを楽しむ。繰り返し遊ぶことで体の力みやぎこちなさが減り、紙鉄砲の音が鳴ったり、紙飛行機を飛ばすことができるようになった。



<この活動からわかったこと>

自分で作った手作りのボールや的には、愛着も湧き興味を示す子どもが多く積極的に楽しんでた。いろいろな遊びの中で、投げる、当てる、入れる、転がすなど様々な動きを楽しみ経験することで、ボールを自分の思うように操作する面白さを感じるようになってきた。

ステップ④他者と一緒にボール遊びを楽しむ

<環境構成>

- ・少人数でボールを転がしたりキャッチボールをする。

<子どもの動き>

- ・2人組や3人組になると、相手に向かって転がしたり、投げたりして繰り返し遊んでいた。ボールが違う方向に転がっていくことも楽しく、笑顔で追いかけていた。
- ・転がし中当てでは、ボールを持つとねらうところを定

め勢よく転がそうとしたり、逃げる側も当たらないようにボールの動きを見てよける姿もでてきた。

考察

今回の実践で、ボールで遊ぶ機会を意識的に多く持つようにした。様々な遊びを経験することで意欲的に遊ぶ姿が見られるようになった。経験が深まるとボールの扱いにも影響が表れ、如いては、子どもたちが自信を持つことにも繋がったのではないかと考える。そのことが子どもの成長発達へ波及効果にもなると思われる。

●事例2～「投げる」動きの遊びを中心とした様子～

ボールに興味がなかった子、苦手とする子どもの特徴として、ボールの扱いや体の動きにぎこちなさが見られている。そこで今回は、その子どもの4歳時期、5歳時期のボール遊びの体の動きや使い方に注目し「投げる動作」の動作発達段階の特徴(参照資料②)を参考にして、変化を見ていくことにした。

A児—4歳時期

- ・特徴：体のバランスが悪く、手先も不器用。気持ちが先走ってしまう。
- ・家庭での様子：父・母・弟(0歳) 両親とも就労され、保育時間が長い。現在は、育休取得中のため、短時間保育となっている。家では、ブロックや戦隊ものの玩具で遊ぶ。母との関わりが多かったが、弟の誕生により父との関わりが増えた。父とキャッチボールをして遊ぶようになる。

○ボール投げ

- 5月 ボールを両手で持ち、肩の高さから投げる。体は正面を向いたまま、足は揃っている。両足が揃っているので投げた後、バランスを崩していた。(パターン1)
- 10月 ボールを両手で持ち、肩の高さから投げる。体は正面を向いたまま、足は揃っているが、体のひねりが見られるようになった。(パターン2)
- 3月 ボールを両手で持ち、肩の後方より投げる。体をひねり、ボールを構えている側と同じ足を踏み出している。投げた後は、バランスを崩すことが多い。(パターン3)



A児—5歳時期

○ボール投げ

- 5月 ボールを両手で持ち、肩の後方より投げる。体をひねり、ボールを構えている側と同じ足を踏み出している。(パターン3)
- 10月 ボールを片手で持ち、肩の高さから投げる。ボールを構えている側と同じ足を踏み出している。(パターン3)
- 12月 ボールを片手で持ち、肩の後方より投げる。体をひねり構えている側と反対の足を踏み出している。(パターン4)

<この活動からわかったこと>

「投げる動作」の動作発達段階の特徴(参照資料②)を用いて確認していくと、4歳の頃は、投げる時にバランスがとりにくくぎこちなさが見られている。投げようとする気持ちが、逆に体を固くさせ、本児もやりにくさを感じているのか、すぐにやめてしまうことが多かった。5歳になると、ボールに慣れてきて自分から遊ぶ姿も見られ、繰り返し遊ぶことで、ボールの扱いに見られたぎこちなさや力みも減ってきている。家庭の様子では、父との関わりが増えたことで、体を動かす経験が多くなったと聞く。基本的な体の動きを発達の過程を経て獲得していくには、繰り返し行うこと、継続していくことが必要になってくるのだと感じた。

B児—4歳時期

- ・特徴：何も無い所で転倒する。ボールに恐怖心があり、ボール遊びに消極的。
- ・家庭での様子：父・母 両親とも長時間勤務のため、祖母の自宅で過ごすことが多い。遊びは、家の中で絵を描いたり、ままごとをして遊ぶ。

○ボール投げ

- 5月 ボールを両手で持ち、頭の高さから投げる。体は正面を向いたまま、足は揃っている。両足が揃っているため投げた後、バランスを崩していた。(パターン1)
- 10月 ボールを両手で持ち、頭の高さから投げる。体は正面を向いたまま、足を踏ん張り投げる。距離が伸びてきた。(パターン1)
- 3月 ボールを両手で持ち、肩の高さから投げる。体をひねり、投げる。(パターン2)



B児—5歳時期

○ボール投げ

- 5月 ボールを両手で持ち、肩の高さから投げる。体は正面を向いたまま、構えている側と同じ足を踏み出している。(パターン3)
- 10月 ボールを両手で持ち、肩の後方より投げる。体をひねり、ボールを構えている側と同じ足を踏み出している。(パターン3)
- 12月 ボールを片手で持ち、肩の高さから投げる。ボールを構えている側と反対の足を踏み出している。(パターン4)

<この活動からわかったこと>

ゆっくりではあるが段階を経て投げる動きに変化が見られている。ボール遊びに苦手意識があり消極的だったが、「ボールと遊ぶ」の遊びを紹介すると、自分からボール遊びを選び、友だちや保育士を誘って楽しむ姿も見られるようになってきた。積極的に楽しむことで、ボール遊びの経験も増え、ボールを扱う体の動きにも変化が見られていった。このことから、子どもが興味をもって遊びを楽しむことができるように工夫し、環境を整えていくことも必要だと実感した。

●事例3～ルールのある遊びを楽しもう

ボールを使って様々な動きを経験し、ボールを操作することができるようになってきた。そこで、子どもの年齢を踏まえ、十分に全身を動かし、また、複雑なルールもあり、複合的に楽しめることができるドッジボールを遊びの中に取り入れてみることにした。まずは、いきなりゲームをするのではなく、ドッジボールの要素を含んだボール体験からすすめていった。

当てっこゲーム

(6月の子どもの姿)

5歳児 21名(男9人 女12人)

使用ボール：ビーチボール

場所：ホール

コートの中に子どもが入り、保育者が外に出て投げて当てる。当たっても痛くないように柔らかい材質のボールを選んだことで、子どもたちは安心して楽しむことができた。当たらないようにボールを見て逃げる子や、ボールは見ずに友だちの動きに合わせて逃げている子もあった。当たった子は、コートの外に出て応援し待つことにした。慣れてきてルールも解ってきたので、コートの中と外の2チームに分かれてゲームをした。ボールを投げるが、誰もいない所に投げたり、勢いがなく楽しめないようだった。ボールを持つとねらうこともなく投げ入れているので、よく見て投げるように声をかけた。

(7月の子どもの姿)

使用ボール：ビーチボール

場所：ホール

コートの中と外の2チームに分かれた。以前は、ボールを持つとねらうことなく投げ入れている子が多かったが、ねらいを決めて投げることができるようになってきた。それにより、当たらずに逃げるのが楽しくなってきた。それにより、当たらずに逃げるのが楽しくなってきた。両手で肩の高さから投げたり、頭の高さから投げているが、ラインを意識して足を踏み出せずにいた。その結果、ボールに勢いがなく楽しめない原因にもなっていたので、ラインより離れて投げてみてはどうか声をかけた。



ドッジボール

(9月の子どもの姿)

使用ボール：ビーチボール

場所：ホール

ボールを当てることや、逃げることに慣れてきたので、コートにセンターラインを引き、2チームに分かれた。ラインより離れて投げることで、足を踏み出して投げることができるようになった。ボールに勢いがつくようになったが、腕が振りきれずボールが上向きにとんだり、力んでしまい真下に投げつけてしまうこともあった。

(10月の子どもの姿)

使用ボール：ドッジボール

場所：ホール

ビーチボールを使用してドッジボールを行い、当たることに抵抗がなくなってきたので、ドッジボールを使用した。ビーチボールより、大きさは小さいので投げやすいようだった。両手で頭の高さや肩の高さから投げ、腕を振りきることもできるようになってきた。自分の前に転がってきたボールを拾って投げたり、当たらないように楽しんだ。ボールを待っているのではなく自分で取りに行くことを伝えると、ボールの奪い合いや誰が投げなのかということでもめることとなってしまった。



(11月の子どもの姿)

使用ボール：ドッジボール

場所：ホール、園庭

(子どもの様子)

ルールも理解できるようになったので、2チームに分かれ、外に出た子も再びチャンスがあるように、当てたらコートに戻れるルールにする。ボールを両手で持ち頭の高さから後ろに引いて投げる子、片手で肩の高さから投げる子、ボールを構えている側と反対の足を踏み出し投げる子とある。ボールの奪い合いになったことから、ボールを誰が投げるのか相談したり、順番に回したりする。流れが止まってしまう楽しめないの、ボールをとったらすぐ投げるということを伝える。



(12月の子どもの姿)

使用ボール：ドッジボール

場所：ホール、園庭

(子どもの様子)

ルールを理解し、子どもたちで遊びを進めることができるようになる。片手でねらって投げる子や、助走をつけて投げる子、ボールをよけようとして体をそらしたり、しゃがんだり、ボールを受けとめる子も出てきた。コートの中と外にいる子ども同士で声をかけあいボールを回してゲームを楽しむこともできるようになりスピードも増し、友だち同士、誘い合い楽しむようになってきた。



V. まとめ

今回、保育の中で体を動かす遊びを取り組んでいく必要性を感じ、身近にはあったが十分に活用できていなかったボールを使用して、ボールを使った遊びを取り組む

ことにした。身近にボールはあるが、ボールを使った遊びが好きか嫌いか、また、ボール遊びのような体を使った経験が家庭内でできる環境にあるかないかといった環境の違いによって子どもの姿は様々で、そのことによって同じ年齢であってもボールの扱いに個人差があるように考えた。そこで初めは、ボールに興味を持つこと、慣れることをねらいとしてボールを使った遊びを活動中に意識的に計画した。すると、ボール遊びに興味を持てなかった子どももボールを選んで遊ぶ姿が見られるようになった。また、実践を進めていく中で、保育士が子どもの年齢や発達に応じた様々な体の使い方をねらいに持つことで、どの子どもも無理なく楽しむことができるようになり、一人ひとりの発達に応じた遊びができるようになったと考えられる。更に改めて実感したことに、様々な体の動きを繰り返し繰り返し経験することで、その動きを獲得することが多く、年齢が大きくなったからといって当然できるようになるものばかりではなく、小さい年齢の時から様々な体を動かす遊びに慣れ親しんでいる事が大事だと確認した。また、その他の姿として、周りにいる友だちや保育士と一緒に楽しむことで刺激を受け

たり、憧れの気持ちを持ちやってみようとする姿が見られ、一緒に楽しさを共有すること、体を動かす心地よさを感じることで、体を動かす遊びにおもしろさを感じていくのだと実感した。

これからも、発達に応じた様々な動きができる遊びを積極的に取り入れ、子どもが自発的に楽しめる環境を工夫し、体を動かす遊びを十分に行いしなやかな体づくりに取り組んでいきたい。

参考文献

・杉原 隆・川邊 貴子 編著

「幼児期における運動発達と運動遊びの指導～遊びのなかで子どもは育つ～

ミネルヴァ書房（2014年5月30日）

・幼児期運動指針ガイドブック—毎日、楽しく体をうごかすために—

幼児期運動指針策定委員会

文部科学省（2015年）

講評：遊びを通してしなやかな体を育てよう

評者：小林 芳文

子どもたちの生活に身体全体を使った遊びが十分に行われていない現実、色々な機関での専門家等による報告があります。私達はそのことをしっかり受け止めて、子どものバランスの良い成長・発達を支援していかなければなりません。そこに保育所の保育の果たす役割は、かなり大きいと言えます。

このテーマは、遊びを通してのからだづくりを全身運動になる「ボールを使って」多様な動きを進められたこと、その展開においても、幾つかのステップを取り入れたことの視点が良かったです。特に、ステップ③での投げる動きを沢山経験できるようにと、また操作する感覚を楽しむようにと身近な新聞紙を使った手作りボールと段ボール箱、ボーリング、的の用意を入れたことのアプローチが素晴らしいと思いました。

まとめにもあるように、ボールに興味を持てなかった子どももボールを選んで遊べる姿が見られるようになったこと、また保育士が実践を進める中で、年齢や発達に応じた様々な体の使い方や遊びの方法に気づかれたこと、これからの保育に大きな収穫のある実践になられたこと、価値ある研究になりましたね。ボール遊び等運動が苦手な子どもの事例の対応について、今後も展開された報告を期待しています。

評者：石川 昭義

日中の保育の中で体を動かす遊びを十分に組み込んでいく必要があるとの課題意識のもとで、計画的にボール遊びを取り入れた実践の報告が展開されています。事例と考察では、多様なボール遊びの楽しそうな様子が描かれており、「ボールの運動パターン観察表」や「投げる動作の発達段階の特徴」などの指標を用いて、子ども一人ひとりの状況を捉える努力をしている点は評価できます。文中には、身体の「ごちなさ」、「力み」といった表現が見られましたが、表題の「しなやかな体」

とはどういう状態を意味するのかについて、ボール遊びとの関係性から定義をしておく、観察の際の着眼点がより明確になったと思われます。

本文にもあるように、運動においては消極的であったり、苦手であったりする子どもがいます。そのような場合の個別対応あるいは集団ボール遊びにおける対応について、経過の説明があるとよかったです。今後はボール投げ（距離）の測定記録を定期的に付けるなど客観的なデータを取ったり、集団でのボール遊びのルール理解の過程を観察したりしながら、子どもの成長を考察することが期待されます。

評者：酒井 かず子

遊びを通してしなやかな体を育てようというテーマでボール遊びに着目し、ボール遊びを保育の中で計画的に取り組みされたことに、関心を持ちました。

車での送迎が当たり前となり、保育時間の長時間化等により、当然、保育園での活動が重要になってきます。そこで、1年目の反省点を2年目に生かし、種類や大きさの違うボールを用意したり、ボードを作成し、達成感を感じるようにしたり、ボーリングや的当て等、ゲーム感覚で楽しめるようにしたりと、ボールに親しむことを十分に行ってからドッジボールに取り組み、ルールも分かるようになり、スピードのあるボールが投げられるようになったり、参加人数が多くなったりと、ボール遊びの成果も大きく、運動機能も増したように思います。

まとめの中に「様々な体の動きを繰り返し経験することで、その動きを獲得する」とありましたが、まさにその通りで、歩き始めた子どもは歩くために歩きます。平素の保育の中で歩く、走る、飛ぶ等の基本的な運動量を増やすことで、動くことがスムーズに出来るようになり、その土台の上に用具を使った遊びを行うとさらにしなやかな動きが出来るようになるのではないかと思います。貴園での研究がさらに高められることを楽しみにしています。

(3) 実践奨励賞

〈実践報告部門〉

- ・「自ら遊べる環境作り～やりたいことをとことんやれるを考える～」

渡部 誠也、倉根 靖子

(埼玉県・(公財) 鉄道弘済会与野本町駅前保育所 (おひさま保育園))

- ・「絵本の世界への興味・関心から広がる探求の物語

～絵本を見直すことから見えてきたこと～

杉山 典子、二神 美絵

(研究会員・福岡県・(公財) 鉄道弘済会戸畑保育所 わかば園)

- ・「保育ドキュメンテーションの導入から保護者支援、

連携の在り方を模索する」

砂川 幸 (沖縄県・ひよどり保育園)

- ・「保育環境の充実と危機管理伝達に向けて」

野原 裕実 (沖縄県・第2 愛心保育園)

自ら遊べる環境づくり

～やりたいことをとことんやれるを考える～

埼玉県・与野本町駅前保育所（おひさま保育園）

執筆担当者：渡部 誠也・倉根 靖子

キーワード：感触遊び・環境構成・遊び込む

I. はじめに

保育をしている中で近年の子ども達の遊びを見ていると、保育士に「何か作って」、「絵を描いて」と、受動的に遊ぶ子どもが多くなってきているように感じる。自主的に遊びを見つけたり、物を作り出したりする事が苦手な子どもが多くなっている。保育士に作ってもらった物で遊んでいるので、遊びが発展せず、集中する姿も少なくなっている。同時に、自分達の保育を見つめ直すと、保育士もつい作ってあげてしまう場面が増えている事にも気付いた。遊びを自ら見つけ、考え、それを形にするために素材や道具を選び、発展させていく力が自然と身に付いていく環境に改善していきたいと考えた。

II. 研究の目的

- ・年齢や発達に合わせた遊びを考え、実践していく中で子どもの積極性を育てていく。
- ・環境構成を見直し、自由に遊びを選べる保育室を作り、自分でやってみたい、作ってみたいと思えるような環境をつくる。

III. 研究の方法

- ・各年齢で、様々な遊び（感触遊び・環境設定）を行う。
- ・1歳児クラスは、小麦粉や砂の感触遊びから入り、指先での遊びに慣れ、小麦粉粘土で遊んでみる。2歳児クラスは、昨年度行った感触遊びを再び行い、昨年度との違いや成長を見ていく。
- ・3～5歳児クラスは、平成27年度に行った空き箱製作や折り紙製作の経験を活かし、年齢別やお相手さん同士で空き箱製作を複数回行い、披露する場を設ける。
- ・空き箱製作や折り紙製作、粘土遊びなどの各遊びを自由に出来る環境作りを考え、保育室を改造し、作った物を披露できる場所も設ける。

IV. 事例と考察

【事例1】感触遊び ～様々な物に触れて～

1、2歳児でも楽しめる感触遊びを探していたところ、当園の子育て支援センターで行っていた小麦粉粘土作りをやってみようという案が出た。材料も簡単に用意する事ができ、食紅で色も付けられるということだった。

〈平成27年 1歳児 はじめての小麦粉〉

初めての感触遊びなので、まずは保育士が小麦粉に触っているところを見せてみた。小麦粉の入っている箱を置き、保育士が触り始めると、何をしているのかな？という感じで数人小麦粉の箱に近づいてきた。保育士が「触ってごらん。気持ちいいよ！」と声をかけると恐る恐る触ってみる子ども達。その姿を見て他の子ども達もとたくさん近付いてきた。しかし、いざ触る段階になると子どもの中には躊躇してしまい、楽しんでいる友達の様子をじっと観察している状態がしばらく続いた。抵抗なく触れた子どもは、サラサラの小麦粉をそっと指の先につけてみたり、つんつんと指で押してみたりと、感触を確かめながらだんだんと両手で触るようになった。「サラサラだね」「お塩みたい」と子どもと保育士等の会話の様子をそばでじっと見ていた数名の子ども達。それまで小麦粉に触ろうとしなかったが、楽しそうな様子を見て触ろうとする仕草を見せてきた。保育士が腕や手のひらに少しだけ付けたり、形を作ったものを見せたりしていったところ、だんだんと緊張がほぐれていき、自分から指を近づけてつんつんと触る様子が見られるようになった。



感触に慣れてきたので、次にじょうろで水をかけてみた。

だんだんベタベタの感触になり、手から小麦粉が取れなくなると、さっきとは違った感触に手を引っ込めて触わらなくなる子、夢中で触り始める子と様々だった。保育士がこねる所を見せながら、「一緒にこねこねしてみよう！！」と言葉をかけると、一緒にこね始める子が徐々に増えていき、「やわらか～い」と小麦粉粘土の感触を楽しめるようになっていった。次にヨーグルトカップやお皿を用意した。中にたくさん詰めたり、載せてみたりと夢中で遊ぶ姿が更に増えていった。



《平成28年 2歳児 in食紅》

1歳児で小麦粉粘土遊びを何度か経験したことで、ほとんどの子どもが楽しめるようになった。

小麦粉粘土での形作りが発展していき、作るもののイメージがもっと広がるのではないかと、小麦粉に食紅を混ぜて色を付けてみた。白い小麦粉粘土に食紅を混ぜることで、少しずつ色が変わる様子を見て、「ピンクになった」「トマトみたい」など、期待しながら友達や保育士に話したり、作りたい物を想像したりしている姿が見られた。しばらくすると、野菜や果物、ケーキなどの身近な食べ物を作ろうとする子が増え、自然な流れでままごとや見立て遊びへと移行、発展していく姿が見られた。



【考察】

1歳児では初めから出来上がった小麦粉粘土を渡すのではなく、小麦粉から触る事で、苦手意識がある子どもも自然に触り始めることが出来ていた。なかなか触る事ができない子どもも無理には誘わず、保育士や友達を楽しむ姿を見せる事で興味を持ち始め、自分から触り始める子どもが数名いた。

2歳児クラスでは、1歳児の時にいった感触遊びを再び行い、違いや成長を確認した。1歳児で何度か感触遊びを体験していたので、初めから抵抗なく楽しめる子どもが多かった。感触を楽しむ事から、自分で想像した物を立体的に作り出そうとする姿へ変わった子どもが増え、成長を感じた。

【事例2】空き箱製作

<縦割りクラスの状況>※図1

廃材製作や折り紙製作の経験を活かし、年齢別やお相手さんで廃材製作を数回行い、披露する場を設けた。保護者や保育士等に家庭にある空き箱や廃材を持って来てもらえるように募集をかけた。

図1 縦割り保育

| | うみぐみ | やまぐみ | 合計 |
|-----|------|------|----|
| 3歳児 | 7 | 7 | 14 |
| 4歳児 | 7 | 7 | 14 |
| 5歳児 | 7 | 8 | 15 |
| 合計 | 21 | 22 | 43 |

《3～5歳児 動物園を作ろう！！①》

まずはお相手さん同士で作ってみた。5歳児は何を作

りたいかすぐに考え始めてた。3歳児は友達同士で楽しそうに動物の名前を言い合って盛り上がっていた。

4歳児同士のペアは相談をするが、お互いの意見がまとまらずにいた。製作を開始するまでに様々な様子が見られた。保育士が開始の合図を出すと一斉に空き箱に集まり、思い思いの箱を選んでいった。取る量も様々だった。

作り始めると5歳児を中心にはさみやセロテープを使い、空き箱を組み合わせていた。胴体に顔をくっつけて、足やしっぽなどを足していき、なんとなく動物の形になっていった。5歳児の男の子が「足がグラグラしてしまう」という質問があった。



そこでトイレットペーパーの芯に切込みを入れ、広げて接続する方法を教えた。ハッとした表情を見せて作業に取り掛かったが、5歳児一人では上手くできなかった。困っていると3歳児のお相手さんが「抑えてあげる」と協力する姿が見られた。保育士等にも認められて二人は嬉しそうに作業を続けた。

楽しく製作をする姿がたくさん見られたが、作りたい動物の具体的なイメージが湧かず、平面的なものを作る子どもも多くいた。

《3～5歳児 動物園を作ろう！！②》

お相手さん同士での製作を数回行い、作り方が分かってきたので、個別で製作を行った。今までの反省から作りたい物のイメージが湧きやすくなるように、絵本や図鑑を何冊か用意してみた。



図鑑の中から作りたい動物を探し、しっぽの形や体の模様などをじっくり観察してから必要な材料を取りに行く姿が多く見られた。前回空き箱で立体を作っていく方法や、どの素材が何でくっつくのかなどの方法を知ったことで、立体的で特徴を掴んだ物がたくさん出来てきた。作ったものはロッカーの上に展示することで、登降園時に保護者と子どものコミュニケーションのきっかけにもなった。



ロッカー上に展示



ステージ上に展示

【考察】

空き箱製作を経験したことで、普段の遊びの中で作り上げるものが、平面から立体へと少しずつ変化してきたことはイメージを形に出来ていると感じる。しかし、楽しんで取り組んでいたが、保育士が「空き箱製作」として時間を設けたので、その場限りの一斉活動（イベント）になってしまった。保管や完成作品、未完成作品の展示方法などの面で保育士がある程度の時間や場所を決めなければならないなどの問題点が浮かび上がった。好きな時に自由に遊び込める環境作りの必要性を感じた。

【事例3】3～5歳児 保育室改造計画

《平成28年度遊びが選べるって楽しいね》

2年目の反省を活かし、自由に好きな遊びを選べる環境作りを整えていくことが必要だと考えた。そこから大々的に保育室の改造を行う事になった。どのような保育室が子ども達にとって良いのか話し合いを重ね、試行錯誤をしている時に、公開保育を当園で行うことが決まり、三谷講師にご指導いただける機会を得た。その中で環境設定の大事さを痛感し、コーナー遊びを自由に楽しめる保育室へと少しずつ改造していった。



改造前



改造後



空き箱製作コーナー



改造した保育室を見て子ども達は驚きと共に大変喜び、早速空き箱製作を楽しむ姿が見られた。保育室の行き来が廊下を出ずに出来るようになった事で以前より開放的になり、クラス間の交流が増えていった。

想像したものを形にしたり、それを使って遊びを発展させていったりする姿が日に日に増えていった。自分で展開した遊びに熱中し、遊び込む姿が多く見られるようになっていった。



＜エピソード① 粘土遊び＞

保育室の改造を行うまでは、自由遊びで粘土を選ぶ子どもは少なく、雨の日などにみんなで遊んでみても型で抜くだけだったり、丸めたり細長くするくらいですぐに飽きてしまい、遊び込んでいるという姿からはほど遠い状態だった。いつでも好きな遊びを楽しめるように環境設定を変えると共に、遊びの中に感触遊びや空き箱製作を取り入れたことで、立体の物を作る手法や楽しさに気付いていき、粘土遊びでも自分の想像した物を形にして楽しむ姿が徐々に増えていった。

～ある日の自由遊びでの場面～

5歳児の女の子たちが粘土遊びに夢中になり、粘土で細かい食べ物やインテリア、装飾品などを作るようになった。

作るものが細かくなってくると一日では完成できない事も多くなった。そんな時子ども達から保育士等に「飾っておいて、明日また続きをしていい？」と要望があった。その要望を保育士等が受け入れると「やったー。また明日〇〇ちゃんと一緒に作るんだ！！」と嬉しそうにロッカーの上に飾って母親と降園していった。



次の日にまた続きをし、何日もかけて作品を完成させるようになった。飾っておけるようになった事で、お迎えが来るとさっと切り替えて降園出来る子どもも増えていった。降園する前にロッカー上に飾られた作品を見ながら、保護者と会話を楽しむ姿も見られ、親子のコミュニケーションの場にもなっていった。



5歳児作品



3歳児の作品

しばらくして、その作品や作っている様子を見た3歳児、4歳児が数名仲間に入ってきて、見様見真似で作るようになった。1、2歳児の時に感触遊びをたくさん経験してきているので、粘土遊びにも自然に入っていく姿がたくさん見られた。5歳児の真似をして、完成したものをロッカーの上に飾り、見せ合いっこを楽しんでいた。5歳児も作り方を教えたり、手伝ったりして異年齢の交流が増えるきっかけにもなった。



ある時には5歳児が動物を作ったことがきっかけになり、動物作りが流行り、素敵な動物がたくさん出来てきた。そこで男児より「どこかに飾りたい！」と保育士等に伝えてきたので「じゃ、動物園作ろうか？」と動物園風の飾り棚を作ってみた。

それを見て喜びながら飾る子ども達。飾ってある動物を見て、「私も作ろう！」と徐々に動物の数が増えて、『おひさま動物園』が完成した。



<エピソード② アイドルごっこ>

将来の夢は「トップアイドルになる事」といつも保育士に話している5歳の女兒たち。保育室にあるおままごと用の衣装を着て、毎日アイドルごっこを楽しんでいた。衣装を着るだけでは物足りなくなったようで、「マイク作ってもいい？」などとアイテムを作ることを考え、よりアイドルに近づこうとしていた。

製作コーナーでヨーグルトのカップと、ラップの芯を見つけてきて、素敵なマイクを完成させた。衣装を身に付け、出来上がったばかりの特製マイクを持ちアイドルになりきって、みんなに歌とダンスを披露していた。

それを見ていた5歳男児「カメラを作りたい!!」。3歳女兒数名「私達もマイク作りたい!!」と声を掛けてきた。みんなで材料を探し、はさみやテープを出して



すぐに作り始めた。

出来上がったマイクを持ち、嬉しそうに歌う3歳女兒たち。それを撮影する5歳男児。自ら考えた遊びを自分たちの力で形にして、それを見た周りの子達が遊びを広げていき、みんなで楽しめた瞬間だった。



カメラを完成させたS君



アイドルに憧れる3歳児

【考察】

環境構成を変え、感触遊びや空き箱製作を取り入れたことで、粘土で作る物も平面的な物から立体的な物へ変化していき、作れば作る程、想像力も膨らみ、新たな作品が生まれていく姿が増えていった。また粘土遊びに対する子ども達の意識が「何となく遊ぶもの」から「とことん遊び込めるもの」に変わっていった。作ったものを展示出来るようになった事で創作の意欲も湧き、遊び込む姿も多数見られるようになった。5歳児の作る様子や作品を見て、3・4歳児が真似をしたり教えてもらったりして上達していくという、縦割り保育ならではの良さで、影響を受け合っていく姿も見ることができた。

空き箱製作は、ただ繋げるだけの物から自分が作りたていのものを工夫して作り上げ、それを使って遊びを広げていけるようになった。どの遊びも友達や保育士の声が聞こえなくなるほど集中して取り組む子どもも多くなり、環境変化の効果を改めて感じる事が出来た。

V. まとめ

3年間にわたり、『自ら遊べる環境作り』をテーマに、自分達で遊びを見つけ、その遊びを広げていく力を身に付けられるようにしていくにはどうしたらよいか、保育士間で話し合いをして、悩み、色々な事を試してきた。

1、2歳児で小麦粉粘土以外に片栗粉や絵の具、泥んこなど、様々な素材に触れながら造形に慣れ親しんできたので、3歳児になった時に粘土遊びで立体的な物を作ったり、自分で考えた物を自然に形にしたりすることが出来ていた。1、2歳児で体験、経験した事が3歳以上児になった時に大きく活かされてくることを強く感じる事が出来た。

そして、自由に好きな遊びを選べる環境作りをしたいという保育士達の思いを実現するため、試行錯誤をしながら保育室の改造を開始した。平成28年度に行なった公開保育が良いきっかけになり、子ども達が遊びを自由に選び、遊び込める環境を整える事が出来てきた。改造してまだ日は浅いものの、改造前とは見違える程遊びの内容が変わり、自分の選んだ遊びにのめり込み、没頭している姿を見て改めて保育をしていく上で環境の大事さを痛感した。

また、保育室を改造した後、保護者から「開放的になりましたね」「遊びが継続できるのはとてもいいですね」「遊び込んでいる様子がわかります」などの反応があり、降園時に作った物を一緒に見て、楽しそうに会話をする姿も多く見られるようになった。環境を変えたことで、様々な面で効果が出ていることを感じる事が出来ている。

今回の環境改善に満足せず、日々の保育の中で一人ひとり人が感じる改善点や疑問点などを職員みんなで考え、話し合い、さらにより良い環境作りを目指していきたいと思っている。

文献

参考文献

・「保育方法・指導方法」

大豆生田啓友・渡辺英則・森上史朗 編

ミネルヴァ書房

講評：自ら遊べる環境作り

～やりたいことをとことんやれるを考える～

評者：清水 益治

次の3点が評価できます。①子どもの主体性を重視した保育を展開するために、1・2歳児では小麦粉粘土を使った感覚遊びを取り入れた点。②子どもの主体性を重視した保育を展開するために、3歳以上児からなる縦割りクラスでは廃材制作や折り紙制作の経験を活かして動物園作りをプロジェクトのテーマとして設定した点。③子どもが自由に遊びを選択できるように保育室を改造した点。

今後、次の3つのことを期待します。①子どもを主体とした保育を、継続的に、かつすべての年齢で統一して展開して下さることを期待します。②子どもを主体とした保育を展開するために、保育士の資質や能力を高め続けることを期待します(実践の振り返りを推奨します)。③実践報告としてまとめる場合は、時系列に沿って取り組みを紹介すると共に、様々な観点から実践の評価を行い、それらを示していくことを期待します。

評者：酒井 かず子

最初の二年間は小麦粉粘土や空き箱製作、動物園等の設定により、子ども達の経験を深め、さらに発想をどんどん取り入れて発展させてきたが、その活動の反省を生かし、設定ではなく、いつでも自由に好きな遊びを選べる環境を整えたいと考え保育室の改造を行いました。各種のコーナーを作り、保育士主導ではなく、子ども自らが主体的に活動し、子どもの発想がさらに広がり、集中力も高まり、大きな変化が出てきたことは素晴らしいと思います。

保育士の皆様も、子どもが目を輝かして活動している姿に、さぞかし感動し、保育の面白さや楽

しさを味わった事と思います。

異年齢の子ども達と一緒に活動していると、興味やレベルが違いますので、それに対応でき得るだけの種類の遊具や量を用意する事やコーナーの数も増やし、一人ひとりが取り組みやすく、集中しやすいような遊具の配置やテーブルの配置等を研究されるとさらに質の高い保育になると思います。大変に楽しみです。

評者：馬場 耕一郎

本研究は、保育士が子どもとの関わりの中で遊びが受動的になっていることに気づいたことから取り組んでいました。些細なやり取りの中から問題意識を持つことは、熱心に関わっている現れであり、模範的な対応だと思います。大変興味を持って読ませて頂きました。

様々な素材に触れる所から始まり、遊びが遊び込む活動に発展し、さらに保育室の改造まで発展した取組みには、情熱を感じました。保育室が変わることによって、遊びが継続できるようになった点は、他の保育所においても参考になると思います。固定概念にとらわれず柔軟に対応する姿勢は参考にしなければならないことだと思います。

今後の発展を考えると、製作を通して一人ひとりの成長をより丁寧に観察する点が必要になると思います。一人ひとりの成長を温かく見守り、保育室がより充実することを楽しみにしたいと思います。

〈実践報告部門〉

絵本の世界への興味・関心から広がる探求の物語 ～絵本を見直すことから見えてきたこと～

戸畑保育所（わかば園）

執筆担当者：杉山 典子、二神 美絵

キーワード：探求・見直し・子どもの育ち

I. はじめに

近年、ゲームや携帯電話、インターネット等の普及により親子で会話をしたり、絵本を見たりというコミュニケーションを図る機会が少なくなったように思う。

今、この現状を受け入れながらも子どもたちにとって良いことは？と考えると、私たちの身近にある絵本の良さや大切さを保護者に伝え、その中から子どもの育ちが見えてくれば良いと考えた。

絵本を読むことにより、言葉の力、思考力、聞く力、想像力、好奇心などいくつもの恵みを持たらせてくれると言われている。

親子で楽しみながら絵本を見たり、触れ合ったりし、絵本が生活の一部となるように働きかけていきたいと思い取り組むこととした。

II. 研究の目的

- ・保護者や子どもたちに絵本の大切さを知らせ、沢山の絵本に触れてもらう。
- ・親子で楽しい時間を共有してもらえよう、園からの発信をしていく。
- ・絵本を通して命の大切さに気づいたり、友達との関わりを深め、コミュニケーション能力を高めていく。

III. 研究の方法

- ・職員全体で絵本についての見直しをし、話し合いを行う。
- ・本棚の整理整頓を行う。
- ・アンケートを実施する。
- ・研修で学んだことをお知らせボードで掲示する。
- ・保育士お勧めの絵本の紹介をする。
- ・絵本の読み聞かせを通して2016年4月～2017年6月までの子どもの様子を記録にとり、遊びにつなげていく。

IV. 事例と考察

〔事例1〕 絵本の貸し出しの見直し

我が園では、数年前からクラスで1回、保護者と1回、合計月2回絵本の貸し出しをしていた。

当初、絵本を借りるといった習慣がなかったため、園で保育士と一緒に絵本を借りて家に持って帰っても読むのか？破ったり、落書きしたり、無くしたりするのは

ないか？など、マイナスの考えが強かった。

そして、今までの絵本の貸し出しについて、これが当たり前という気持ちで過ごしていた。

しかし、絵本の研修を受けた時の講師から「どうして子供が借りたい時に絵本を借りられないのか？」「どうして月に2回しか借りられないのか？」と問われた時に「どうしてだろう？」「そうだよ」と思い、貸し出し当初の事を振り返ってみることにした。

そこで、職員一人ひとりに今の貸し出し方法の課題や改善方法の提案などのアンケートを配布し、絵本に対する思いを記入してもらった。

集計の結果、以下のような課題が出てきた。

- ・絵本の貸出日が少ない。
 - ・絵本棚の分類ができてなく、分かりにくい。
 - ・年齢にあった絵本が少ない。
 - ・貸出カードが個別なので一人担任は負担になる。
- 話し合いの結果、今できることを取り組むことにした。取り組みは以下の通り。
- ・月に2回の貸し出しから、週に1回の貸し出しに増やす。
 - ・保育士のお勧め絵本の紹介をする。
 - ・差し込み分類インデックスにより、作者、シリーズ、年齢別に分類する。
 - ・クラスで読んでいる絵本を集め貸し出しができるようにする。
 - ・個人カードから、各クラスごとの用紙に変更する。



◎2ヶ月の準備期間を経て6月の保育参加を利用し、保護者への発信を開始した。

◎4ヶ月後の10月に保護者に絵本についてのアンケートを実施した。

◎10月、保育士が「子どもに絵本を・・・」の研修に行き、学んだ事を保護者に発信する。

<エピソード1> N・E（2歳児）

絵本を見るのが大好きなEちゃん。週1回絵本は借りているが降園時は、必ず絵本棚の前に座り込み、何冊も絵本を見て自分が納得するまで帰ろうとしない。母親が「帰ろうね」「外が暗くなるから」と声をかけても全く耳を傾けず絵本を見続けている。母親は困った表情をしていた。

そんな日々が続いたある日、母親から連絡帳を通して相談を受けた。その内容は「玄関前に絵本があり、毎日カーテン（絵本棚の）が開いているので帰ろうとせず、長い時間絵本を見るので困っています。それが私のプチストレスです」とのことだった。

数日後に、懇談を控えていたEちゃんだったので、その日の返事は「お母さんは帰ってからも忙しいのに大変ですね。Eちゃんは絵本が大好きなので満足するまで見たいんでしょうね」と返事をした。

後日の懇談で、母親と話をすることにした。

すると以前と変わらない姿に母親は未だストレスを感じているようだった。

そこで保育士はEちゃんの園での様子を伝えることにした。最近のEちゃんは、しっぽ取りゲームや椅子取りゲームなど簡単なルールのある遊びを楽しめるようになったり、お片付けが上手になってきているので、絵本を借りる時もルールが守れるのではないかと思い、お母さんとEちゃんとの間で約束を決めてはどうか？とアドバイスをした。例えば「今日は2冊まで・・・」「今日は1冊読んでお買い物に行くよ」など・・・。その言葉を聞いた母親は「そうですね、やってみます」と素直に受け入れて次の日から早速実践していた。するとEちゃんは母親と約束したことを守り、スムーズに降園することができるようになった。また、母親の時間にゆとりがある時は十分に絵本を見て帰る姿が見られている。

<考察>

絵本の貸し出しを見直すことで、以前より沢山の子どもが絵本に触れる機会が増えた。アンケートの結果からもわかるように「親子の時間が増えた」「絵本と触れ合う時間が増えた」「〇〇先生のお勧めの絵本が参考になった」など嬉しい内容のものも多くあった。

その反面、エピソード1では、保育士が思う「絵本との関わり」と母親が思う気持ちに少々ズレがあり、悩んでいる姿が見られた。

しかし、今回懇談を行い、母親の気持ちを保育士が受け止めアドバイスをすることにより、母親のストレスも少しは軽くなり、表情も和らいだように見えてきた。その姿を見て保育士と母親とのズレも少しは縮まったように思う。

[事例2] 1歳児クラス

◎絵本「かおかおどんなかお」

進級した当初は、クラスの中が落ち着かず、喜んで絵本を見る子どももいれば、周りが気になり、集中して見ない子どもに分かれていた。

そこで保育士は、子どもたち全員が落ち着いた雰囲気の中、絵本が見られるようにするには、どのような工夫をすればよいのか、クラス内で話し合いをし、実践することにした。

- ・絵本を読む前に、子どもたちの好きな手遊びをして、保育士の方を向くようにする。
- ・読み手の保育士の他に、もう一人子どもと一緒に絵本を見る保育士が傍につく。
- ・絵本の読み聞かせ中に行っていた布団敷きを、ある程度、事前に行うようにする。

このように環境を整える事で、子どもたちの興味は少しずつ絵本に向けられるようになってきた。

そこで、子どもたちと一緒に掛け合いを楽しめる「かおかおどんなかお」の絵本を選び、午睡前の時間を利用して、子どもたちに読み聞かせをする事にした。

絵本の内容は、「わらったかお」「ないたかお」「おこったかお」「ねむったかお」など、色々な表情が書かれていて、保育士は、「ニコニコ」「エーンエーン」「プンポン」「グーグー」と表情を作りながら読んでみた。

しかし、子どもたちの反応は特に見られず、絵本をじーっと見ているだけだった。

次の日も、また次の日も、繰り返しこの絵本を読んでいるうちに、子どもたちは反応を示すようになり、絵本の時間には、急いでいつもの定位置に座って心待ちにしている姿が見られようになった。

保育士：「わらったかお、ニコニコ～」

と表情を作りながら読むと、

子ども：保育士の真似をして、頬に人差し指を立てながらニコニコ顔をする。

同様に、泣いた顔、怒った顔、眠った顔も身振り手振りで表現しながら表情を作っていく事を楽しんだり、絵本の読み聞かせの時間が楽しみの一つとなった。



<エピソード1> Y・H（1歳児）

噛みつきが起きたある日、保育士が噛みつかれた子どもと、噛みつきをした子どもの対応をしていると、Hち

ゃんが噛みつかれた子どもの顔を覗き込んでいる。

Hちゃん：「いたい？」

「エーンエーン？」と言いながら、泣いた表情を作って、頭を撫でてあげる姿が見られる。

保育士： 噛みつかれた子どもの対応をしながら、Hちゃんに対しても「噛まれたら痛いよね」「エーンエーンね」と声をかけ、Hちゃんの優しい気持ちを受け止めた。

Hちゃん： 今度は、保育士に共感してくるように口を尖らせて、「ダメね。プンプンね」と保育士の顔を覗き込んでいる。

保育士： Hちゃんと同じ表情を作り、「ダメね。プンプンね」と応えた。

10月

すっかりお気に入りの絵本になったこの絵本を、何か遊びに繋がられないか、クラスの中で話し合いをし、顔のパーツが福笑い風の手作りパネルを作る事にした。

子どもたちは、「めー」「くちー」と言いながら、マジックテープをつけたり外したりしながら、集中して遊びを楽しんだ。

出来上がりは、目が離れていたり、口が曲がっていたり、面白い表情のパネルが出来上がり、保育士は「上手にできたね」と声をかけた。子どもたちは、そのパネルを得意気に見せる姿が見られた。



12月

この絵本は、沢山の表情を楽しむ事ができ、みんなの大好きな絵本の一冊となった。

表情を作るかわいい子どもたちの姿を保護者にも見てもらいたいと思い、生活発表会に取り入れる事にした。

内容は、動物の役になった子どもたちが、「笑った顔駅」「泣いた顔駅」「怒った顔駅」「眠った顔駅」と4つの駅で停車し、幸せなら手をたたこうの替え歌を歌いながら表情を作るという、絵本を少しアレンジした内容のものにした。

歌の最後に「ニコニコー」と頬に人差し指を立てて笑う姿や、「エーンエーン」と泣き真似をする姿、腕を組み「プンプン」と怒る姿はとても可愛く、見ている保護

者からも笑みがこぼれ、大変喜んでもらえた。



2月

降園時、保育士が絵本棚の前を通りかかると、本を手を持っているTくんの姿が見られた。

保育士：「何の絵本を借りているのかな？」

と声をかけると、

母： 「必ずここでこの絵本を見て帰る習慣になっているんです。」

と言ったので、保育士がTくんの手元を見てみると、「かおかおどんなかお」の絵本を持っていた。

保育士：「大好きなんですね。お家でゆっくり読んであげて下さいね」

母： 「わかりました。多分ずっとこの本を好きでいてくれると思います」

と言って、Tくんと一緒に絵本袋に入れて持って帰った。

4月

進級してからもクラスでこの絵本を読んでいる。

以前は表情を作って楽しんでいただけの子どもたちが、最近では、はっきりとした言葉を発するようになり、内容を言いながら表現するようになってきた。

<考察>

初めは、興味を示さなかった絵本だったが、環境を整え、繰り返し読み聞かせをしていくことで、絵本への興味も深まり、集中して見られるようになった。改めて、環境を整える事は、とても大切だと実感した。

12月の生活発表会では、表情を作るのが苦手な子どもも、自分の出番ではないところで保育士の真似をして、楽しそうに表情を作っていき姿が見られた。

また、子どもと保育士が掛け合いを楽しみながら読んでいた絵本だったが、噛みつきが起きた時のHちゃんのエピソードにもあるように、生活の場面でも絵本に出て

くる表情を楽しんだり、他人の気持ちに共感する姿が見られた。

一年間、繰り返し読んできた絵本を通して、子どもたちが成長する姿を見られたことや保護者からの素敵な言葉をもたらす事ができてとても嬉しく思う。

この絵本は、幼少期の思い出に残る絵本の一冊として、ずっと心に残るものであってほしい。

現在・これからの取り組み

昨年度は、保育士お勧めの絵本の紹介をしたが、今年度は、保護者にもお勧めの絵本を、紹介してもらうようにした。

また6月の保育参加では、絵本の内容を子どもたちと一緒にまねっこしたり、読み聞かせをしてもらうなど、保護者参加型の取り組みを考えている。

V. まとめ

今回、保護者や子どもたちにも沢山の絵本に触れてもらう為にはどうしたらよいか？絵本の大切さや良さを知ってもらうにはどうしたら良いか？ということを職員全員で考え、話し合いをし、絵本の貸し出しや本棚の整理整頓など、出来る所から見直す事とした。

私たち保育士が、保護者に発信をしたり、前向きに改善を行うことで、保護者の絵本に対する意識も少しずつ

変わってきたように思う。

今では、夕方のお迎えの時、親子で楽しく絵本を選び借りたり、一緒に読んでいる姿が多くなってきたので、とても嬉しく思う。この事例研究を行うにあたって、絵本の大切さを改めて知ることができた。日々の保育の中で、子どもたちの姿やつぶやきを見逃さず、受け止め、保育士側からの働きかけにより、子どもの興味が広がるようにしていくことが大切であり、その為に保育士は、絵本の知識を増やし、学び、沢山の絵本を子どもたちに読んであげることが必要だと実感した。

また、絵本からの学びは大きなものだと感じたので、今以上に保育士から保護者に向けての発信を続けていき、親子で絵本に触れ合う時間が持てるように、私たち保育士は、架け橋になっていける存在でありたい。



講評：絵本の世界への興味・関心から広がる探求の物語
～絵本を見直すことから見えてきたこと～

評者：石川 昭義

絵本のあり方や貸し出しの見直しに関連して、保育士向けと保護者向けのアンケートを実施し、話し合いを重ねるなどして改善に向けて組織的に取り組んだ様子が描かれています。絵本を契機に子どもの活動が展開されていく様子や生活発表会へのつながりも描かれており、エピソードも効果的に用いられています。絵本の研修を受けたときの講師の疑問を始まりとするストーリーの展開があり、実践報告として読み応えがあるものと評価できます。

報告では、研修の成果を保育士のみならず、保護者にも発信している様子が見え、他園も参考にできる大変良い実践です。考察では「以前より、沢山の子どもが絵本に触れる機会が増えた」とありますが、この状況の統計的な裏付けがあると思われ、よかったと思われたい。

絵本の貸し出しが以前と比べてどれくらい増えたのか、あるいは、絵本の紹介に対して保護者からどのような反応があったかなど、さらに裏付けをとることによって報告全体が説得力を増すと思われ、今後の継続的な研究が期待されます。

評者：酒井 かず子

絵本の貸し出しをきっかけに、絵本とのかかわり方まで発展していった様子がよく分かりました。貸し出し回数を増やす事は、それだけの準備をします、体制を整えるための時間と、続けるための見通しが必要になります。そこもきちんと押さえた上で実施に踏み切り、良い結果を生み出した事は素晴らしいと思います。

事例にありますように、年齢にあった絵本を選

び、絵本と一緒に子ども達もいろいろな表情の顔をして身体で楽しみ、保育士手作りの福笑い風のパネルでゲーム感覚で楽しみ、生活発表会では絵本をアレンジしたものを発表し、会場が一体となって楽しみ、絵本が保育生活の中に溶け込み、身体の一部になっているように感じました。子ども達もさぞかし満足した事でしょう。また、保育士もここまで出来た事に喜びと自信が持てたのではないのでしょうか。他の年齢はどのように発展していったのでしょうか。大変気になりました。

今後は保護者からのお勧め絵本を紹介してもらうとの事。その報告も楽しみです。

評者：馬場 耕一郎

本研究は、身近な絵本を題材に用いており大変興味深く読むことができました。本離れは深刻であり、読書量が減少している傾向にある社会に対して、保育所が絵本に触れる工夫を行うことで子ども達に対し意識の変化が図られていくと思えました。

たくさんの絵本に触れる工夫を職員全員で話し合いを通して行っている点は、他の保育所にも参考になることだと思えました。一部の職員で完結しておらず、全職員が参加できる環境はとても良いと思えました。また、日々の活動の中にうまく取り入れている事例を完結にまとめている点は、読みやすかったと思えます。

子ども達がさらに絵本に親しむために、環境構成に関する内容を集約することが必要だと感じました。環境構成については、どの保育所でも悩んでいる点だと思えます。是非とも継続的な取り組みを行い、さらにより実践事例をまとめて頂きたいと感じました。

保育ドキュメンテーションの導入から 保護者支援、連携の在り方を模索する

沖縄県・ひよどり保育園 砂川 幸

1. はじめに

当ひよどり保育園は宮古島市の北西、西原地区（通称、西辺地区）の入り口に位置し、赤い屋根をシンボルマークに今年で開園37年を迎えた。職員のおよそ半数はここ西辺地区の出身で、地域に密着した保育に取り組んでいる。親子2代で保育園に通う家庭もあり、立派なお父さん、お母さんになって保育園に帰ってきたね、となじみの顔ぶれに送迎時の会話もはずむ。

当園では0歳児から4歳児までのすべてのクラスにおいておたより帳を実施してきた。しかし、一人担任の3、4歳児クラスでは毎日のおたよりの記入が負担となっていることが、職員間の会話の端々で聞かれていた。午睡時間はおたよりの記入に追われ、保育の準備に手が回らない、製作の準備や掲示が間に合わないなど保育の充実が叶わない状況にあった。そうした折にある研修に参加する。平成29年2月に行われた日本保育協会主催の保護者支援研修である。全国から保育関係者が集まり、それぞれの園での実践を報告、課題を共有しあった。保育ドキュメンテーションに取り組んでいる園の報告もあり、子どもたちの表情が語る写真の力に魅力を感じた。さらには保育の可視化、保護者との協働を果たすツールとして期待される。そこで当園の抱える課題と照らし合わせた際に、毎日のおたよりをドキュメンテーションに代替してはどうだろうと考えた。

表1 市内保育所（園）のおたより帳実施状況

| | 公立保育所（全10か所） | 法人保育園（全17か園） |
|-----|--------------|--------------|
| 0歳児 | 10 | 17 |
| 1歳児 | 10 | 17 |
| 2歳児 | 10 | 16 |
| 3歳児 | | 5（5） |
| 4歳児 | | 4（5） |
| 5歳児 | | 1（3） |

公立保育所は統一して3歳以上児のおたより帳はなく、口頭やお部屋の前にお知らせを掲示するなどの連絡方法をとっている。

（ ）内はノートやメモを利用して、個人的伝達のある時または保護者が記入してきた時に記入している園。毎日ではないという点でおたより帳と区別した。

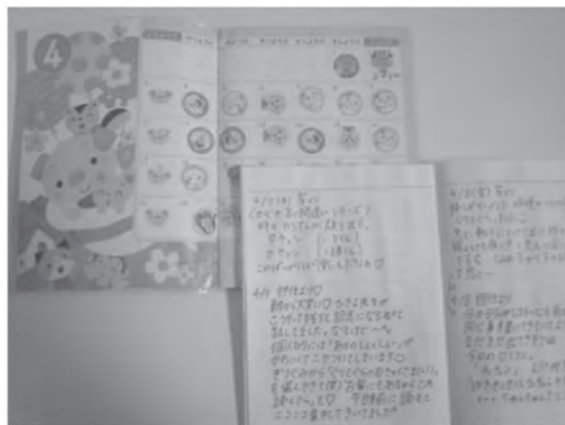
2. 実践の目的と方法

「保育業務の負担を軽減すると同時に、保育ドキュメンテーションを活用した保護者支援、連携の在り方を模索する。」

- (1) 3、4歳児クラスにおけるおたより帳を簡素化
- (2) 保育ドキュメンテーションの導入

- (1) 3、4歳児クラスにおけるおたより帳を簡素化
これまでの形式
出席ブック（シールブック）とおたよりの2点セット

写真1



改良後（平成29年4月より実施）

出席ブック（シールブック）におたよりポケットを設け、連絡事項のある時にメモを入れて活用する。

写真2



(2) 保育ドキュメンテーションの導入（平成29年4月より実施）

- ・毎日掲示※
- ・用紙はA4版
- ・写真をプリントアウトして、コメントを手書きで添える。

※0～2歳児のおたより帳は水曜日のみ環境整備のためお休みにしている。それに合わせて、ドキュメンテーションも水曜日はお休みに（5月～）

写真3

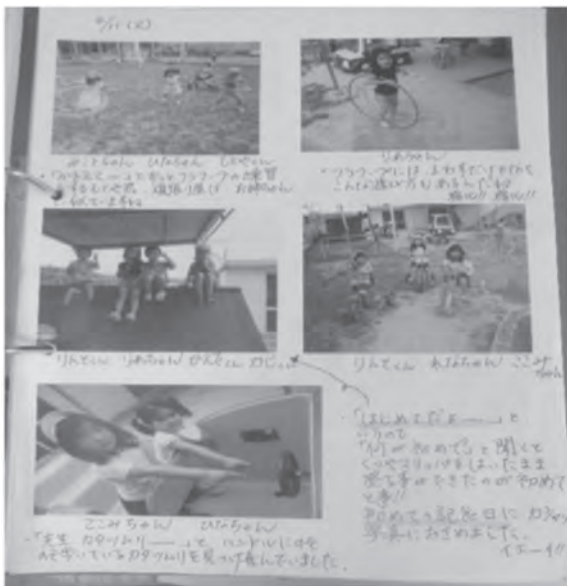
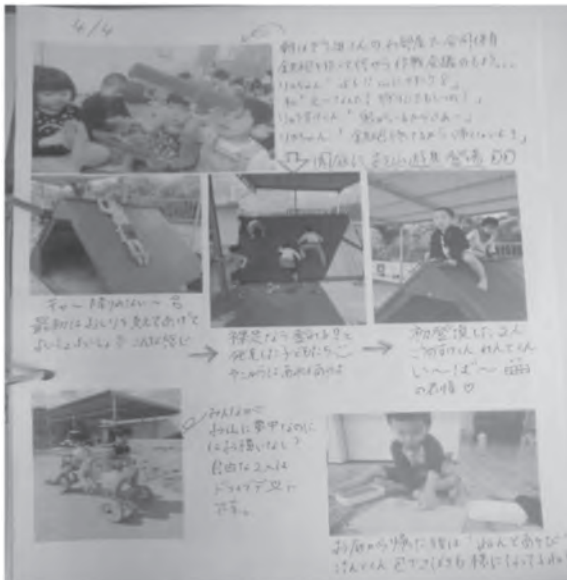


写真4



3. 経過観察

ドキュメンテーションの作成に要する時間はおよそ30分。クラス全員分（15～20名程度）おたより帳を記入することに比べたら、時間は短縮されている。前年度から担任が交代しているの、個々のペースを考慮すると比

較が難しいが、現状だけ述べると、ドキュメンテーション作成後に、製作物の準備や掲示、行事の準備にあてる時間の余裕が持てている。

ドキュメンテーションの掲示を始めてからの保護者の反応「クラスの他のお友達の様子も見えて楽しいです。」

「我が子が写っているときは、おじいちゃんおばあちゃんにも見せています。」

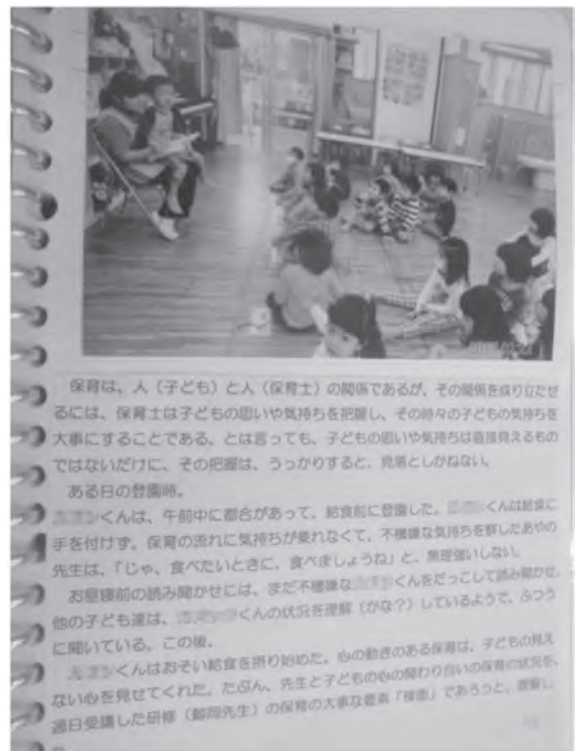
「先生、これ毎日やるの？大変だね～」

といった声や、携帯電話で写真に収める姿があったりと、多くの方が楽しみに見ている。

しばらくすると、子どもたちも掲示板の存在に気づき、自分の写真を見せてと保護者に抱っこされ、一緒に眺めながら今日の出来事を話す様子が見られるようになった。

また、環境整備の水曜日はお休みにしたところ、園長先生が水曜日の当番を買って出てくれた。保育者が子どもたちを主役に描くドキュメンテーションとは視点を変えて、我々保育者を捉え、子どもたちを輝かせる黒子の姿を写し出してくれている。不思議と、園長先生の収める写真には誰一人と身構えて写る姿はなく、ありのままの表情が出ている。それは子どもたちも職員も同じである。保育に注がれる眼差しが写し出され、それが園の雰囲気語る。足を止めて眺める保護者は“ひよどりらしさ”を感じているかもしれない。また、我々保育士もドキドキした気持ちで眺める。そしてそれがいい刺激となって、次の保育に活かされていく。

写真5

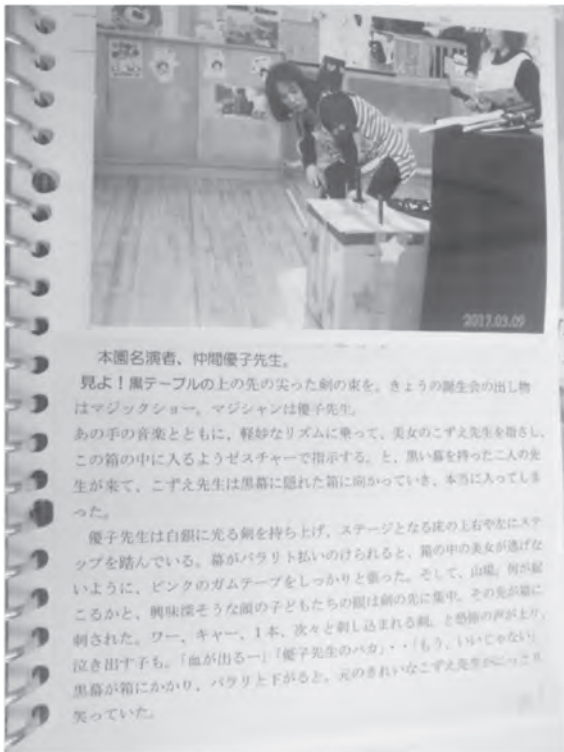


保育は、人（子ども）と人（保育士）の関係であるが、その関係を張り立たせるには、保育士は子どもの思いや気持ちを把握し、その時々の子どもの気持ちを大事にすることである。とは言っても、子どもの思いや気持ちは適度喚起するものではないだけに、その把握は、うっかりすると、見落としかねない。

ある日の登園時。
三浦くんは、午前中に都合があって、朝食前に登園した。三浦くんは朝食の手を付けず、保育の流れに気持ちが乗れなくて、不機嫌な気持ちを察したあゆの先生は、「じゃ、食べたいときに、食べましょうね」と、無理強いしない。お昼寝前の読み聞かせには、まだ不機嫌な三浦くんをだっこして読み聞かせ。他の子ども達は、三浦くんの状況を理解（かな？）しているようで、さつうに聞いている。この後、

三浦くんはおそい朝食を張り始めた。心の動きのある保育は、子どもの見えない心を見せてくれた。たぶん、先生と子どもの心の結び合いの保育の状況を、週日受講した研修（訪問先生）の保育の大事な要素「保護」であろうと、感じる。

写真6



およそ4カ月経過した7月、アンケートを実施。

<アンケート>

今年度より3、4歳児のおたより帳を廃止し、出席ブックのポケットを使用しています。日々のおたよりについては保育の可視化をねらいとして保育ドキュメンテーションの掲示を始めました。

※当てはまる項目に丸を付けてください。

■掲示板について（ドキュメンテーション）

- ①とてもよい よい ふつう よくない
 まったくよくない
- ②大変わかりやすい わかりやすい ふつう
 わかりにくい 大変わかりにくい
- ③よく伝わる 伝わる ふつう 伝わらない
 まったく伝わらない
- ④毎日見たい 毎週見たい 毎月見たい
 2、3カ月に一度 別に見たくない

- おたより帳を簡素化したことについて
 大変よい よい ふつう
 よくない（おたより帳がよかった）

以下自由記述欄です。感想をお寄せください。

<アンケート結果>

| | | |
|--------|--------|-----------|
| 配布数 83 | 回収数 28 | 回収率 33.7% |
|--------|--------|-----------|

※以下回収数を100として割合を算出

■掲示板について（ドキュメンテーション）

| 内容① | 回答数 | 割合 |
|----------|-----|-----|
| とてもよい | 14 | 50% |
| よい | 7 | 25% |
| ふつう | 2 | 7% |
| よくない | | 0% |
| まったくよくない | | 0% |
| 未回答 | 6 | 21% |

| 内容② | 回答数 | 割合 |
|----------|-----|-----|
| 大変わかりやすい | 13 | 46% |
| わかりやすい | 6 | 21% |
| ふつう | 1 | 4% |
| わかりにくい | | 0% |
| 大変わかりにくい | | 0% |
| 未回答 | 8 | 29% |

| 内容③ | 回答数 | 割合 |
|-----------|-----|-----|
| よく伝わる | 13 | 46% |
| 伝わる | 7 | 25% |
| ふつう | | 0% |
| 伝わらない | | 0% |
| まったく伝わらない | | 0% |
| 未回答 | 8 | 29% |

| 内容④ | 回答数 | 割合 |
|----------|-----|-----|
| 毎日見たい | 16 | 57% |
| 毎週見たい | 4 | 14% |
| 毎月見たい | 1 | 4% |
| 2、3カ月に一度 | | 0% |
| 別に見たくない | | 0% |
| 未回答 | 7 | 25% |

■おたより帳を簡素化したことについて

| 内容 | 回答数 | 割合 |
|------------------|-----|-----|
| 大変よい | 3 | 11% |
| よい | 9 | 32% |
| ふつう | 3 | 11% |
| よくない（おたより帳がよかった） | 6 | 21% |

自由記述から

- ・私は下にもいて（兄弟が0歳児クラスにいて）そっちのおたより帳も書くから上のクラスがなくなって、ゆとりが持てたので有難いです。1対1のコミュニケーションも楽しかったですが、掲示板だと全体の様子がわかってそれも好きです。
- ・きりん組（3歳児クラス）になり、その日にあった出来事などは子どもから聞けるようになったのでおたより帳がなくてもいいのかなと思いますが、先生のご意見が聞けなくなってしまったので、悪いことをしていないかなとか、クラスの友達と仲良くしているのかなどは気になります。
- ・おたより帳がなくなって先生とのコミュニケーションが増えたと思います。
- ・つい忙しくて見忘れてしまう日もあるので、週1で長い間同じのを貼ってくれたら有難いです。
- ・おたより帳は子どもの日々の成長記録になるので復活希望です。
- ・おたより帳はあった方が親としては有難いです。毎日なくても続けてくださると嬉しいです。
- ・出席ブックだけになってしまうと、園での様子が分からなくなってしまふのが心配です。
- ・先生への連絡がきちんととれているのか不安？です。
- ・おたより帳で毎日子どもの行動や言動などの様子がノートを通して先生と交換日記をする感じで楽しかったです。おたより帳がなくなったのは寂しく思いますが、掲示板ができたので良かったと思います。
- ・おたより帳の方が先生とのコミュニケーションや連絡等が取りやすい気がします。

<アンケート考察>

3、4歳児クラスでの実践であるが、アンケートは全園児に向けて行った。

3、4歳児クラスの回答に未回答はなかったが、未満児クラスにおいて未回答が目立った。

保育ドキュメンテーションについては、いずれの項目においてもマイナス回答は見られなかった。毎日の掲示を楽しみに見ていることが伺い知れる。しかし、おたより帳の簡素化については回答が分かれ、特に自由記述に率直な意見が寄せられた。送り迎えを祖父母にお願いしている家庭からは、担任との連絡がきちんととれているのか不安という声があった。また、成長記録として残せるのでおたより帳をやってほしいという保護者も。前年度より毎日欠かさず細やかに書いてきていた保護者であった。

4. 改善策

つい忙しくて見忘れてしまう、送り迎えを祖父母他親戚同士協力して行っている家庭もあり、毎日決まってドキュメンテーションを見ることができないという問題を解決すべく、過去の記事をファイリングして玄関脇に常設するようにした。（平成29年9月～）

5. まとめと今後の課題

おたより帳を廃止することはとても勇気のいることだ

った。幼児にとってはやはり細やかな連絡、家庭との連動は大事なことだ。前日や朝の過ごし方を知る、家庭でどんなことに興味を持っているのか、どんなブームがあるのかを知る。よって子ども理解が深まり情緒の安定につながる。もちろん、こういった家庭との連携はおたより帳だけが担うものではなく送迎時の会話を丁寧に行なうことも然りである。だが、書くという作業は、一息置いて子どもと向き合う時間を与えてくれる、そして残せる、おたより帳が好まれる利点はこういったところにあるのだろう。

ここで興味深い研究がある。鈴木智子ら（2016）¹⁾が行った質問紙調査において、連携の対応、工夫、満足度・信頼関係といった多くの項目で3歳未満児クラスの保護者の方が連携を高く評価しているという結果が出た。言い換えると、3歳以上児クラスになると連携の評価が低くなるということである。未満児クラスと以上児クラスでは、担当保育士の数が異なるという構造上の制約があり、連携の差が出てしまうことが指摘されたが、同様に連携の工夫として活用される連絡帳（おたより帳）の記入が毎日あるのかないのかも大きく関係しているのではないかと推測する。研究の中で質問紙を送付した100ヶ所の保育所における連絡帳の実施状況は示されなかったが、以上児になると毎日の連絡帳の記入がない又は減るといところが多数であろう。質問紙調査の結果を踏まえて保育士に向けて行ったインタビュー調査では、年齢クラス間の意識の違いについて、ある園では連絡帳の様式が変わることが影響していると考えられている、とあった。同じように宮古島市内の保育所においても以上児からは連絡帳がノート様式になり、必要に応じて使用するといところがある。鈴木らは考察で、「保育の内容やねらいを伝えることが比較的低いという現状が見られ、普段の連携においてそれらを伝えることが必要であるが、加えて年齢クラスの違いで連携の対応に違いが出てくるとい問題に対しても、どのようなねらいや発達の見通しを持って対応していこうとしているのかについて、保護者に説明していくことが必要となってくるだろう。そのことが、保護者に子ども理解を促すこと、家庭との連携を強固にしていくことにつながると考えられる。」と述べた。自園の実践では、保育ドキュメンテーションで保育の可視化を図り、それが親子のコミュニケーションや子育て支援に繋がることを期待して導入したが、保護者に向けて行ったアンケートでは連絡帳による個々の記録の必要を訴える声もあり、人的、時間的制約の中で満足に対応しきれないことにジレンマを抱える結果となった。鈴木らが述べるように、年齢クラス間における連携の違いについての説明を十分に行うことで保護者に理解を求める必要がある。子どもの伝える力を育むことであったり、更には幼稚園、小学校への接続を意識して対応を変化させていることを伝える必要がある。

保育ドキュメンテーションについて。まずは毎日やってみよう！と始めたドキュメンテーションであったが、試行錯誤する中で様々な気づきがあった。

一つはカメラを構える保育士の変化。子どもたちのつぶやきを聴き逃すまいと以前よりもより近くで耳を傾けるようになった。子どもたちの世界に近づくほど遊びの中の気づき＝学びが見えてくることに気づいた。そして、子どもたちの今の学びがより膨らむよう、つまりはその学びを家庭に持ち帰って生活に活かすことで連続性を持たせたいという願いが生まれる。

二つ目は描き方。既に述べたような子どもたちの気づきを描くのか。気づきから遊びがどう発展したのかを描くのか。活動のねらいと育ちを描くのか。何を描くのかも重要である。実践の中で気づいたのは、活動が違えばドキュメンテーションの視点も違ってくるということ。必ず活動のねらいと育ちを描かなければいけないなどと決めずに、時々保育に合わせて描いていく。保育をしていく上では、予想しない出来事に驚きや発見、心動かされるエピソードが潜んでいて、まさにそれが保育の面白みである。型にはめず、今日も何か面白いこと起きな

いかな、なんてワクワクした気持ちで保育に臨むと見えてくるものがあったりする。時には手放しできない状況で写真が撮れない時もある。そんな時にはお食事の風景を収めて、今はどんなことに気をつけていて、子どもたちにはどう伝えているのか（例えば、姿勢を正すことに重きを置いていて、おへそとテーブルをくっつけようね、お皿を捕まえるお手手を忘れないでねと声をかけている）といった食育のねらいを描く時もある。

三つ目は描き方の視点を養うことである。ドキュメンテーションの導入当初は活動の報告のみになってしまう日もあった。また描く人が違えば描き方も変わる。3、4歳児の2クラスの実践であるが、よりよい、より面白いドキュメンテーションを描くためには職員間で推敲し合うなどの研修も必要である。ドキュメンテーションの質の向上は、保育の視点を養うこと、すなわち保育の質の向上にもつながるであろう。

参考文献

- 1) 鈴木智子ほか(2016) 保育の協働性に対する保育者と家庭の意識に関する研究、保育科学研究、7、84-101

講評：保育ドキュメンテーションの導入から保護者支援、連携の在り方を模索する

評者：小林 芳文

保育園での保育士による子ども・子育ての役割の大きさ、その期待の重さは、今更言うまでもなく大変大きなものがあります。この研究は、日頃の保育の取り組みに、新たな気づきとして、保育ドキュメンテーションを導入した実践としての試みをまとめた点で興味を持って読ませていただきました。

日頃の子どもたちの保育を写真を通して発信することは、より解り易くその力の魅力は、保育の可視化、保護者との情報交流を果たすツールとなっている事がわかる実践報告でした。それに加えこれまでのお便り帳の簡素化も生まれたことなどもこれからの保育業務の方向性を示す提起になったこと、この研究成果として、保育関係者の参考になるものと思います。保護者へのアンケートを実施したこと、更には自由記述の資料も添えたことで、この実践研究の意義がより明確になりました。

私は、昨年、ドイツ、フィンランドにおける保育事情視察の機会をいただき、両国とも上手にドキュメンテーションを活用している保育を拝見しました。今後の進展を期待しています。

評者：清水 益治

次の3点が評価できます。①ドキュメンテーションという手法を用いて、保育の可視化、見える化を実現した点。②保育の準備に時間をかけるために、作業の効率化を目指し、これを実現した点。③ドキュメンテーションの作成に取り組んだだけでなく、その成果を調べるためにアンケートを行い、取り組みの効果の可視化を図った点。

今後は、次の2つのことを期待します。①保護

者と連携を行う上で、双方向のやりとりに「おたより帳」は有効なツールなので、ドキュメンテーションと併存を図るなど新たな工夫をして頂きたいと思います。②アンケートの実施に当たっては、子どもの年齢を併せて尋ねるなど、深く分析し、結果を活用できるように、アンケートの内容を工夫することを期待します。

評者：馬場 耕一郎

本研究は、保育ドキュメンテーションについて取り組んだ実践事例が書かれており、興味深く読ませて頂きました。保育ドキュメンテーションを導入する以前は、おたより帳を使用されており保育士の負担となっていました。今、保育士の負担軽減は喫緊の課題であり、おたより帳の負担軽減を通して保護者への情報提供の充実を図っている点は、多くの保育所が求めている先進的な事例になっていると思いました。

また、保育ドキュメンテーションの作成を通して、保護者への情報共有のあり方についても検討された点は、子育て支援の観点からも大変有益だと思いました。

保育士の振り返りを行う効果も見られ、保育の質向上に必要な取り組みであると感じました。より充実した保育ドキュメンテーションへと成長するためにも、作成するにあたり、保育士がどのような研修が行われたか等の情報をまとめて頂けると、多くの保育所の希望に繋がると感じました。

保育環境の充実と危機管理伝達に向けて

沖縄県・第2愛心保育園 野原 裕実

1、はじめに

一日の大半を保育園で過ごす子ども達にとって、心地よい環境設定の中で安心して過ごす事が一番大事なことである。しかしながら、保育園という集団生活の場で、個々の発達段階の月齢差や個性等様々な状況の中で、玩具の取り合いや、噛みつき、ひっかきをはじめ、遊びの中での思わぬ事故等トラブルが起きてしまうのが現状である。子ども達や保護者に安心してもらえるよう事故を減少させるための効果的な方法はないかと改めて職員で話し合い、前年度は「未然に事故を防ぐための保育士のリスク・マネジメント～ヒヤリ・ハットを通して見えてきた事から～」と題した実践研修に取り組んだ。

その結果として頂いた講評に「短期間での成果を求めるのではなく、保育内容や保育環境で解消できるよう取り組むとよい。」「噛みつきを防止したり、ケガを防ぐために求められるのは監視することではない。環境構成である。今回の研究を通して課題を明確にしていることから更なる実践の研究の成果報告を期待している」とのアドバイスを頂いたことから、昨年に引き続きリスクだけではなく、経験から遊びを発展・展開できる環境構成を考え、事故が起こる前についての学びを子ども達や子育てが初めての保護者、支援を必要とする保護者にどのように伝え広めていくかも考え、今年度も引き続き実践し研究をすすめることにした。

2、目的

安心・安全な環境づくりにおいて、下記の2点に重点を置きながら、事故を防ぎよりよい保育環境設定の充実を目的とする。

- ①環境においては、物的要因と人的要因が重要であることを踏まえ、環境と安全に対する考えや理解をより深め、子ども達にとってより充実した環境を整える事。
- ②保育園の機能が適切に発揮できるよう職員の資質向上に努めながら、職員、保護者、子どもの三位一体で、子ども自ら危険を回避できる力を育てる事。

3、実践方法

※クラス会議等で話し合いをもち、実践についての内容等を検討し下記の3項目についての実践を行う。

- I 様々な保育環境を工夫し、子どもの行動の様子を見守る。(3歳児、1歳児)
- II 事故の未然防止のために(職員間の共通理解)

III アンケートの実施(職員、保護者)

I 【事例1】3歳児クラスの「やってはいけないことボード」について

・3歳児(男11名 女12名 計23名) 担任2名
状況:4月…進級して期待や不安でいっぱいの子も達。新しい環境にすぐに慣れ遊びだす子、保育士に親しみをもち話しかけてくる子、嬉しさ余りに保育室、廊下を飛び跳ねたり、走り出したり本棚やロッカー等に登ったり、もたれたりと様々な姿が見られ、ヒヤッとする事があった。また、友だちとの関わり方では、自分の思いが通らない時や少しの事で気に入らない事が起こると、言葉で伝えるよりもすぐに手が出る事が多い状況の中、子ども達にどのように知らせ伝えていくべきか、何度も会議をもち話し合った。

●「やってはいけないこと」ボード作成

会議等で話し合いの結果、部屋の作り(環境構成)の工夫が必要と感じ、子ども達にもコーナー遊びの楽しみ方を再度繰り返し伝え、知らせる。保育設定時間内を利用し、子ども達にやってはいけない事をわかりやすく説明する。また紙芝居や絵本にて自らの行動内容を把握、理解できるように支援する。7月頃から「やってはいけないこと」ボード掲示。



○絵カードを使い全員で一つ一つ確認、子どもの目線(見やすい高さ)にて掲示



*子ども達の様子と変化

- ・自ら興味を持ち、ひらがなを読み始め確認している。(登降園時には保護者と一緒にボードを見るなど関心をみせる)
- ・友だちに“やってはいけない行為”が見られた時、子ども達同士で注意し合う姿が見られるようになる。「これ、みて!!」と声かけしている。
- ・「やってはいけない事」の姿が全てなくなったわけではないが、一つ一つの行動において、子ども自身が意識する姿が見られるようになった。

考察

子ども達同士で声をかけ合い、“やってはいけないこと”に対して、意識できるようになった事は良かった。子ども達への意識づけが保護者の方にも繋がり、親子の関わりが深まる事で、子どもと保護者の安全に対する認識の確認もできたように感じる。まだ、危険行動が見られる子に対し、理解できるようになる為の工夫を考えていく事が課題となっている。また、「廊下は走りません」「玩具等は投げません」などの行為等は、園全体で取り組むべきだと感じ、各フロアの廊下に設置した事で、子ども・保護者・職員への意識づけに結びついたと感じた。

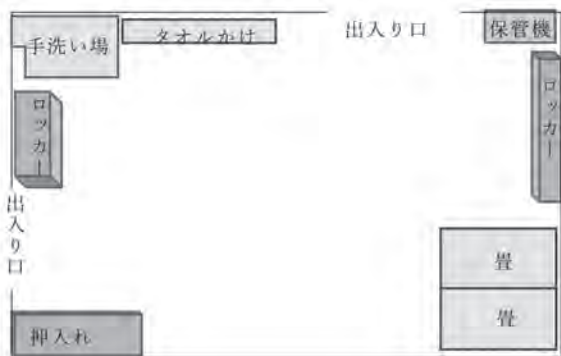
【事例2】遊びと環境におけるリスクと構成(1歳児)

・1歳児(進級児15名 新入児7名 計22名) 担任4名

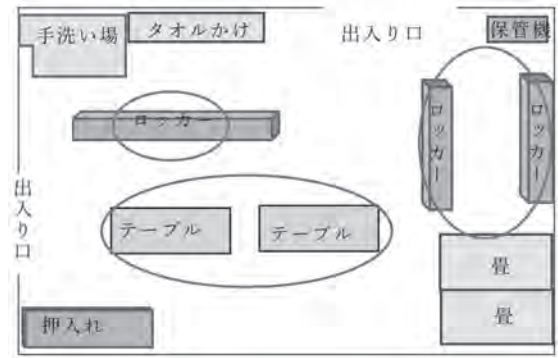
4月の状況：進級児、新入園児共に安心して過ごせるための環境づくりを行う。室内をオープンにし、子ども達の様子を一目で把握できるように仕切りをなくしたことで、室内を駆け回りぶつかってしまったり、また、落ちて座り、遊びに集中できる場所がなく、友だち同士のトラブルが見られた。

☆クラス会議などを行い室内環境を変えてみた。

実践1 <4月初めの環境>



<修正後の環境>

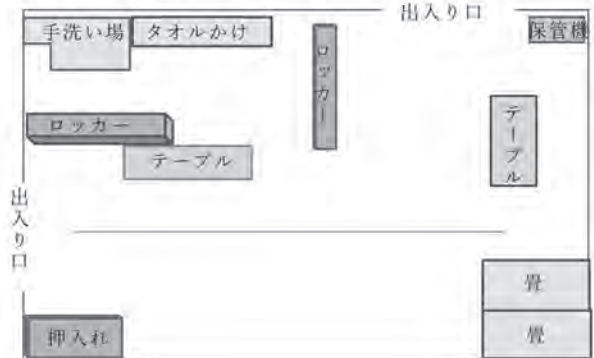


結果：ロッカーやテーブルを使い室内を区切ることで、子ども達の駆け回りを抑えることが出来たと共に、子どもたち一人ひとりが椅子に腰かけ、落ち着いて遊びを楽しめるようになった。

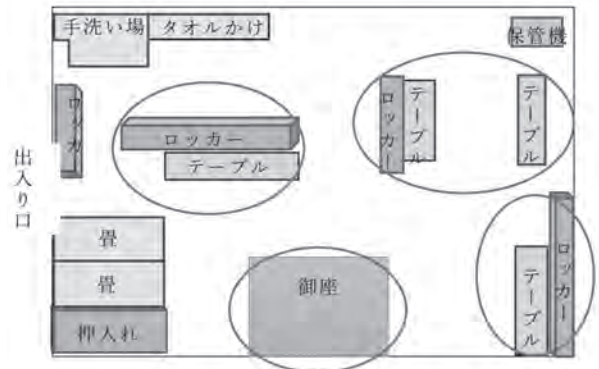
*5月~8月までの間も子ども達の様子に合わせて、環境を工夫し設定してみた。

9月の状況：室内を上下に分割し、座って遊ぶ空間と自由に遊べる空間をつかって過ごしていたが、子ども達の成長に伴い、友だちとの関わりが増え、遊びも多様化してきた。それぞれに好きな遊びが出てきた事や友だちとの関わりの中、玩具の奪い合いも多く見られるようになってきた。

実践2 <9月初めの環境>



<修正後の環境>



結果：遊びの空間を4か所に分けてみた。テーブルを使ったママごとや絵本コーナー、御座のコーナーで

のブロック遊びなど、いろいろな遊びに対応できる場を作ったことで、自ら好きな遊びを集中して楽しめるようになった。その事で、友だちとの関わりも深くなり、遊びを共有することでトラブルも減ってきた。

考察

子ども達が過ごす環境は、子どもの成長と共に変化していく。遊びや友だちとの関係性により環境を変えることで、遊びの充実と心身の発達が促されると感じる。まだ、友だちとの関わりがうまくつけない子ども達においては、トラブルの原因の一因として環境の未整備があ

げられる。友だちとの関わりが増えていく中で、「友だちを押す」「噛む」などの行為や転倒などの怪我をどのように防ぐか、環境を通して考えていくことで、子どもの主体性を重視した遊びの発展へとつながっていくことが、十分に認識できたと思う。

Ⅱ、事故の未然防止のために（職員間の共通理解）

保育園における事故・ヒヤリ・ハットにおいて、職員の意識調査（アンケートなど）を行い、保育環境と保育士自身の関わりについて考えると共に、データ（※2）と照合しながら勉強会などで話し合いを持つ。

実践1

（※2）園内で起きた事故発生状況（ヒヤリ・ハット含む）

| 年度別 | 0歳児クラス | | 1～2歳児クラス | | 3～5歳児クラス | |
|------------|--------|-----|----------|-----|----------|-----|
| | H28 | H29 | H28 | H29 | H28 | H29 |
| 保育室 | 11件 | 8件 | 36件 | 22件 | 15件 | 10件 |
| トイレ | 0件 | 0件 | 7件 | 4件 | 0件 | 0件 |
| 園庭・園外 | 3件 | 3件 | 18件 | 11件 | 34件 | 20件 |
| 誤飲食（アレルギー） | 1件 | 0件 | 2件 | 0件 | 0件 | 0件 |
| 家庭での事故報告 | 1件 | 2件 | 0件 | 0件 | 1件 | 0件 |

*H28 アレルギー児9名（卵、メヌケ（赤魚）大豆） *H29 アレルギー児9名（卵、メヌケ（赤魚））

考察

昨年度と今年度の事故発生内容から比較してみると、職員一人ひとりがリスク・マネジメントに取り組み、危険を未然に防ぎ保育に努めていることが伺える。しかし、0～2歳児クラスの発生状況からもわかるように、保育室内での事故（ヒヤリ・ハット）の発生件数が高くなっている。発達段階の様々な時点において噛みつき、ひっかき等のヒヤリ・ハットを未然に防ぐ環境の重要性を感じる。それは、物的環境だけではなく、人的環境によってクリアできるものもあると、各々の経験において十分理解できたかと思う。「保育環境の大切さ」また、保育士一人ひとりのリスク・マネジメントの意識を常に高く持つ事により、大きなケガや事故が起こることなく過ごしている結果に繋がっているのではないだろうか。また、記録の重要性に気づき学ぶ事が出来た。

実践2 噛みつきについて

今年度は昨年の反省を踏まえ、噛みつきが起りやすい状況を環境の工夫と個々の成長の2点に絞り、関わりを持つように配慮。保護者も噛みつきのケースが起こる前に、クラスだより等で、子どもの成長発達による噛みつき行為が起こることについての情報伝達を行った。（別

添1）

家庭での事故報告を受けての対応（2件）

- ①ウォーターサーバーの温水用コックに触れ手を火傷
- ②使用後のアイロンに触れ指を火傷

↓

家庭での事故においても、園内の事故だけにとらわれるのではなく、保育士も何らかの情報を提供すべきだと感じた。互いにコミュニケーションを図りつつ、私たち保育士が日頃からどのように子どもの事故に注意しているかを、保護者に向けて伝え、また、成長過程にて起こりやすい事故などについての注意事項をまとめた「子どもに安全をプレゼント」を作成し配布する。（※別添1）

考察

昨年の課題の一つである保護者への事故防止支援策では、事例をあげ、考えるきっかけとなった。事故防止策の資料を配布した事により、保護者から多くの意見を聞く事ができた。「日頃、気をつけているつもりだった。資料を読みハッと、させられ改めて注意を向けるきっかけとなり為になった。」「とてもわかりやすく、子どもと安全について話す機会が持てた。」等、各年齢に応じた

資料の提供は保護者にもより一層安全に対する意識が持てたのではないかと考えらる。

Ⅲ、アンケート実施

実践1 職員アンケート (別添2)

安心して過ごせる保育環境をどのように予測、配慮しているのかを、年齢別、各場所ごとの事故発生事例をあげ、防止策についてアンケートを実施。

(職員20名中/20名 回収率100%)

考察

アンケートを通して、保育士は乳幼児の事故において、発育と発達に関連している事を日頃の保育経験より学び、そして職員一人ひとりが専門的知識を持ち、職責を遂行していることが伺えた。保育士は「子どもの行動を予測しながら職員の立ち位置や職員間の連携を図る」、「環境整備をする事」が重要であると考えられる。例えば、乳児のつかまり立ちは成長過程の一つであるが「バランスを崩してしまうかも」という子どもの行動を予測し、床に物が落ちていない状態にしたり、子どもの様子を見守りながら支えてあげられるよう側につく等、一人ひとりが意識して関わる事。また、年中から年長児においては、日頃より子ども達のどのような行動がケガや事故に繋がるのか、視覚教材を活用し言葉のやりとりを繰り返

す中で、自ら判断できるよう配慮しながら関わるなど、子どもと一緒に考える機会をつくるのが大切である。

又、職員の回答の中から安心、安全な保育を展開していくためには、リスクを見極め、子どもの成長に合わせて行動を予測していき、子どもの目線で保育環境の見直しや工夫を図ることが、不可欠であるという事を再度確認できた。

実践2 保護者アンケート 別添3)

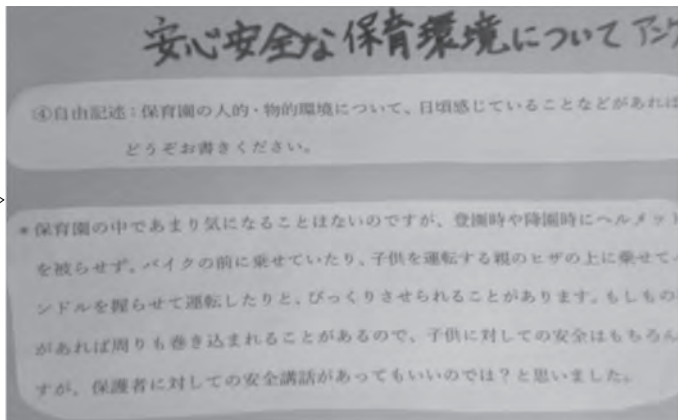
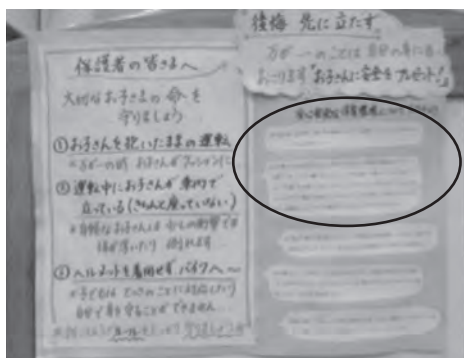
保護者103名中/65名 回収率63%

考察

保護者へアンケート調査を実施していろいろな意見を聞く事ができた。アンケートのコメントより、大人が「大丈夫」と思っていたことが危険な事、気をつけているつもりで見落としていた等、率直な意見も聞け、さらに保護者がより意識し事故防止に向けて行動変容がみられたこと、また、常に安全面に気を配り安心できる環境作りについて関心が高いということも確認できた。

アンケートの回答の中で数名の保護者から出た車の運転についての意見は、園としても以前から気になっていた内容だったこともあり、すぐに保護者へ注意喚起のお知らせをつくり掲示する等、実践できたことは良かったと思う。

保護者への注意喚起の掲示物



まとめ

子ども達にとって一番大切なことは、遊びの中で学ぶ(生きる力を培う)事である。遊びは成長と共に変わり、その中において保育士は、適切な環境を作っていかなければならないことを常に意識していくことが重要である。しかしながら、日々の保育においては、事故やヒヤリ・ハットの場面に直面する事も避けられず、子どもにとっての適切な環境とは何か?という事を今回の実践を通して多く気づくことができたと思う。

(成果)

① 今回、保育環境の充実を目指し、職員会議や園内勉

強会等を含め、話し合う機会を多くつくったことで、いろいろな案を出し合い、日々成長する子ども達の保育において「一番大切な事」=子どもが集中し、没頭できる環境設定について考えることができた。

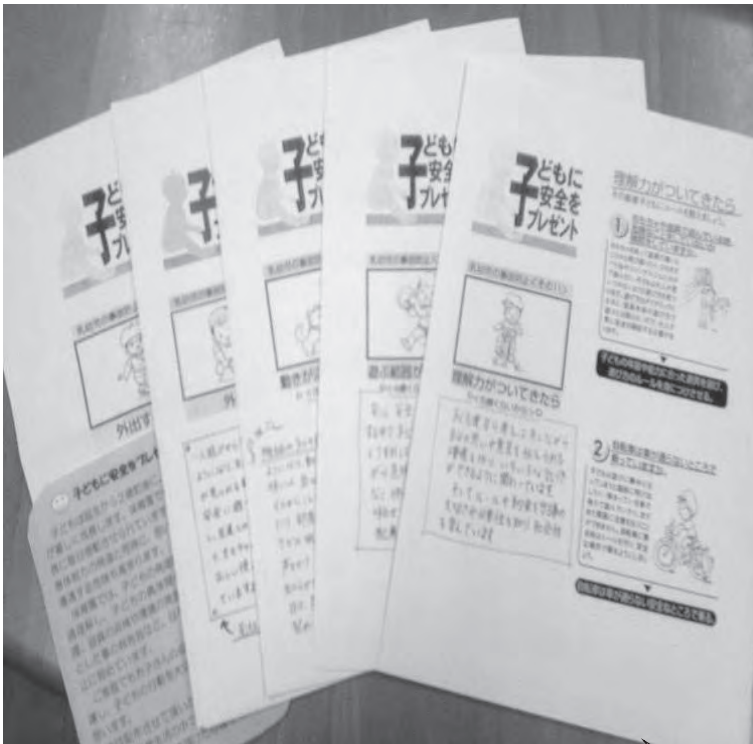
- ② 遊びの充実を図り、子どもの成長を学び、改めて全職員に周知・徹底して保育環境を整えることができた事で、一人ひとりが遊びに没頭し、友だちとの関わりも深く、昨年に比べヒヤリ・ハット、事故報告も減少してきたという事例も出てきた。
- ③ 子どもが主体的に活動できる保育環境の設定により、事故を予防できる状況につながるという事の理解も深まり、安全な環境の下で自由に多くの体験を行

うことによって、子ども達の自己防衛力が高められていくこと等も実感した。

- ④ 園内（職員）による事故防止の取り組みだけではなく、前回の課題となっていた保護者も交えての危機情報を発信すればよいのかを考えた点において、事故の対策についての情報を提示したり、直接保護者へ伝達する事により、相互で子どもの様子を共有しあうことができた。その事が、コミュニケーションを円滑にするきっかけにも繋がったように思う。

このように保育園機能をうまく活かしながら、保護者とのかわりの中で気づく安全管理、そして職員一人ひとりの意識における安全と環境の工夫など、「遊び」から「学び」になる過程における安心・安全と、「子どもの成長過程におけるリスクと環境の重視」などを多くの視点から見つめ直すことができた。

これからもよりよい保育環境と子ども達の発達に重点をおき、リスク・マネジメントへの取り組みを行っていきたいと思う。



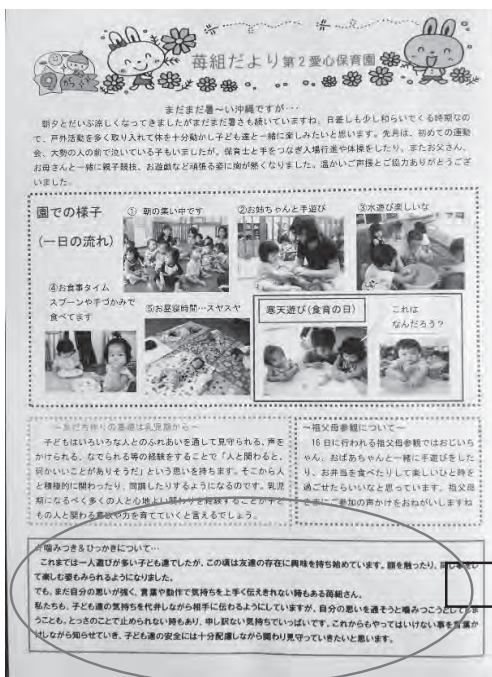
子どもに安全をプレゼント

子どもは誕生から2歳前後に、身体的な機能が著しく成長します。保育園でも子ども達の成長に毎日感動させられています。しかしながら身体能力の発達と同時に、思いがけない事故に遭遇する危険も高まります。

保育園では、子どもの発達段階を職員間で共通理解し、子どもの興味関心や行動範囲の把握、遊具の点検や環境の見直し、事故やヒヤッとした事の報告会など、日常生活の中で事故防止に努めています。

ご家庭でもお子さんの安全面には、十分に配慮し、子どもの行動を大切に見守っている事と申します。

今回配布させて頂いたパンフレットは家庭における日常生活の中で、事故を予測し事故防止の参考に役立てて頂けたら嬉しく思います。



保護者への配布
 物各年齢による、事故防止策が

0歳児クラス便りより
 クラス便りにて、子どもの発達段階

☆噛みつき&ひっかけについて...

これまでは一人遊びが多い子ども達でしたが、この頃は友達との存在に興味を持ち始めています。顔を触ったり、同じ事をして楽しむ姿もみられるようになりました。

でも、まだ自分の思いが強く、言葉や動作で気持ちを上手く伝えきれない時もある両組さん。

私たちが、子ども達の気持ちを代弁しながら相手に伝わるようにしていますが、自分の思いを通そうと噛みつきやひっかけしてしまうことも、とっさのことで止められない時もあり、申し訳ない気持ちでいっぱいです。これからもやっつけられない事を言葉がけしながら知らせていき、子ども達の安全には十分配慮しながら関わり見守っていきたく思います。

平成 29 年 9 月

第 2 愛心保育園

日保協保育実践研究グループ

職員の皆さんへ

かわいい子ども達も進級して半年が経ちました。昨年と同様に実践研究のテーマを「保育環境とリスク」と題して、子ども達の健やかな成長を見守り職員一人ひとりが、再度“子どもの命を守るため”に安全面への配慮を行い、安心して過ごせる環境を提供するため、日々の保育について考え振り返り、意識を高めていきたいと思ひます。

今回はクラス別、また各場所ごとの事故発生事例をあげ、防止策について考え、よりよい実践研究の資料となるようアンケートを作成しました。

それぞれの項目について事故防止策の記入のご協力を宜しくお祈ひします。

1) 園舎内

(1) 0 歳児 * 回収率 100% 職員 20 名中 20 名提出

①つかまり立ちをしていて転倒し、周囲の物にぶつかる。②歩行していて転倒、周囲の物で負傷する。

防止策

・周りの物は常に片付けておく。・側から目を離さない
・柵の周りのできるだけなくす。

(他 2 件意見有)

(2) 1 歳児

①いやがったり、手をつないだ子どもが逆方向へ移動した際に力がかかり肘内障を起こす。

・手つなぎから腕を支える状態にし引っ張ったりしない。・手をつなぐして誘導する。・子どもへ声をかけ行く方向を知らせていく。

(他 2 件意見有)

②トンネル遊びや滑り台に多くの子どもが集まり転倒、転落もしくは、噛みつきトラブル発生する。

・「順番だよ～」と声をかけ見守る。・複数担任なので 1ヶ所に集中していたら声を掛け合い他の遊びに誘う。

(他 2 件意見有)

(3) 2 歳児

①ふざけて追いかけてこの際転倒、衝突し、周囲の物でケガをしてしまう。

・事前の約束事を常に行なったり声かけをする。・子どもの行動や友だちとの関わりを見守りすぐに対応できるようにする。

(他 5 件意見有)

②ビーズや小物を鼻や耳に入れる。

・遊ぶ前に使い方や扱い方を知らせ、見守る。・一度にたくさんの量を出さない。少人数で行なう。

(他 4 件意見有)

(4) 3 歳児

①食事、おやつの前の手洗い時に滑って転倒する。

・床が濡れていないかチェックをする。・濡れたらすぐ拭く。
・水廻りでは職員が見守る

(5) 4 歳児

①食事の際に魚の骨がのどに刺さる。

・魚には骨があることを知らせる。・よく噛んで食べる事を知らせる。

*アンケートの回答も載せています。

(6) 5歳児

①学習中に他の子どもが覗き込んだ際に鉛筆が〇〇に当たる。

- ・鉛筆が当たると危ない事を子ども達に伝える。 ・学習環境を整える。
- (他5件意見有)

園庭、園外において

(1) 0歳、1歳児

①コンビカーを取り合い転倒してしまう、トラブル(ひっかき、噛まれる)

防止策

- ・遊びを分けたり、人数を調整しながら子どもの特徴を把握する。
- ・トラブルになりそうになった時には、すぐ防止できるよう見守る。

(2) 2歳児

(他4件意見有)

①砂場でシャベルの取り合い、シャベルにて殴られる。シャベルを振り回し他の子に当たる

- ・遊びに入る前に注意事項、約束事を伝える。
- ・交代ずつ知らせたり、数を多めに揃えたり環境を整える。

(他3件意見有)

(3) 3歳児クラス

①花壇や畑等にバケツを持って歩いて、花壇の端につまづき転倒する。

- ・バケツを持たない事、保育士に預けて(玩具)を見に行くルールを共有する。・バケツの重さは大丈夫か・又、前方に気をつ知らせる。

(他5件意見有)

(4) 4歳児クラス

①滑り台の階段を慌てて登り、足を踏み外し顎と歯を打撲する

- ・遊具の使い方について子ども達と確認をする。
- ・保育士が側につき、ゆっくりのぼる事を知らせる。
- ・子どもの行動を予測し止める(声かけ)をする。(他5件意見有)

(5) 5歳児クラス

①花に止まっているハチをさわられ刺される。

- ・小動物や虫、自然に触れたり見る時は、危険なこともあるという事を絵本や図鑑などを利用し、子どもに知らせる。
- ・やっちはいけない事を伝え、刺された時の事も伝える。

(他4件意見有)

②走っていて勢いあまって花壇の中に倒れ、枝にて目をつつく。

- ・走っても大丈夫なスペースを確保し、子どもに伝える。
- ・危険な箇所は保育士が側につき声かけをして知らせ、未然に防いでいく。 ・伸びた木や枝は、こまめに切る。

*最後までアンケート記入のご協力ありがとうございました。

保護者の皆様へ

平成29年10月5日

第2 愛心保育園 保育実践研究グループ

安心、安全な保育環境について（アンケートのご協力願い）

*アンケートをお願いするにあたって

毎年、子ども達のより良い成長の支援につながるように、保育の質を高めるため、職員が取り組んでいる“保育実践研究”（日本保育協会主催）。

今年度は、昨年に引き続き実践を深めたいという思いで、「子ども達にとって、安心・安全な環境づくり」の内容で進めております。保護者様から託されている、大切な子ども達が安心できる環境のもとで楽しく過ごせるよう日々努力をしておりますが、やむを得ず防げない場合もあります。そのような事から、今回は保護者様も一緒に「安心・安全な環境づくり」について共有しながら、少しでも大きなケガ等が防げるように…という思いでアンケートを作成しましたので、ぜひご協力頂きたいと思っております。皆様のご意見を反映させていながら、今後さらにより良い保育ができるよう努めます。

※何かとお忙しいと思っておりますが、10日（火）までにご提出くださいますようお願い致します

☆アンケート☆

- ① 当園の保育環境（人的・物的）については、満足・安心できていますか？
ア、満足である（65人） イ、満足ではない（0人） ウ、その他（0人）
- ② ご家庭（室内・戸外）でお子さんの安全面について気をつけていること等ありますか？
ア、気をつけていることがある（48人） イ、特にな（12人） ウ、その他（5人）

ア、と答えた方より多かった声

- ・駐車で走らない（15人）
- ・危険な物（ハサミ・爪切りなど）手の届く所には置かない（13人）
- ・戸外に行く時は必ず手をつないで歩く（10人）

- ③ 配布した資料（子どもに安全をプレゼント）の感想をお聞かせください。

- ・年齢別に危険性は変わるという事勉強になった。大人が大丈夫と思っていたことが危険なことだと改めて知ることができた。
- ・気をつけているつもりが見落としていた。資料をみてとても参考になった。
- ・大人がやらないことを子どもは遊びとしてやってしまう事に気づかされた。日常生活から大きな事故につながるので気をつけていこうと思う。

- ④ 自由記述：保育園の人的・物的環境について、日頃感じている事などあれば、どうぞお書きください。

- ・とても良い環境だと思います。ありがとうございます。
- ・駐車場でスピードを出している方がたまにいます。子ども達は車を見ないで行動する事があるので気をつけて運転して欲しい。
- ・園庭遊具に危ない箇所が見られる。砂場道具などいつもきれいに整理されていないように感じる。三輪車の転倒など心配である。

*ご協力ありがとうございました。アンケートは回収箱か担任までご提出下さいませ。

*アンケートの回答も載せています。

講評：保育環境の充実と危機管理伝達に向けて

評者：天野 珠路

保育環境と安全管理は密接に関連し、子どもの健やかな成長を支える保育園においては特に重要なものです。この課題意識を持って園全体で継続的に取り組む姿勢が明確であり、その内容も具体的に記されています。

特に、後段の危機管理に関する保護者への伝達や意識の共有について、アンケートを踏まえ効果的に示されているといえるでしょう。保護者への掲示物や配布するお便りなども分かりやすく、事故防止に関する保護者の行動につながったことも評価できます。引き続き、園と家庭とが連携して子どもの安全を保障してほしいと思います。

前段の保育環境の充実については、保育室の配置換え以外にも遊具や教材などの物的環境に目を向けて取り組む必要があるでしょう。一人ひとりの子どもが熱中して遊んだり、好きなことに没頭できる環境をどう構成していくか。子どもの人数に対し遊具の数や遊びの種類は十分であるか。こうしたことをさらに探求し、楽しく遊びこめる保育環境を整えていきましょう。子どもの満足度が子どもの安定や安全につながります。

評者：酒井 かず子

継続して研究を続けられた事に頭が下がります。わくわくしながら読ませていただきました。

1歳児と3歳児で研究を進めていった中で、特に1歳児の取り組みに興味を持ちました。1歳児は走るスペースがあれば走り回るのは当然の事です。9月の修正後の環境のように、出入口付近が狭くなっていれば室内と廊下を走って行き来する事が出来なくなります。また、4月の修正後の環境はロッカーやテーブルが横に並べてありますので、走りやすいし、走っている子どもがいると落ち着かなくなります。それが、9月になるとロッカーとテーブルがセットになり、しかも縦列、横列に置かれました。このようになると、走りにくくなります。しかも、ロッカーにある遊具を横にあるテーブルで使用できるし、終了後はすぐ横の

ロッカーに片づけやすい。ロッカーの遊具が子ども達の興味のある種類で、分量も成長に見合っていると、集中して取り組みますね。遊具の種類が多いと取り合いもなくなり、ヒヤッとする事もかなり減ると思います。

気になったのは、3歳児の「やってはいけないことボード」でした。確かに分かりやすいかも知れませんが、成長に伴い、やってはいけない事が増えていき、身動きできなくなるのではないかと心配を致しました。1歳児と同じように保育室の環境を変え、3歳児の発達に即した遊具と種類と分量とルールで、先ず興味のある事に集中して遊び込む事の楽しさや満足感を得られると、ルールを守る事の大切さが分かって来るのではないかと思います。

評者：日吉 輝幸

まずは、毎年継続して本事業に応募されている、第2愛心保育園の皆様方に敬意を表します。単に実践報告を行うというだけではなく、常に問題意識を持ち、保育の質の向上に努めておられる姿勢には敬服させられます。今回は前年から引き続き、リスクマネジメントに主眼を置いた保育環境の構成と、保護者を巻き込んだの情報展開の様子が記述されています。

まず事例として記述されている3歳児の「やってはいけないことボード」については、一見3歳児にも分かりやすいと思えますが、禁止事項を羅列し掲示することは短絡的ともとれ、根本的な問題解決にはならないのではないかと考えます。また、1歳児クラスの保育室内環境を時期的に見直しているが、成長著しい1歳児クラスでは、子どもの成長にともなった室内環境の見直しは、家具の配置替えのみならず遊具の種類や量の見直しなど、生活と遊びに適した環境の見直しが必須です。なお、事例Ⅱの実践2が「噛みつきについて」とされながら、内容のほとんどが家庭での事故事例になっているなど、レポートの形式、記述方法等が未熟でした。今後、さらなる研鑽を期待するとともに、様々な問題事象について根本的な考察を期待します。

(4) 奨励賞

〈実践報告部門〉

- ・「子どもの将来の学力を伸ばす 絵本の読み聞かせ
～学ぶ力・基礎学力の定着に向けて～」
大橋 友佳、藤田 彩香、大井川 栞理、
荒川 梓、菅野 裕美、大友 彩子（福島県・みそら保育園）
- ・「子どもと遊び～遊びの中で輝く子どもの姿・育ち～」
齊藤久美子、佐藤 遼子、菊池 都、井上 明香莉
（群馬県・（公財）鉄道弘済会高崎保育所（ひばり保育園））
- ・「乳児期から始まる『歯』についての考察」
加藤 隆次、大槻 仁美、吉野 月七、松永 ゆかり
（神奈川県・亀井野保育園）
- ・「サーキットあそびを通しての育ち」
兵頭ゆかり、鎌田 彩乃、上間 彩香
（大阪府・幼保連携型認定こども園都島児童センター）
- ・「音楽活動による人づくり保育の実践報告
～音体教育によって子どもが成長する。子どもたちの健やかな成長を願
って～」
森本 暢（岡山県・やよい保育園）

子どもの将来の学力を伸ばす 絵本の読み聞かせ ～学ぶ力・基礎学力の定着に向けて～

福島県いわき市 みそら保育園 大橋 友佳・藤田 彩香・大井川 栞理
荒川 梓・菅野 裕美・大友 彩子

1. はじめに

近年、ライフスタイルの変化により子ども達の活字離れが進んでいます。全国学力・学習状況調査等でも小中学校ともに読書冊数が多いほど各科目の得点も高くなる傾向が見られるなどの結果も発表されています。

当園では、子どもの将来の学力を伸ばすための乳幼児期の取り組みとして、子ども自身が絵本に親しみ、学力の基礎となる地頭を鍛えるべく、「絵本の読み聞かせ」に力を入れています。多くの本を読んで育つと、語彙やものごとの知識が豊富になるだけでなく、読解力・思考力・判断力・集中力・表現力・共感性が培われます。毎日の保育活動では、絵本の読み聞かせで子ども達の地頭を鍛えています。また、子ども達自身も乳児期から絵本を眺めたり、自分で読んでいたりしています。子ども達は目を輝かせ絵本に集中しています。

また、当園では年間読書量1,000冊を目標にしています。当園での毎日の読み聞かせと家庭での読み聞かせの数を合計すると1,000冊程度になります。また、0歳から就学前までの5年間で毎日実践しますと、小学校就学時には、5,000冊の本に親しむことができます。私達は、年間を通して数多くの絵本に触れ、子どもひとりひとりの学ぶ力・基礎学力の定着化を図り、将来の学力を伸ばす基礎を培っています。

2. 研究の目的

0歳から5歳までの各クラスで絵本の読み聞かせならびに、絵本で学んだことを保育活動で実践することにより、子どもひとりひとりの学ぶ力・基礎学力の定着化を図り、将来の学力を伸ばす基礎を培うことを目的としました。

3. 研究の方法

- ・研究期間：平成28年6月～12月までの7ヶ月間
- ・対象年齢：0歳児～5歳児（6クラス）

(1) 0歳児クラス（赤ちゃん組）：

絵本に触れる機会を増やし、身の回りの出来事に対し興味を持つきっかけを作る。また、絵本を通して、物の名前を覚えたり、絵本の中の遊びを実際に行い興味や想像力を養う。

(2) 1歳児クラス（たんぽぽ組）：

絵本に親しみを持ち、生活に必要な言葉や色、形などを知る。様々な物に興味を持つ力を養う。

(3) 2歳児クラス（すみれ組）：

日常生活の中に自然に絵本を取り入れ、子ども自身が絵本を好きになる手伝いをする。かきこまって「これをする」ではなく、年間を通して子ども達が沢山の絵本に触れることにより、自分の好きな絵本と出会い、読書習慣を定着化させることにより、絵本が身近な存在になるようにする。

(4) 3歳児クラス（さくら組）：

絵本を通して、新しい発見を楽しむ。絵本を読んで学んだことを実際に体験し、見てみて、触ってみて新しい発見をする楽しさを味わう。

(5) 4歳児クラス（もも組）：

簡単な絵本に触れ、平仮名の単語を読む・意味を知る。絵本の読み聞かせから平仮名の形や読みを知り学習の意欲につなげる。

(6) 5歳児クラス（ふじ組）：

いろいろな種類（昔話・童話など）に触れながら、絵本の楽しさを味わう。様々な絵本に触れていき、自分達で絵本を作り、想像力を豊かにする。

4. 事例と考察

0歳児から5歳児の6クラスで7ヶ月間研究を実践しました。年齢毎に取り組んだ事例の一部を紹介します。

(1) 0歳児クラス（赤ちゃん組）・・・6月の事例より

- ① 月の計画：絵本に登場する触れ合い遊び・運動遊びを実際に行う。
(ボール、すべり台、土手すべり、はいはい等)
- ② 取り組み：絵本の中に登場する「はいはい」、「ひとり歩き」、「いないいないばあ」など保育者の真似をしていく。遊びを通し、言葉と行動をつなげる。
- ③ 考察：絵本に興味を持って見る事ができた。

運動遊びでは、お友達や保育者の真似をしながら行う姿も見られ、積極的に子ども自ら行動し、声に出したりと楽しんでいた。なお、運動遊びは保育者と一緒に行うようにしていった。また、不安にならないよう声かけをして、絵本と遊びがつながるよう環境を整えていった。



赤ちゃん組

(2) 1歳児クラス (たんぼぼ組)・・・7月の事例より

- ① 月の計画：動物がたくさん登場する絵本の読み聞かせを通し動物の名前を知る。
- ② 取り組み：ゆっくりはっきり読み進めていき、それぞれの動物の特徴などを伝えていけるよう分かりやすく声かけを行う。
- ③ 考 察：絵本に分かる動物が登場すると進んで発言する姿が見られた。分からない動物はゆっくり教えてあげると、オウム返しで発言していた。なお、名前ではなく、鳴き声で教えてくれた子もいた。絵本を通し、多くの動物に出会い、興味につながっていくことができた。



たんぼぼ組

(3) 2歳児クラス (すみれ組)・・・8月の事例より

- ① 月の計画：専門誌等で推薦の絵本、話題の絵本をどんどん読んでいく。
- ② 取り組み：年齢に合ったもの、季節に合ったものを選んで、たくさん読む。
- ③ 考 察：運動会にちなんだ絵本や、子ども達の当

てやすい絵本(動物・果物等)では、集中してよく聞いていた。絵本の中の絵を見て、言葉を発したり、「食べる」「寝る」などを真似る姿も見せていた。興味のある絵本や、なじみのある絵本も良かったが、初めて見る絵本にも興味を示し、集中して見ていたので、図書館で借りた絵本や、他クラスの絵本を読み聞かせするなど子ども達の学ぶ力を伸ばしていきたい。



すみれ組

(4) 3歳児クラス (さくら組)・・・9月の事例より

- ① 月の計画：体から出るいろんな物を知り、汗や便などの処理の仕方を知る。
- ② 取り組み：体からでる汗や便、鼻水などの仕組みを知り、その処理、拭き方などを伝えていく。
- ③ 考 察：体の仕組みを絵本を通して知り、後始末の仕方を実際に全員で行っていった。鼻水の拭き方も、ひとりひとりそれぞれだったが、上手なかみ方を伝えていったり、コツを伝えていくと、はりきって行う姿が見られた。子ども達は絵本への関心が高く、集中して絵本を見ることができた。特に汗の始末は夏の期間中とても重要になってくるので繰り返し伝えていくようにした。



さくら組

(5) 4歳児クラス（もも組）・・・10月の事例より

- ① 月の計画：言葉が他の言葉へ変身する絵本の読み聞かせを行い、その後、保育者がクイズを出し、どう言葉が変身するか理解する。
- ② 取り組み：かるたを使い、クイズを出したり、言葉の変化を理解して、楽しめるように配慮し実践していく。
- ③ 考察：かるたを使用し、それをトランプのように引てもらって参加型の活動を取り入れ、文字の変身を楽しみながら行っていった。平仮名を読める子はとても楽しげに活動に参加していた。今回、読みやすいかるたを選んで行っていくことができたので、子ども達にもわかりやすく進めていくことができた。クラスの園児全員で遊びの延長で言葉の変化を意欲的に学ぶことができた。



もも組

(6) 5歳児クラス（ふじ組）・・・11月の事例より

- ① 月の計画：劇遊びの物語に触れる（絵本作り）
- ② 取り組み：内容をよく知り、自分達で演じている役、セリフをふまえながら子ども達のイメージに任せて自由に表現できるようにする。
- ③ 考察：劇で演じた後に製作を進めていったため、自分が登場した場面をよく理解して「ここは、こうだったよね」など友達と確認をしながら楽しく絵本を作ることができた。ただ、セリフを文字（文章）にすることは難しかったが、声に出していきながら一文字ずつ書くことは出来ていた。劇で自分達が演じた場面を思い返しながら1ページずつ絵本を作成していった。また、劇の場面をよく覚えていて、すんなりと取り掛かることができていた。「絵本作り楽しいよね」と声にする子も見られ、絵本の楽しさを子ども自身が実感していると感じた。



ふじ組

5. まとめ

0歳から5歳まで月齢に応じた絵本の読み聞かせと絵本から学んだことを保育活動で実践しました。クラス毎のまとめは下記の通りです。

(1) 0歳児クラス（赤ちゃん組）：

遊びを通して、絵本に対する親しみを持つよう研究を行った。研究を始めた当初、絵本を見る際に、立ち歩いたり、後ろを向いて興味を示さない子どもも多くみられたが、毎日の絵本の読み聞かせを習慣化することにより、座ってお話を見ることができるようになった。また、子ども達の中には、絵本を見て指をさしたり、遊びを通して言葉を発してみたりと、楽しんで行えたので良かった。また、子ども達が絵本に少しでも興味を持つように、絵本の中の遊びや玩具等を作って計画的に楽しい雰囲気の中で進めることができた。絵本と遊びをつなげることは、月齢的に少し難しかったが、絵本を通して子ども達の成長の変化を見ていくことができたので良かった。今後は、できる・できないで計画するのではなく、様々なことに挑戦し、物の名前を覚えたり、絵本の中の遊びを実際に行い興味や想像力を養っていきたいと思う。

(2) 1歳児クラス（たんぼぼ組）：

この6月～12月まで絵本の読み聞かせを行い、子どもの成長した姿を身近に感じる事ができた。6月頃は、保育者が言った言葉の後にオウム返しで発していた子ども達だったが、次第に質問をすると自ら考え、答えるようになっていた。また、まだ話せない子もいたが、絵本に興味を持つことで、言葉と絵を照らし合わせ、口パクで言おうとしたり、一部分だけ発したりしていた。子ども達は、色や動物に興味があったようで、集中して見る子が何人か見られた。そのためか、覚えるのも早く、12月に色当てクイズを出した時には、ほとんどの色を正しく理解していた。また、1歳児で絵本の読み聞かせを行い、子ども達に、あいさつや色、身近なものや動物などを教えることができ、楽しみながら覚えてくれたことを嬉しく思った。絵本の読み聞かせでは、月齢に合わせてゆっくり読んだり、人物や動物によって声色を変えて読み聞かせを行うことにより、絵本への興味につなげるこ

ができると感じた。今後も研究で取り組んできた内容の
実践を継続し、絵本に親しみを持ち、生活に必要な言葉
や色、形などを知ったり、様々な物に興味を持つ力を養
ったりしていきたいと思う。

(3) 2歳児クラス(すみれ組)

研究当初は、じっと座って絵本を見続けることがなか
なか難しく不安だったが、計画を実践し、小さなこと
に気をつけて子ども達の注意をひけるよう心掛けてきた。
ひとりひとりの成長もあり、絵本の時間になるとしっか
り座って集中して楽しそうに見続けることができるよう
になった。子ども達の年齢に合ったもの、興味のあるも
の等、絵本を選ぶ時の大切さを改めて考えることができ
た。今回の研究では、日々の保育の中で子ども達に無理
の無いようにできることを計画し、自分自身も子ども達
の成長や、反応を楽しみながら進めていくことができた
ので良かった。少しでも、子ども達が絵本を「楽しい」「好
き」と思えるきっかけになっていたら嬉しく思う。また、
年齢に合った絵本、興味がわく絵本を子ども達の反応を
見ながら見つけていくことができた。読み聞かせて子ど
もが眠くなってしまふ絵本「おやすみロジャー」は、上
手くいくと思っていたのだが、2歳児の月齢では内容が
難しく、予想していた反応が見られず残念だった。紙芝
居(舞台使用)や、大型絵本等、保育園ならではの教材を
意識して使用していくことができた。今後も研究で意識
したことを生かして、子ども達が絵本を身近に感じてい
ける手伝いをしていけたらと思った。

(4) 3歳児クラス(さくら組) :

7ヶ月間、「新しい発見を楽しもう」のテーマで研究
を進めてきた。絵本で知ったことを実際に見たり、触っ
たり、試したりできる時間を設けることで子ども達の更
なる意欲、関心につなげていければいいなと思い、活動
に取り組んだ。特にヒマワリを種から育てる活動では、
初めてヒマワリの種を見て、触って、匂いを嗅いで嬉し
そうに世話をする姿、花が枯れてまた種に戻るというサ
イクルに驚く姿、「この種を土に埋めて、またヒマワリ
育てる！」とワクワクしている姿が見られた。絵本での
知識を実際に試すことが新たな発見につながり、更なる
興味や関心につながっていく瞬間を間近で見られたこと
がとても嬉しかった。なかなか絵本だけでは想像できな
いことも実際にやってみることで子ども達の経験につな
がり、知識になるのだなと感じた。また、絵本を見てか
ら実際に試す活動に移ったので、子ども達の興味関心
が高まった状態で活動することができた。そのため、「さ
っき絵本で見たよね」、「コレ知ってるよ」、「何でかわ
かる！」など子ども達も活動に積極的に楽しく進めるこ
とができた。絵本だけでは理解が困難な、虫歯や入れ歯の
話、千単位の数の話、植物の種・成長などを分かりやす
く伝えていくことができたので、今後も少し難しい内容

のものは実際に試す時間を取り、新しい発見をする楽し
さを養っていききたいと思う。

(5) 4歳児クラス(もも組) :

4月に比べてほとんどの子ども達が平仮名を少し読め
るようになった。絵本の平仮名を真似して書いたり、体
で表現して見たり、自分の名前平仮名を使って他の言
葉を作ってみたりと、子ども達が夢中になり集中できる
ような活動を取り入れることでこんなにも読み書きがで
きるようになることが出来たので良かった。読むのが難
しい子も絵本にたくさん触れ、平仮名にも触れていくこ
とができたので良い機会になった。最後のかかる遊びも
とても意欲的に参加し、全員がしっかり取ることができ
ていたので良かった。今回の研究は余裕を持って準備を
行い、焦ることなく進めていくことができた。そのため、
その余裕から子ども達への指導も心に余裕を持って行っ
ていくことができたので良かった。読める平仮名も増え
てきたので、これからもっとスムーズに読むことができ、
形と読みも一致できるように、遊びやワークを使い指導
していきたいと思った。次のクラスが年長なのでそのク
ラスに問題なく上がれるように、分かりやすく読み書き
を伝えて学習の意欲につなげていききたいと思う。

(6) 5歳児クラス(ふじ組) :

この7ヶ月間を通していろいろな絵本に楽しく触れて
いくことができた。日本昔話・世界昔話にはどんなもの
があるのかなども知ることができた。仕掛け絵本にはど
んなものがあるのかなど仕掛けの種類にも興味を持ち、
自由に絵本を読む時間を設けていくと、「あ！これも仕
掛け絵本だ！」と気づく子どもも多く見られた。様々な絵本
を知っていきながら自分達で絵本を作ることもしてい
くと、はじめは「ちょっと難しい」と口にする子どもいたが、
回を重ねていくうちに「楽しい」と思う子どもが増えてい
った。自分達で作った絵本も保育室の本棚に置き、自由に
読めるようにしていったところ「次貸してね！」と順番
待ちするほど大人気の一冊となっている。文字が読める
ようになり自分達で読んだり、文字が書けるようになり
文章を書いたり、絵本を通して文字にも触れていくこ
とができたので良かった。また、普段から読み聞かせをし
ている絵本は、子ども達も大好きなんだなと実感するこ
とができた。絵本を読む以外にも、今回は作ることも行
い、子ども達の想像力を豊かにしていくこともできたの
ではないかと思う。人前で絵本を読むこと、友だちと同
じ絵本を共有して読むこと、自分達が演じた劇を一冊の
本にしていくこと、そしてひとりひとりオリジナルの絵
本を作ることができ絵本の楽しさを存分に味わってい
くことができていたので良かった。今後も、様々な絵本に
触れていながら想像力、表現力、文章力を養っていけ
るよう絵本に触れていく時間を作っていきたい。

6. さいごに

毎日実施している絵本の読み聞かせの内容を、実際に体験できるよう保育に取り入れ、学ぶ力・基礎学力の定着化を行ってきました。絵本の読み聞かせの知識だけでなく、実際に体験することにより子どもひとりひとりが、学ぶ喜びを知る成果に繋がりました。研究の成果として、子ども自身が学びたい意欲を引き出す効果が得られ、また、数値化が難しい非認知能力を伸ばす効果にも繋がったように感じます。これからも絵本の読み聞かせを継続し、学ぶ力・基礎学力の定着化を図り、子どもの無限の可能性を伸ばしてまいります。

参考文献

- 「学力」の経済学
株式会社ディスカヴァー・トゥエンティワン 中室牧子著
- 12歳までの読み聞かせが子どもの「地頭」をつくる！
WAVE出版 ランディー由紀子
- 将来の学力は10歳までの「読書量」で決まる！
株式会社すばる舎 松永 暢史

講評：子どもの将来の学力を伸ばす 絵本の読み聞かせ
～学ぶ力・基礎学力の定着に向けて～

評者：天野 珠路

園全体で絵本の読み聞かせや読書活動に取り組む様子が伝わってきます。年間読書量1000冊という大人でもなかなか到達できない目標を掲げ、読書を通して子どもの学力や知力を伸ばし「地頭」を鍛えることを重要視しています。

たくさんの絵本に触れて、様々な物語や言葉の豊かさを感じて育つことはとても大切ですが、そもそも絵本や物語は子どもの学力を伸ばすために存在しているのでしょうか。一人ひとりの興味や関心に沿った絵本を子ども自らが手にしたり、保育者が大好きな絵本を繰り返し読み聞かせしたり、絵本の中の登場人物に自分を重ねたり、お話を再現して遊ぼうとしたり、こうした楽しみや喜びがまずあってこそ絵本やお話は心の栄養になると思います。

楽しい遊びや体験を通して子どもの学びが促されていくこと、絵本やお話に親しむ中でひらかれる感性や想像力、お気に入りの絵本を繰り返し見たり読んだりすることで培われる語彙力や創造性。こうしたことを意識しつつも、それを義務として課すのではなく、あくまでも子どもの柔らかな心や主体性を大事にしてほしいと思います。

評者：清水 益治

次の3点が評価できます。①各年齢にあった絵本をそれぞれ1000冊程度ずつそろえている点。②毎年1000冊程度の絵本を吟味して購入し、各年齢の絵本のコーナーを充実させている点。③すべての年齢で年間1000冊を目標として掲げ、保護者も巻き込んで園全体で取り組んでいる点。

今後、次の4つのことを期待します。①子どもの自発的な活動としての遊びに、絵本やその世界が活用されるような取り組みを期待します。保育者主導の活動としての読み聞かせを繰り返すことは、逆効果になることもあるので、少し工夫をお願いしたいと思います。②一人ひとりの子どもに、

印象に残る絵本や好きな絵本をつくって頂ければと思います。同じ絵本に何度も接する機会を設けたり、同じ話を複数の違う絵本で経験させることが、このような絵本を作るのに役立つと思います。③一人ひとりの子どもの発達に合わせて読み聞かせができるように、保育士のスキルを向上させて欲しいと思います。④実践報告としてまとめる場合は、結果や成果をわかりやすく示して頂ければと思います。

評者：日吉 輝幸

みそら保育園の実践報告を拝見し、「保育観」という言葉が頭に浮かびました。保育観とは、保育者が大切にしている子どものための最善の保育のことを言います。筆者は、乳幼児期に与える絵本は、「読むものではなく、読んでもらうもの」を基本として、絵本への興味関心はもとより、読み手の声や表情を身近に感じ、時には読み手の肌の温もりを感じられることが、乳幼児の情緒の安定のためには欠かせないと考えています。また、数百、数千冊の絵本を読んでもらった、読んだという経験より、たとえ一冊であっても大人になってから「大好きだった」と言える、記憶に残る絵本があれば良いとさえ思っています。一年に1,000冊、小学校の就学までに5,000冊の絵本に触れることを目標にしているという保育は、あまりに筆者と保育観が違い過ぎていると言わざるを得ません。

しかしながら、実践報告書ではより多くの絵本を読むことといった限定的なものではなく、どのように絵本に触れさせ、好きになるかという0歳児への関わりから始まり、劇遊びを自らが制作する絵本で表現するという5歳児まで活動が、年齢別に記されており興味深い点もありました。報告書にも書かれていましたが、絵本について「親しむ」「楽しい」「好き」という気持ちが持てるよう、今後も細心の注意を払って保育を行っていただきたいと思います。

子どもと遊び ～遊びの中で輝く子どもの姿・育ち～

群馬県・(公財) 鉄道弘済会高崎保育所 (ひばり保育園) 齊藤 久美子、佐藤 遼子
菊池 都、井上 明香莉

I. はじめに

近年休日の過ごし方として、家族揃ってテーマパークや動物園、水族館などに出掛ける家庭が増えている。また、長時間保育の子が増え、帰宅後ゆっくり家庭で遊ぶ時間も作れず、自発的に遊びを展開させて楽しむことが減っているのではと感じた。

園での遊びの重要性を感じる中、一人ひとりの遊びが満足できるものになるよう、また充実するようサポートや見直しをしていきたい。

II. 研究の目的

- ・子どもたちが遊びの中で何を体験しているのかを捉えていく。
- ・遊びがより充実したもの(発展していくもの)になるためには、どのような働きかけをしていけば良いのかを考える。
- ・遊びの力が育つよう働きかけ、創造性や想像力を高める。

III. 研究の方法

- ・子どもの遊ぶ姿を捉え、記録していく。(主に2014～2016年度の縦割りクラスでの様子)
- ・遊びを通して、子どもの様子や育ちを職員間で話し合いながら共有する。
- ・保育士が働きかけて発展した遊びや自発的に展開された遊びなど集中して楽しんでいる様子を事例として示していく。

| 2014 年度 | のびのび組 20 | | すくすく組 22 | | 合計 |
|------------|----------|----|----------|----|----|
| | 男 | 女 | 男 | 女 | |
| 5歳児 | 3 | 3 | 4 | 3 | 13 |
| 4歳児 | 4 | 4 | 3 | 5 | 16 |
| 3歳児 | 3 | 3 | 4 | 3 | 13 |
| 合計 | 10 | 10 | 11 | 11 | 42 |

| 2015 年度 | のびのび組 20 | | すくすく組 20 | | 合計 |
|------------|----------|---|----------|----|----|
| | 男 | 女 | 男 | 女 | |
| 5歳児 | 4 | 4 | 3 | 5 | 16 |
| 4歳児 | 4 | 2 | 3 | 3 | 12 |
| 3歳児 | 4 | 2 | 3 | 3 | 12 |
| 合計 | 12 | 8 | 9 | 11 | 40 |

| 2016 年度 | のびのび組 20 | | すくすく組 18 | | 合計 |
|------------|----------|---|----------|---|----|
| | 男 | 女 | 男 | 女 | |
| 5歳児 | 4 | 3 | 4 | 2 | 13 |
| 4歳児 | 4 | 2 | 3 | 2 | 11 |
| 3歳児 | 4 | 3 | 4 | 3 | 14 |
| 合計 | 12 | 8 | 11 | 7 | 38 |

IV. 事例と考察

【事例1：お店屋さんごっこ】 2014年度

《段階①》

10月になり、保育士が廃材を利用し、食べ物を作ってみた。4・5歳児の何人かが徐々に気になったようで「なにしてるの?」「なにつくってるの?」「わたし(ぼく)も作ってみたい」と集まってきた。最初は、保育雑誌のイラストを見ながら使えそうな空き箱や廃材を見つけ、見よう見まねで作っていた。ダンボールでクッキーを作っていた4・5歳児女児グループが10月ということで「ハロウィンだから、かぼちゃのおばけクッキーにしよう」と考え、クッキーの模様を描いていた。その後、せんべい、アイス、たこやきなどが仲間入りとなった。買い物カゴの用意もでき、やりとりをしようと思った所、
A(4歳児女児)「おかねがないから、かいものできない」
B(5歳児男児)「それじゃ、おかねもつくらなきゃ!」
C(5歳児男児)「ものにいくらかかかなくちゃね!(値段のこと)」

とお金の作成をしたり、商品名と値段を丁寧に書き、分かりやすくテープで付けたりしていた。

《段階②》

すくすく組クラス内でのお店屋さんごっこだけでは物足りなくなったようで、「となりのクラスのおともだちにもきてほしいな」と5歳児男児からの発言をきっかけに、隣のクラスの子をお客さんとして招待するやり方へと変化が見られた。今まで多くの作品を作ったすくすく組の子どもたちは、招待した子に「うわぁ～すごい!!」「これ、おいしそう!」「これ、ひとつくださいな」など言われ、中には「これ、つくったのわたし(ぼく)!」と誇らしげに言う姿もあった。

クラスごとにお店屋さん(すくすく組)と、お客さん(のびのび組)に分かれて『お店屋さんごっこ』を楽しんで

いた。また、保育士が「ポイントカードがあったら買い物をもっと楽しくなるよ！」と働きかけ、作るとさらに盛り上がっていた。お店屋さんの子もポイントカードシステムをすぐに受け止め、「ポイントが〇コあつまったら、おまけがありまーす！」と言ってお客さんを呼びこんでいた。

《段階③》

11月後半となり、看板もクリスマス仕様に変えて楽しんでた。お店屋さん役の子が一目で分かるようクリスマス仕様のスタッフ帽子をかぶってなりきっていた。寒くなってきたこともあって今までのお店屋さんだけでなく、5歳児男児が考え『しゃぶしゃぶ屋』も作った。保育士が第一号のお客さんとして案内され、「なんめいですか？」から始まり、注文前のお水やおしぼりの提供、また「しゃぶしゃぶのたべかたですが、あついおゆにおにくをいれて…」など一つ一つ丁寧に本格的な接客をしていた。買い物をするだけのお店屋さんだけでなく、食べ物屋さんへと展開していた。製作も細かく、両面に異なる色が塗ってあり、“生肉は赤、お湯に入れて茶色になったら食べられる”と本人なりに考えたようだ。

【考察1】

製作を通してお店屋さんごっこへと変化し、子どもたちの発想力から色々な遊び方へと展開させ、遊びを豊かなものにすることが出来た。ごっこ遊びを通し、子ども同士でのやりとり(役割・設定決めなど)をする中で個々の思いや意見を伝え合い、話し合っただけで決めるといった経験も遊びから学んでいるのではないかと思う。現時点では、3～5歳児クラス内の興味がある子達が集まり楽しんでいる遊びだが、クラス全体で遊びこめるようになったらきっと子どもたちもより一層楽しめ、達成感も大きなものになるのではないかと感じる。保育士や子どもたちのクラス替えがある中で、子どもたちが作った作品で新たな遊びへと広がっていくのか今後も見守ってきたい。

【事例2：園庭でのガソリンスタンドごっこ】2015年度

この年度の3歳以上児は、比較的幼く外遊びが大好きな子が多い。じっくり遊び込むというより、思う存分体を動かせる遊びを好むので、前年度のような製作はもちろんのこと自ら遊びを考え、展開させていく姿はなかなか見られない。しかし、保育士が遊びのきっかけ作りを行うと、子どもたちなりに遊びに興味を示す姿が見られた。

《段階①》

保育士が縄跳びを用い、乗り物に乗っている男児に「いらっしやいませー！」とガソリンを入れる動作をした。声を掛けられた男児もガソリンスタンド店員役の保育士

とのやりとりを楽しんでいた。その子と一緒に遊んでいた他の男児数名もその光景を見て「ぼくのにもガソリン入れて！」「ガソリンがそろそろ終わりそうだ」等と言い、自然と集まってガソリンを入れてもらうのを待っている列が出来た。

《段階②》

その日だけの遊びでなく、「せんせい、きょうもガソリン入れてね！」と、子どもたちが遊びへと誘い、外遊びでのガソリンスタンドごっこが続いていた。前回同様、保育士が店員役となり子どもたちがお客さん役となって会話をしながら楽しんでいた。会話も大人同士が行うやりとりのように、保育士も本物の店員になりきって接客をしていた。

保「お客さん、今日はどうぞされました？」

子「タイヤがこわれてしまいました…」

保「パンクですね！新しいタイヤに交換しましょう」

保「お客さん、ガソリン満タンです。これからどちらまでお出かけですか？」

子「おみやまで」

保「それなら高速道路に乗って圏央道経由ですね！お気をつけて」

乗り物遊びを楽しんでいる男児たちが中心だったが、徐々に遊びが気になり始めた女児も乗り物を見つけては列に並んだり、混ざりはしないものの近くに寄って砂遊びをしたりといった姿が見られた。

《段階③》

ガソリンスタンド近くにお弁当屋さんをしている女児グループがあった。

保「もしもし、私のガソリンスタンドが繁盛しているの
で、お弁当の配達お願いします」

子「おべんとう、できたらとどけまーす」

子「どんなおべんとうがいいですか？」

ガソリンスタンドだけでなく、同時にお弁当屋さんごっこへと広がって、未満児クラスの子も何人か加わり、保育士と一緒に「〇〇円です！」と言っていた。次第に子どもたちが「店員」「お客さん」へと分かれて遊ぶ姿が見られた。

【考察2】

乗り物を乗り回して遊ぶだけだった子どもたちが、その日だけの遊びとしてではなく、保育士が仲介しながらも継続的な遊びへと広がっていた。子どもたちは店員役の保育士とのやりとり・姿からガソリンスタンド店員という仕事を学んだようだ。そして休日に出掛けた先でのリアルな仕事現場(例：スーパーのレジの人、ガソリンスタンド店員等)を子どもたち自身も気にして観察し、見

て覚えたこと（仕草や口調、専門用語等）を遊びの中につなげていたのだろう。ごっこ遊びが具体化されることによって、より本物らしい仕事内容や働く人を学ぶ機会へつながるのではないかと感じた。

【事例3：戦いごっこ】

エピソード1 2015年度

<ヒーローへの憧れが強い男児>

戦隊ヒーローが大好きで、歴代のヒーロー名も頭に入っている4歳児男児D。大好きなあまり、自由遊びではヒーローになりきり、一人で空想戦いごっこをして室内をダイナミックに動き回っている。室内はもちろん廊下・テラスは走らないという園の約束事を伝えながら関わった。自由遊びだけでなく、会話でもヒーローの話題が主である。外遊びでは“ヒーローが乗り物に乗って〇〇へ行く”という設定で遊んでいたり、砂遊び用のスコップを剣に見立てて振り回したり…と結果的にはヒーローごっこへとつながっている。

Dの空想戦いごっこに対して、魅力を感じた同年齢の男児たちが刺激を受け、4～5人での戦いごっこへと広がっていった。ブロックで剣等のアイテムを作り、他の子が居るのも構わず夢中になって行っていた。しかし、今まで戦いごっこの経験が無い子どもたちにとっては、他児の手や足等体の一部が当たったり、アイテムが当たったりという現状に驚き、「せんせい、〇〇くんがパンチした」「〇〇くんのアイテムがあたって、いたい」と自ら遊びに加わった男児たちが訴えてきた。男児たちの主張も聞きながら、同時に“戦いごっこをするということは…”とルールを子どもたちに伝えた。全てを納得した上で（約束事も守った上で）、子どもたちにどうするのかは判断を任せつつ、様子を見守った。

エピソード2 2015年度

<集中して楽しめた戦いごっこ>

日頃から体を動かしたり、ヒーローごっこを楽しんだりしている5歳児男児Eと4歳児男児F。土曜日に登園してきた時にソフトブロックで遊んでいるといつの間にか戦いごっこが始まり、作った剣を片手に「やあ！！」「とお！！」など楽しむ姿が見られた。いつもだったら室内の狭いスペースでは危ないからと止められることがほとんどだが、この日は土曜保育ということで登園人数も少なく、他の子も部屋の端寄りですべて遊んでいたため、広い空間が確保できた。そのため、止めることはせずに様子を見守っていると剣を力づくで当てに行く形ではなく、戦う動きを楽しむことにポイントを置いているかのように、お互いにある程度の距離を取りながら相手の動きをかわし、ひたすら動くことを楽しんでいた。動きをかわすポーズにはカッコよさをイメージしているようで、いつの間にか側転も取り入れ本格的なアクションのようになり、見ている保育士たちを感心させるような動きを見せてい

た。Fが剣を相手の足元にゆっくり当てに行くような動きを見せるとEがそれをジャンプしてかわしたり、相手を痛めつけて勝つという行動ではなく、2人で意気合わせながら戦いの動きを楽しむことで、遊びが持続していた。

エピソード3 2016年度

<ヒーローごっこ撮影会>

11月下旬、夕方の自由遊びで5歳児男児が中心となり、いつものようにペタペタブロックを使って剣やアイテムを作り遊んでいた。今回はその他に一人ひとりがカメラも作っていたので、保育士の「撮影会すれば面白いんじゃない？」という一言で自分たちのカメラを使って撮影スタート。「セルフタイマーにしよう！」「俺のも！」と近くにあった机にカメラを置いて撮影を始めた。セルフタイマーをスタートし、イメージした思い思いのポーズを決めていく。保育士が「本当に撮れればいいね…」とつぶやき、「じゃあ、本物のカメラでも撮ろうか！」と提案すると、嬉しそうな表情を見せた。その後デジカメで撮影を開始した。

「僕はウルトラマン」「僕はエグゼイド」と、憧れのヒーローをイメージしてポーズを決めていた。少し恥ずかしがりながらも、誰かに見てもらえる嬉しさや、楽しさを感じていたようだった。

しばらく遊んでいると、近くで見えていた4歳児男児のGが「じゃあ、Gはカメラマンするー！」と遊びに入る。ペタペタブロックですぐにカメラを作り、「カシャカシャ」と言いながら撮影を楽しんでいた。

撮る側、撮られる側共に、それぞれの役になりきり、遊びに入り込んで楽しむ姿が見られた。撮った写真は印刷して、廊下に掲示することを話した。子どもたちはカメラで撮った写真を、白い紙を写真用紙に見立て、絵で表すことで写真にしたという感覚、表現ができたようだ。作ったカメラはとっておき、遊びの続きが出来るようにした。

【考察3】

ヒーローごっこ・戦いごっこは、成長段階で多くの子どもたちが通る道だと思う。しかし、月齢を重ねていく内に心の成長も見られることで、自然と戦いごっこへの熱が冷め、他の遊びや活動等に興味・関心を示していくのではないだろうか。戦いごっこが遊びのメインとなっている男児が、何故ヒーローごっこ・戦いごっこに魅力を感じ続けるのか気になる所でもある。

広い空間を確保して楽しめた戦いごっこでは、戦う動きのレパートリーを瞬時に生み出すことで脳への刺激にもなり、経験から発想へとつながる楽しい遊びの場となったことだろう。また、相手を思いやる気持ちがなければ持続しない遊び方だったと思う。

ヒーローごっこ撮影会では、視点を変えての遊びとな

った。自分達だけで楽しむ「戦いごっこ」ではなく、周りの人にも見てもらいながら、カッコ良いポーズを決めるという遊び方は新鮮だったようだ。

ヒーロー撮影会で遊んだ子どもたちを中心に撮影会の遊びが継続できるよう働きかけた。廃材やブロックを使っ
てのアイテムを生かして、一人ひとり前
に出て紹介し、周りの子は撮影する
という遊びにつなげることができた。
作品への熱い思いを語り、紹介し
たり質問したりする時間も設け、
“遊び”だけではなく、話を聞く
姿勢や態度も大切にしながら遊
んだ。言葉一つで発展していく遊
びを見ているとどれだけ声掛け
や見守り、世界観を引き出すこ
とが大切なのかを考えさせられ
た。

【事例4：魚釣りごっこ】 2016年度

5歳児男児Hが中心となり、七五三製作時に取り組んだ三つ編みの紐（スズランテープを使用）を使っ
て、魚釣りを始めた子どもたち。

釣竿の先にはセロハンテープを使い、くっつけることを考えたH。しかし、いざ遊んでみると粘着性に欠けてしまい、なかなか上手く出来ない。そこで今度は、ガムテープが浮かんだ。やってみるとしっかりくっつき、思い通りに…。そこから子どもたちのイメージと発想が広がっていった。

魚や亀を作る方法の一つとして、読み聞かせで見た『つくってあそぼう！おまつりやたい』があった。その絵本の存在を思い出し、子どもたち自ら絵本の中の金魚や亀を真似、廃材を使っ
て作り始めた。

作っては直し、考え、どうすれば上手く魚が釣れるのか…。また、遊んでいくうちに、ルールや釣り方、役割も決まってい
き、決まりを作ることで長い期間遊び込めていた。組み合わせマ
ットで区切り、魚釣りのコーナーを作っ
て、竿で魚を釣る。「釣れた釣れたー！」としゃぐ子どもたち。「先生見て！」と作った竿や釣った魚を自慢し、褒められて喜んだり、時間をかけて作ったものが遊びになる嬉しさなどを感じたりすることが出来ていた。5歳児が楽しく遊ぶ姿を見て、4歳児のIとJが様子を見に近寄り、「混ぜてー！」と声を掛けていた。5歳児の遊びに興味を示したことで、4歳児も遊びの幅を
広げ楽しむことが出来た。

【考察4】

“魚釣り”という遊びで何が必要なのか、どうすれば遊べるのか、どのように作れば完成するのかという5歳児の発想一つひとつが作品に活かされていた。遊び込めるまでには、何度も作り直し、考え直しを繰り返した。その中で気づいたこと、感じたことを次にしっかり活かすことが出来ていた。その結果が楽しさに繋がり、3カ月という長いスパンで遊び込めたのだろう。今回は、製作中の作品もあったため、持ち帰りせず、作ったもの
とっておいたので、「またやりたい」「お友だちとまた遊

ぼう」という気持ちを持続することが出来た。

遊びとしては、保育士がもう一工夫し、「魚釣り大会」などがあることを提案したら、更なる遊びが広がって
いたかもしれないと感じる。子どもたちの日々の経験が、
今回のように遊びとして充実できるよう見直し、楽しむ
遊びに発展できるよう、保育士としての役割を考えて
いきたい。

【おまけの事例】

遊びの広がり 2016年度

2016年度の1～3月になってようやく全体的に遊び込
む姿が見られるようになった。

また、異年齢での集団的な遊びも動き出した。廃材を使っ
ての製作では、5歳児を中心にお友だちと協力しながら、自分たちのイメージしたものを完成度の高い状態
で表現しており、ドローンや家、人形の部屋などを日々
手を加えながら変化させ作り上げていた。

また、その作品を大事に使いながら、遊びを色々と展
開させることができていた。5歳児が教わっているお茶
の作法をいつの間にか遊びに取り入れ始め、お茶の道具
に見立てた物を使って雰囲気を楽しみ、興味を示した
3・4歳児にお茶の作法を教える姿も見られた。（ボー
リングごっこなど、ルールを作って5歳児が遊びを教
える姿も…）

園庭での遊びは、ルールのある集団遊びを楽しみたい
子が増え、異年齢で、しかも大人数で何度も繰り返し遊
べていた。

【考察】

自発的に遊びを展開させる姿があちこちで見られ始め、
遊び込む姿、生き活きとした姿が全体的に広がってい
った。5歳児が遊びを上手に年下の子に教えられるよう
になり、「人に伝える力」が日々の生活の中で育ってきた
ことと、年下の子たちも話を聞く姿勢が育ち、色々な経
験をして理解力がアップしたことにより、異年齢での遊
びの関わりが広がり、盛り上がりにつながったのだと感
じる。

V. まとめ

子どもたちは、日々の生活の中で自分のやりたい遊び
を見つけ、友だちと共有し楽しむことを自然と身に付け
ていくのだと感じていたが（もちろんサポートが必要な
子もいる）、近年遊び方が分からず、遊びを発展でき
ない姿が多く見られると感じた。子どもたちの遊ぶ姿
を捉えていくと、兄、姉からの刺激を受けて家庭で色
々な遊び方を学んでいる子や自発的に遊びを楽しめる
子が多い時に早期に協同的な遊びへと発展していくよ
うに感じた。

また、遊びをステップアップさせていくには、その子
自身のレベルアップも必要で、様々な面から経験値を高

めていくことにより、遊びの発展性につながるのだと思う。保育士の働きかけひとつによって遊び方を考えるきっかけになり、遊びが変化していく。

戦いごっこからの遊びの発展性は、色々な視点から考えることができた。武器を振り回す、戦うという動きは危険を伴うので十分注意が必要だが、当てられた時の痛みを知ることや相手との距離の捉え方など学べることも多いので、そういう経験もできるようサポートしていきたい。「ヒーローへの憧れが、人間としての知恵や勇気をつかむよりも、変身のかっこよさ、見栄えの強さだけになっていないか。大切なのは、人生には多くの難関があり、それを乗り越える知恵とは、困ったときにどう打ち破るかを考え、勇気を出してやり遂げること。人間としての本当の強さとは何か？を子どもたちに感じ取らせ、人間らしい成長を遂げる過程（ドラマ）に感動できる子どもたちを育ててほしい。」『引用文書』（今井和子・2016年）

日々の生活・遊びの中で、自分で考え創意工夫する体験を積み重ねながら困った時に自分から進んで動けるように育てていきたいと感じた。ヒーローへの憧れからその子自身が頼れる存在になることで、見栄えの強さだけ

の状況から脱出していけるのではと思う。

環境に馴染めず、遊びに入っていけなかったり、落ち着きがなく目が離せない子がいたりすると保育士はそちらにつきっきりになってしまい、遊びのきっかけ作りが中々出来ない現状がある。まずは一人ひとりが安心して過ごせる場所作りをし、そこから少しずつ子どもたちの遊び方を捉え、遊び方の提案や一緒に楽しむことをしながら、遊びを変化させるサポートをしていきたい。

自発的な遊びの展開には、発案者がいることによりそこから遊びが動き出すのを感じる。

また、それに賛同する子がいることによりブームが起こるのだと思う。今後も研究の目的である遊びの力を育て、創造性や想像力を高めながら子どもたちの自由な発想や発言を引き出し、充実した遊びへとつなげていきたい。

文献

参考文献：きうちかつ・2006年・おまつりやたい・福音館書店

引用文献：今井和子・2016年・保育士のための書き方講座・三報社印刷（株）

評者：石川 昭義

5種類のごっこ遊びの中での様々な子どもの様子が描かれています。縦割りクラスにおけるそれぞれの場面での子どもたちの会話や保育士とのやりとりが生き生きと描かれています。3年間という長い年月にわたって子どもの遊びを考察していることも評価できます。

研究目的の一つに「子どもたちの遊びの中で何を体験しているのかを捉えていく」が掲げられていました。これは、指導計画の立案の際にも実践の振り返りの際にも重要な視点であると考えますが、これについての考察が不十分であったと思われます。ごっこ遊びだからこそ表現されるものの中で、子どもの何がどのように培われたかについて、5領域の観点から、また日常生活とのつながりの視点から踏み込んだ考察が期待されます。

「事例と考察」では、「段階」という言葉づかいがありますが、どういう視点からの「段階」であるのか、また、「戦いごっこ」の事例では、「ルールを伝えた」とありますが、ルールの内容や、その後はどうなったかなど、より具体的な説明があると現場ならではの臨場感が出たのではないかと思います。遊びの発展性において、子どもの発想を生かすことと保育士からの働きかけ・環境の構成との関係について、今後の研究が深まることが期待されます。

評者：馬場 耕一郎

本研究は、保育士が休日の家庭での過ごし方の変化や長時間に渡り保育所で過ごす子どもが増えたことから、家庭において遊ぶ時間が減少しているのではないかと疑問から始まった研究です。日常の変化に気づく姿勢は、保育士の専門性を高める上で必要不可欠なものであり、動機として大

変すばらしいと思います。

遊びの充実を図るために、子ども達の遊ぶ姿を観察され、まとめた努力は評価に値します。観察する目を養うことは、保育の質向上には欠かせません。子ども達の遊びがより充実したものとなるために、継続して取り組むことが望まれます。

今回の実践研究では、子どもとの関わりが中心でした。今後、遊びを発展させるために保育士が環境構成をどのように行ったかという観点を盛り込んでまとめることにより更に深い実践が行われることに繋がると思います。

評者：酒井 かず子

H26年度から研究を継続してきた結果、子どもの経験や想像の世界が遊びの中に沢山取り入れられ、遊びが発展している様子がよく分かり、読んでいて、とても楽しかったです。

最初は保育士がきっかけ作りをし、それに子どもが興味を示し、だんだん子どもが主体的に取り組み、発展していき、3年目には自発的に遊びを展開できるようになり、異年齢の中で5歳児が3歳児や4歳児に教えてあげたり、一緒に遊ぶ仲間が増えたりと、着実に変化していく様子が分かりました。

気になったのは、保育室の環境がどのようになっているのかが読み取れなかったことです。異年齢の子ども達の発達や興味に合わせた保育材料や、集中して取り組めるような保育室の配置になっているのか等です。異年齢の子ども達は発達や興味にも開きがあります。この開きがある子ども達一人ひとりの興味を満たす遊具の種類や量が用意されているのか、また、一人で集中して取り組める場所があるのか等です。次回にはこのような内容も加えて頂くと、さらに発表の内容が分かりやすく、質の高い保育につながると思います。期待をしています。

乳児期から始まる『歯』についての考察

神奈川県・亀井野保育園 加藤 隆次、大槻 仁美、吉野 月七、松永 ゆかり

〈はじめに〉

“ゆりかごから墓場まで”という言葉があります。ご存知のとおり、『一生を通して変わらぬもの』といった意味ですが、『歯』とも、まさに“ゆりかごから墓場まで”付き合いたいものです。

『歯』の大切さについて、平成30年4月より保育所保育指針が改定されます。3歳未満児、3歳以上児という区分けの中で育ちをどうとらえていくか、0歳児からの「口腔」について改めて成長発達にどうかかわっていくのか検証してみたいと思います。

この資料は、全体の枠組みではとらえられていない「食べる、かむ、飲み込む」という、人として基本的な事柄が意外と育ちの中で無意識に進んでいくという危うさがあるのではないかとことです。待機児童解消と言われられる中で無認可施設が認可になり、小規模施設や株式会社立の保育所や認定こども園の施設の増加の中で『預る』ということが優先になり、子供の育ちが保障されているのか等も課題としてあります。そのような中、保育所で実際に行われている保育の中で『歯』について考察してまいります。『歯』の生える時期、0歳児からの成長発達に及ぼす影響について確認したいという思いから取りあげて見ました。

まず、人間生活を豊かに保つために、『歯』の健康を保つことは、欠かすことのできない重要なことです。

しかし、歯に関する数々の資料を読み解いてみますと、大体『歯』に対する教育というものは、3歳児ぐらいのいわゆる『幼児期』からを対象としたものから始まり、

あまり0歳児、1歳児などの乳児に対しての『歯』の教育は見受けられません。

確かに、自我の未発達な乳児期の子供たちに対し、言葉で『歯はとても大切だ』と訴えたところで、どれだけ子供たちに意味が通じているのか考えるまでもありません。だからと言って、何もしなくてもよいとは決して言えないと思うのです。

元々自身で自分を育める力を持っている子供たちに対し、私たち職員（大人）が何もかも先回りしてやってしまうのではなく、子供たちが自主的に率先して行える環境を作っていくにはどうしたらよいのか。

それは、まず土台作りではないでしょうか。

ゆりかごからの出発～自身をはぐくむ力を『はぐくむ』ためへの土台作り～

＜健全な身体を形作る、“心”をはぐくむために＞

健全な体、健全な歯を作ることはまず、健全な心を作るところから始まると思います。

美しい花や、おいしい食べ物は、肥沃な大地に育ちます。

人間も一緒だと思うのです。美辞麗句を整えた体裁ばかり繕う場所ではなく、しっかりとした無骨で中身ある場所と、清らかな水のような真心と、まっすぐに空へと伸びることを見守る太陽のような暖かな眼差しを子供たちへと向けることができたのなら。

子供たちが健やかに成長していける手助けができるのではないと思うのです。

保育園の周辺は、今では特別となってしまった『当た



小さな種が、自分の背丈を越えるようになりました。

り前のもの』に囲まれています。

のどかな田畑と畜産、少し足を伸ばせば遊水地や川原、海にも山にも近い土地の利点を生かし、子供たちは一昔前には当たり前のように触れ合うことのできた文字通りの『自然』を体感しています。また、園内にも多くの果樹があり、ふと窓の外を見やれば四季折々の自然の恵みがたわわに実り、手を伸ばせばその小さな掌に生命の重さを感じることができるのです。

5歳児の子どもたちとカレー作りをする事が多々あります。豚肉のお話をしているとき、保育士や栄養士の話の中でみんなが食べる豚肉も、みんなと同じように生きていた事を話すと、さっと子どもたちの表情が硬いものになりました。園外保育で見た豚を思い出したのでしょうか。今まで目を輝かせて興味津々に話を聞いていた子どもたちはきゅっと口を結び、いろいろと考えているようでした。

スーパーやコンビニに行けばあふれるほどのたくさんの食べ物を手に入れられる昨今、子供たちに食べ物の貴重さを訴えても、すぐに理解することは難しいことです。プランターなどでのコマ作りやナスやキュウリの野菜を育てながら、自分たちと同じように時を刻み、生きているということ、自分たちは命をもらって生きているのだという自覚をはぐくむこと。実際に自分たちで育てたりし、その苦労や貴重さに触れ合うことで、食べ物への感謝、さらには「食べ物を大切に噛み締める心」に繋がっていくのではないかと思います。

ただ、歯を大切にすることだけを訴えるのではなく、生活全体から土台となるべき心を作ることが、私たちが成すべき最善の事ではないでしょうか。

[健全な体、健全な歯を作る事はまず、健全な心を作るところから始まる。]

子供たちは今では80年以上の歳月を過ごしていく可能性があります。

子供たちが日々成長する過程の中で、しっかりと自分たちの歯の健康を意識し、歯を守っていこうとする言わば『自立』ができるようにしていくことが、大切なのだと思います。

自立するための第一歩として、子供たちが当たり前のこととして意識せずに実行していけるように、習慣づけをしていければよいと思います。

『習慣』とは『当たり前のことを当たり前として実行していくこと』です。それは無意識化で行われることですから、子供たちが特に負担になると思うことも少ないかと思えます。では、集団生活を主とする保育所が担えるべきこととはいったい何なのか。

特別なことはありません。決して特別であってはいけないのです。

人生はイベントばかりではありません。当たり前のことを正しく積み重ねていくことが、平凡と言う名の美しい人生なのではないでしょうか。

『当たり前』を『当たり前』として子供たちへと根付かせるためにはどうすればよいのか。子供たちが何かしらを意識して努めていくのは並大抵のことではありません。大人にだって出来ないことを、子供たちに強要しても碌な事にはならないからです。

『親の背中を見て育つ』という言葉があるように、子供たちは周りの大人たちの真似をする事から社会勉強を始めます。子どもたちが生きていくための一番の手本、それはまず第一に親が該当されるでしょう。しかし、国が進める一億総活躍や経済事情等により共働きの家庭が増え、親と過ごす時間が少なくなっています。それは同時に子どもたちが手本とすべき相手と接する時間が少ないということにつながってきます。

保育園は親と離れて時間を無駄に過ごしていく場所ではありません。友達や職員と育みながら時を重ねていく子どもにとって大切な場所です。

子供たちに苦にならないように教えていくためのひとつの例として、「歌う事」という事を御紹介したいと思います。

園の中には、さまざまな場面で子供たちの歌に満ち溢れています。

「いただきます」をする前に、保育士の軽快なピアノの音に乗せて、元気いっぱい「いただきますの歌」を歌います。きちんと姿勢を正して自分のいすに座り、みんなと一緒に歌うその声を聞き微笑ましく思いながら聞いているのですが、普段の何気ないこの一風景も噛み砕いていくと子供たち自身での大切な食空間の形成につながっていると思うのです。

その「いただきますの歌」の歌詞とは

♪お食事お食事うれしいな

何でも食べましょう よく噛んで

みんな済んだらご挨拶

手はお膝♪

かわいらしい振り付けをしながら、保育士とともに揃っていただきますと歌います。

歯は、食べ物をきちんと享受し、己の身に代えるための一番大切な道具です。健康な歯を保つためには、きちんとした姿勢で十分に食べ物を咀嚼し、好き嫌がなくまんべんに食事することだと思えます。そのために大切なことは、きちんとした食事をする事は『当たり前』だと思える無意識と、『食べ物への感謝』だと思えます。肩肘張らない行為と、目の前の食べ物へと一粒残さず食べようとする感謝の心があれば、おのずと正しい食事と、それに伴ない健全な歯を保つことに繋がるのではないのでしょうか。

『当たり前のこと』を『当たり前として』

習慣とまっとうな常識を子供たちに根付かせるための取り組みは、0歳児から始まると思えます。

<0歳児から未来へ繋がる土台作り～離乳食～>

当園を例にとってみますと、原則的に生後六ヶ月の乳児から保育を行っています。

中には離乳食を一切始めていない家庭もあり、保育園で離乳食という名の『未知との遭遇』を果たすお子さんも少なくありません。



野菜や鶏肉のササミなどを柔らかくすりつぶしたもの

離乳食の初期にあたり、だいたい重湯や野菜のすりつぶしたもの、さらには野菜の煮汁で作った何も味付けしていないスープなどを与えていきます。今まで母乳やフォローアップミルクばかりを飲んでいた子供は当然嫌がります。スプーンで口の中に入れても嫌がって吐き出してしまふこともあります。ですが、ここで怯んではどうしようもありませんし、何より子供たちのためになりません。めげずに与え続ければ、ようやく根負けしてくれたのか、子供たちがおいしいと判断してくれたのか、多少食べてもらえるようになります。(基本的に家庭で与えていない食材は保育所では与えません。その為、保護者と十分な話し合いが行われます。)

ここで注意したい点は、どれだけ対象の乳児の舌を動かさせて食事を食べてもらえるかということです。

舌の動きはイコール口の動きです。

人間の脳の働きは、乳児期がピークです。

脳は乳児期の情報収集量をピークにし、だんだん衰えていきますのは皆様もご承知のとおりです。自我の芽生えも未発達な時からいかに子供たちに対し、『食べ物を食べているときたくさん口や舌を動かしている』かという情報を『あたりまえ』として脳に、そして身体に覚えさせることができるのか。

すべては0歳から始まっていると思うのです。

初期食にて母乳以外の食材に慣れた子供たちに、中期食では本格的に咀嚼や嚥下の仕方を覚えていけるように誘いかけていきます。中期食では、歯茎でも噛みつぶせる程度の硬さ、大きさを目安に作っていきます。

もちろん、初期食よりも食品の形状が大きくなるのですから、初期食以上の子ども達に対する注意が必要とな

ります。

味付けは、ほんの少量のしょうゆと砂糖、大部分は鰹節や昆布だし、煮干だしなどから取った旨みを使って味付けしています。

味というよりも風味といったほうが良いかもしれませんが、この味付けは、一歳時以降の子供たちが食べている、あごをよく動かして噛まなければ食べることが難しい、根菜類の煮物と同じ味付けです。

子供たちによって個々に様々ですが、生後一歳ぐらいの子供たちから、年長時の子供たちも食べている給食とまったく同じものを食べています。もちろん、年齢にあわせて食べやすいようにある程度硬いものなど小さく切り、味付けなど薄味にしていますが、少し時間はかかるものの、ほとんど残なく食べていきます。

乳児期は消化器も未発達な部分が多く、大人のように何でも食べられるわけではありません。ですが、決して硬いものが食べれないわけではないのです。

ごぼうやたけのこ、こんにゃくなども、大きさに配慮し、絶えず声掛けなどをしながら食べていけば、大丈夫なのです。『転ばぬ先の杖』のように、危険なものを何もかも先回りして排除するのではなく、その子供一人一人のペースに合わせて工夫していけば、難しいことなど何もありません。



歯茎ですりつぶせる程度の大きさの形状にしています。



初めてのものに関しては、大人も子供も不安を覚えることも多いです。しかし、離乳食時から慣れ親しんだ旨味のおかげか、特に嫌がる様子も無く、皆すんなりと受け入れて食べられています。

子供たちへの『当たり前作り』の土台は、こうして離乳食時から始められます。しかし、このことを有効に活用するためには、家庭との連携が何よりも必要不可欠な物となると思います。

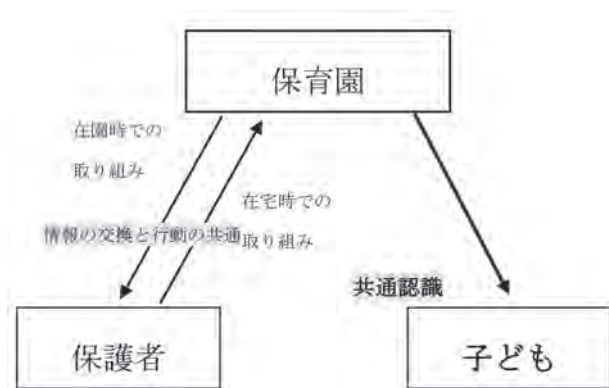
<家庭・保育園、そして子ども自身との共通認識を図るためには>

保育園と家庭の意見がもしも食い違ってしまったら、一番混乱するのは他でもない、子ども達です。

家庭との連携、情報の交換、どれ一つとっても欠けてしまったら、『当たり前』のことがさまざま『不自然』なこととして子ども達の目に映ってしまうことでしょう。

『不自然』がすぐに解決されれば大した問題ではありません。

しかし、問題解決がなされず子ども達の中で万が一長期化された場合、さまざま『矛盾』へと変換されます。そして『矛盾』は『不信任』を生み出してしまいます。



『不信任』を一度でも感じさせてしまったら、不信任を抱いてしまった相手に対し、疑わざるをえない状況になるでしょう。その人が言うすべてのことに対し、疑心暗鬼の念にかられてしまいます。信頼関係の崩壊です。子どもに矛盾を感じさせること無く、正しいことを正しいとして子どもに身につけさせるために、決して矛盾を生じさせてはいけません。

家庭へのアプローチという物は、保育園だけに限らず、多くの年代にとっても大変な悩みのタネかと思われます。

当保育園でも他園にもれず、朝の受け渡し時や、夕方の引き渡しするとき、さらに親密な連絡帳等でのやり取りなどを重ねて、保育士と保護者との間にも信頼を築いています。また、栄養士としては、離乳食食品一覧表や、給食便りなどの発行、さらに喫食見学などに立会い、子ども達や保護者の方たちとお話出来る場を作ってきました。

そこから感じ取ったことは、保護者の方たちが子ども達の食べる物に対し、一種過剰な心配を寄せていらっしゃる方が多いことです。昨今落ち着いてはきましたが、一時期多くのマスコミで取りざたされた食品偽装問題や冷凍食品、惣菜等による食中毒など、確かに不安感を抱かれる方も多いでしょう。また、アレルギーやアトピーなどの疾患を持つ園児たちも増え、予防策から離乳食時より多数の制限を設ける保護者の方も少なくはありません。また、1980年代ごろから幼少期の子供たちに対し、軟食ばかりを出している家庭が多いと聞きます。実際、当園でも乳児の子ども達を持つ家庭ではやわらかめのご飯を出しているというお話をよく聞きます。確かに、一歳児未満の子供たちはまだ消化器官などが未発達な部分も多く、咀嚼も不十分であることが多いですから、嚥下障害や腹痛、下痢を起してしまうケースもあります。しかし、心配のあまり転ばぬ先の杖ばかりを差し出してしまえば、何より子ども達の、子ども達自身の力による健全な育成に結びついていかないと思うのです。

このようなことが起きてしまう要因として、一つに雑多な情報の氾濫があると思います。

なんでもすぐ調べられるインターネット時代、私たち保育士・栄養士が驚くほどの知識を持ち、かえってその知識に縛られ、振り回されてしまっている保護者の方も多くいらっしゃいます。

情報に頼ることは、決して悪いことではありません。しかし、皆様も経験上ご存知の通り、百聞は一見にしかず、子ども達にとって実りある知識は限られてきますし、何より身につかせる方法もそれぞれだと思います。

保育園は、まさにおはようからおやすみまでを担う、一つの大きな家族です。

家庭と同じ状況で、生活習慣の一環としてきちりと時間を守り、大切な約束事を積み重ねてこそその習慣づけが出来ると同時に、0歳児期の子供たちから食事面を含めた生活全体をサポートしていける保育園でこそ、言葉だけでなく実践し証明してこそその確かな実績を保護者へ示し、共有していけると思います。

子供たちに信じてもらうこと。

簡単なようでとても難しいことですが、この関係を築くことがまず、子供たちの未来へと繋がるひとつの原動力となるのだと思います。

<『同じ釜の飯を食う』～連帯感が生み出す習慣とは>

例えば赤ちゃんに食事を食べさせるとき、どのように行っているでしょうか。

「あぐあぐ」とか、「もぐもぐ」とか声をかけながら食べておられることが多いのではないかと思います。子供たちは、周りの大人たちの行動を観察し、時に模倣しながら社会勉強をしているのですが、同時に、常にものめずらしいことに囲まれている子供たちは大変飽き易い部分も兼ね備えていると思います。

次々と興味の対象が移って行ってしまっていて、時たま栄養士が様子を見に行っても、最初はものめずらしく見つめていたりしていたものの、すぐに目の前の食事に集中してしまうことが多いです。赤ちゃんの場合は、人見知りが激しくて泣かれるよりはましなのですが、「みんなの食事を作っているだけだなあ…」と、少し寂しい気持ちにもなります。

しかしいつも一緒に過ごしているやはりと言うべきでしょうか、保育士には全幅の信頼を置いて差し出す食事を咀嚼し、保育士の口の動きやリズム良い声掛けに応じて一生懸命口をもぐもぐと動かしています。これが大事なんです。

また、子供たちはリズム遊びが大好きです。保育士と一緒に手をたたいたり、歌にあわせて体をゆすったり。そしてよく笑います。楽しいときに満面の笑顔を作る環境、顔面筋を動かしたり、口を大きく開けて声を出して笑ったりすることも、あごの刺激へと繋がっているのではないかと思います。



「モグモグおいしいね！」
職員とともに楽しくお食事

また、先ほど申し上げました「いただきますの歌」。

あごを大きく動かし、まるで歌うようにリズム良く口を動かしていくことは、言うなれば「食べることへの準備体操」になるのではないのでしょうか。

慣れないことをしますのは、大人だって疲れます。それがとても大変なことであるならば、正直、できればしたくないと思います。それなのに咀嚼をするとき、「さあ、食べ物を食べたら30回噛んでから飲み込みましょう」と、言ってもそれをやり遂げるのはとても大変なことですし、実践するのは子供たちです。

言うのは簡単です。

30回以上の咀嚼とか、5分以上歯を磨くとか、教科書にだって書いてあることですが、さて、これを見る方はいったい何人の方がそれを毎日365日、24時間実践出来ているのでしょうか。

30回以上物を噛み続けるなんて、慣れていないものに

とっては、とても大変なことですよ。それに、食事時間にあまりに時間をかけすぎてしまい、途中でおなかいっぱいになってしまったり、あごが疲れてしまったりして給食を残してしまう、というケースもあります。

幼児期の子ども達をみていますと、悪い言葉で言えばものぐさな子供たちが増えてきているような気がしてなりません。あごの発達と咀嚼の強化のために、おやつにせんべいやプルーン、スルメ、給食にも根菜を中心とした煮物や金平ゴボウに切干大根の煮付け、たこやイカの酢の物などを取り入れています、「噛むのが嫌だ」という理由から残してしまう子もいます。



みんなと同じ食事を食べ、同じ時間を過ごしています。

「では、子供たちが苦手なものに立ち向かうためのきっかけを持ってもらうためにはどうすればよいのか。」

それは、たった一人で苦手なものに立ち向かうのではなく、擬似家庭とも言えるべき保育園だから出来ること。保育士も周りの友達も自分と同じ給食を同じ時間に食べてるという事、苦手なものも一緒に挑戦できるという事です。

たった一人では挫けてしまいそうな嫌いな食べ物も、みんなと一緒に頑張れるという事。たくさん量は無理だけれども、周りのお友だちの励ましを借りて自分の量を食べられたこと。その達成感は何物にも変えがたい思い出となるでしょう。野菜などの子どもたちが嫌いな食べ物も、保育園なら食べられるというお話を数多くの保護者の方から伺います。そういう場合、よく聞かれますのは「保育園ではいったいどのような特別な事をしているのですか？」ということですよ。

もちろん、特別な事などしていません。

完全給食を実施している保育園だからこそ生み出すことが出来る、同じ食べ物を共有しているという連帯感……すなわち『同じ釜の飯を食う』という、仲間意識は、子ども達にとって挑戦するという勇気と継続していける強い心をはぐくみます。

生活を同じにしていくと言う事は、たった一人では出来ないことも、お互い競い合いながら成長していける場

所となるのです。

以上の点が保育園の強みであり、歯の健康については子ども達の明るい未来を作っていくために必要な『当たり前』を作る、大切な土台のひとつだと思うのです。



今日も残さず食べれたね！

<～乳児期に培われた土台をはぐくむためには～>

子供たちは、『自分自身を持っている人間』です。

こちらの思惑通り、全てが型にはまってくなんて甘い考えではいけません。こちらが思う以上の想像力と行動力を持つ子供たちに、小手先だけの教えなど大した意味は持ちません。

何度も申し上げましたとおり、子供たちは自身で自身をはぐくんでいける力を十分持っていると思います。私たちは、歯科医の皆様のように専門的な知識や、それを用いた治療は出来ません。主に出来ることは、子どもたちが背伸びをせずに毎日繰り返し出来る、予防を見つける手助けをすることだと思います。

また、食べ物をしっかりと噛む、というのは、食べ物の大切さを知ってもらうことではないかと改めて思うのです。

たくさんの命を受け継いでいることを子ども達に体感してもらい、さらにそこから自身の命を大切にすること、自分を含めた誰かを思いやる心を育てていくことが、やがて自身の体を慮り、歯を大切にするという心へと結びついていくのではないかと思います。

『歯』を健康にはぐくんでいくことは——言うなればその人が人間として在る限り——要は生きていく限り、していかななくてははいけません。地域によっては、虫歯になりやすい食べ物を多く食べる地域、なりにくい食べ物を食べる地域と分かれていくかもしれませんが、正しいケアを知っていれば、そのリスクを充分減らし、全国均一の状況にすることが出来ます。歯を大切にいくためにはどうすればよいか、正しい歯ブラシの使い方や磨き方など、統一した知識を子ども達に習慣づけていくことができれば、日本全国の子どもたちが同一ラインに並ぶことも難しくはありません。「歯科医師の先生方への期待する場面です。」



はぶらしになれることがたいせつです

保育園や幼稚園で、子どもたちがどんなことを知っているのか、どんなふうに歯のケアをしていたのか。それを小学校の先生方が的確に把握していれば（連係）、さらに詳しく虫歯とはいったいどんなことなのか、虫歯になったときどんなリスクを自分達が背負ってしまうのか、さらに進んだ『歯』への教育がしやすくなるのではないかと思います。もちろん、ある程度はどれくらいのことをしてきたのか想像に難くありません。ですがそれはあくまで予想でありますので、多少のズレが出ることは否めません。しかし、そのとき生じたのがほんの小さなズレでも、それはやがて大きな『矛盾』へと子ども達の中で変化していってしまうことだけは避けなくてはなりません。

さらに、子ども達はとても好奇心が強い一方で同時に大変『飽きやすい』という一面も持っています。

おそらくこのことは私だけの主観ではないと思うのですが、自分が常に知っていることをまた改めて一から教えても、子ども達はあまり興味を持ってはくれません。子ども達の日常は、常に発見の連続です。すでに知っていること、『当たり前』のことを改めて知らすことよりも、保育園や幼稚園また、認定こども園で培ってきた物や、子どもたちが持っている習慣を「よく頑張ってるね、えらいね」と認めたうえで、さらに新しい道を示し、習慣をより充実した物へと深めていくことが子ども達の『歯』への意識レベルを上げていくことにつながるのではないのでしょうか。





継続は力なり、です。

基本的な知識や習慣を継続していくと同時に、それをさらに良い方向へと上書きしていく為にも、個々の憶測だけでなく、しっかりとした一つの具体案を示し、それに順じて子ども達に『矛盾』を感じさせないように一貫した保育・教育を導いていくことが、今私たちに求められているのではないのでしょうか。

『一つの筋道を具体的にまとめる』という事は、言うことは簡単なことです。おそらく、同じ思いを過去抱えつつも、建設的な問題から断念したという方もいらっしゃるのではないかと思います。

人は生まれ出た瞬間にその人の「人生」が始まります。『歯』とは、人として生まれた『人生』そのものの一つです。

0歳から始まる人生、子供たちの『歯』をはぐくんでいくことは生まれ出でた瞬間に、母親に宿った瞬間に始まっているといっても過言ではないでしょう。

まさに0歳児から始まり、果てはその先へと続く『歯へのケアアセスメント』の一つの例が完成出来ることを願っています。

このレポートは現場の立場から、普段の保育の中で保育士や栄養士を通して関わっている食に関する0歳児からの発達及び『歯』所謂口の働きの重要性に新たに編集し纏めたものを、最近の保育の動向等を踏まえて検証してみました。個々の保育の重要性を感じ、改めて『歯』の重要性を認識していただくとともに「食育」に関する一考察になればと思います。

参考資料

平成21年5月 学校歯科保健学会より

平成29年8月 (株) サンワールド 噛みごたえ早見表

日本大学歯学部小児歯科学部資料参考

講評：乳児期から始まる『歯』についての考察

評者：天野 珠路

子どもの「歯」についての考察から始まり、保育所の多岐にわたる役割や保育の効果について様々な角度から述べられています。理事長が普段から子どもや保護者、そして現代の子育てについて様々な思いを持って警告を鳴らそうとしているその熱いが伝わります。

しかし、あまりに拡散しすぎてタイトルと内容が乖離し、焦点が定まっていないことで文章全体がぼやけてしまう印象を受けます。確かに「歯」や「食」に関して考えると、そこに見え隠れする子どもの問題や子育ての課題が見えてくるのだと思います。子どもの育ちの課題や保護者の在り様は、現代社会の根深いところから発しているといえなくはないでしょう。

しかし、実践報告とするのであれば、「歯」について園が取り組んできた内容を整理し、保護者のニーズや課題も含め客観的に示すことに焦点を当ててほしかったと思います。今後、理事長と保育者の対話、理事長と保護者の対話が豊かに繰り広げられていくことを期待します。

評者：石川 昭義

「食」に関する研究のアプローチが多様であることを示す報告となっています。「食」や「健康」の増進には、保育士だけでなく栄養士、保護者のかかわりが重要であることを再確認することのできる内容といえます。

「歯・口の健康づくり」がテーマとなっていますが、内容は離乳食や虫歯予防、保護者支援などにやや拡散しており、実践報告としてのまとまりが不十分だった感は否めません。園での食事は保護者との連携が重要だということで、たとえば、

保護者アンケートのような形で保護者の食に関するニーズや不安を把握する方法も考えられます。歯科医師のヒアリングを取り入れることも考えられるだろうと思います。子どもの健康は、多くの関係者が関心を寄せるテーマです。今後は、研究の目的と実践との関係を明確にして、アプローチ方法を絞って成果をまとめていくことが期待されます。

評者：日吉 輝幸

『歯』は咀嚼をするための器官であり、人が生きていくうえで欠かせないものであることは言うまでもありません。今回の亀井野保育園の実践報告書からは、その根本原理の大切さを改めて感じさせられます。

しかしながら、今回のレポートはテーマとした『歯』に限定した考察ではなく、咀嚼から食育全般、さらには子育て支援とその記述は多岐に渡っており、やや散漫な感があったことは否定できません。また、テーマ設定と記述内容の整合性を熟慮する必要があったことに加え、研究者である理事長個人の保育観を展開する形式となっており、残念ながら保育実践報告のレポートとしては適切でないように思われます。

ただし、連綿と記述されている保育にかける思いや願いは、筆者も参考にすべき点が多々あったとともに、保育所経営者として子どもや子育て家庭を思う、温かく優しい気持ちに感服させられました。是非とも次回は、理事長の崇高な精神を継承していると思われる、亀井野保育園の園長や保育士が、日々行っている保育実践の様子を報告していただきたいと願います。

サーキットあそびを通しての育ち

大阪府・幼保連携型認定こども園都島児童センター 兵頭ゆかり、鎌田 彩乃、上間 彩香

1. はじめに

社会福祉法人都島友の会は、昭和6年3月、比嘉正子初代理事長が「青空幼稚園」を開園したのが始まりでした。当園は、昭和25年3月「都島保育所」として開設され平成27年4月に幼保連携型認定こども園に移行しました。

現在の建物の中には、0歳児から就学前までの子どもたち約300名が過ごしており、また園児及び卒園児、都島児童館に通う子どもたちが利用する課外教育クラブ活動が数種あり、「知育・徳育・体育」の心と体の発達を視野に入れて教育・保育を行っています。

2. 園の概要

名称：社会福祉法人 都島友の会
幼保連携型 認定こども園
都島児童センター

設立：昭和25年3月1日
平成27年4月1日
(認定こども園に移行)

所在地：大阪府大阪市都島区都島本通3-4-3

認可定員：331名(そのうち1号認定15名、2・3号認定316名)

利用定員：309名(そのうち1号認定15名、2・3号認定294名)

3. 園の環境

園内では多種多様な経験ができるよう、環境を整えています。

・芝生

総合遊具(アスレチック、すべり台、登り棒)

裸足で遊べる人工芝(乳児でもハイハイで遊ぶことができ、裸足で遊ぶことで足の裏が刺激され脳の活性化を促します。)



・園庭

砂あそび、一輪車、ドッジボール、リレー、サーキット、パラバルーン、縄跳び



・幼児向け室内総合遊具

ボルダリング、すべり台、コーナーあそび、迷路



・乳児向け室内総合遊具

ハイハイやつかまり立ちの動きをしながら遊べる遊具
トンネル、のぞき窓、コーナーあそび



・ホール

システムブロック、綱登り、学年活動(音楽・体育・プログラミング)





・屋上プール(乳児・幼児)



4. 研究内容について

都島区では何十年もの間で都市開発が進められ、多くのマンションが建設されるなど、大きく住環境が変化してきました。その中で子どもが安全かつ、自由に、身体を動かして遊べる場所や機会が少なくなり、少子化やネット社会が進む中で子ども同士や親子で関わる時間が減少し、人と触れ合う機会も少なくなってきています。そこで、子どもたちの運動量・体力の増進を図り、社会性やコミュニケーション能力を育むため、本園では約20年前からサーキットあそびを取り入れるようになりました。また、その時々の子どもの様子や発達状態に応じて内容やねらいを設定し活動をしています。

運動量の確保(体育)、多種多様な動き(体育 ※調和的な発達)

子どもたちは常に「身体をいっぱい動かしたい」という『運動欲求』を高く持っています。

その欲求を十分に満たす為に待ち時間を少なくし十分な運動量を得られるのが「サーキットあそび」なのです。

- ・サーキット運動は、日常生活では経験することが難しい運動(登る、くぐる、跳ぶ等)を経験できる環境を作り実践しています。
 - ・子どもの発達段階を把握した上で、「身体のどの部分を使い、どのような動きを経験するか」のねらいを決め、道具を組み合わせ活用していくことが指導者の役割であると考えています。
- 乳児期から幼児期へ段階を踏んで取り組んでいくことで、経験を積み重ね成長していきます。

平成27年度より認定こども園に移行したことで、教育・保育内容を振り返り、サーキットあそびの中でも「知育・徳育・体育」に重点を置き、活動を進めています。現在行っている活動内容が子どもたちの育ちにどのように関係しているのかを考えました。



5. サーキットあそびでの学びと育ち

サーキットあそびを行う際には、「礼に始まり礼で終わる」を基本とし、静と動の気持ちのメリハリをつけ取り組めるようにしています。

- ①挨拶
- ②準備体操
- ③ルール説明を聞く
- ④サーキットあそび
- ⑤休憩(水分補給)
- ⑥サーキットあそび、鉄棒、跳び箱などの部分指導
- ⑦挨拶



これを繰り返し行う中で気持ちを切り替えて活動できるようになります。




また、サーキットあそびを通して大きく2つのことが得られます。








1つ目として多種多様な動きを経験し、運動量を確保します。

2つ目として集団で行うことにより(集団生活の中で)自分で考える力が育まれます。


| | 乳児期 | 幼児期(3~5歳児) | | |
|---------|---|---|--|---|
| | 柔らかい素材のソフトブロック | 平均台 | 一本橋 | はしご |
| 一本橋・はしご |  |  |  |  |

| | | | |
|--|---|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・裸足で感触を感じながら歩く（室内で使用） ・不安定な足場でも足の指を分離させて動かしたり、力を入れ、バランスを取りながら歩く | <ul style="list-style-type: none"> ・芝生やピロティーで使用している ・平たくなっているため足の裏をフィットしながらバランスを取って進むことができる | <ul style="list-style-type: none"> ・両面で形が違い、平らな面と丸く山になっている面がある ・ふくらはぎ、太もも、身体の動きも考えながら進む | <ul style="list-style-type: none"> ・距離や間隔をつかみ、足を伸ばして次の目標へバランスを取りながら進む |
|--|---|---|--|

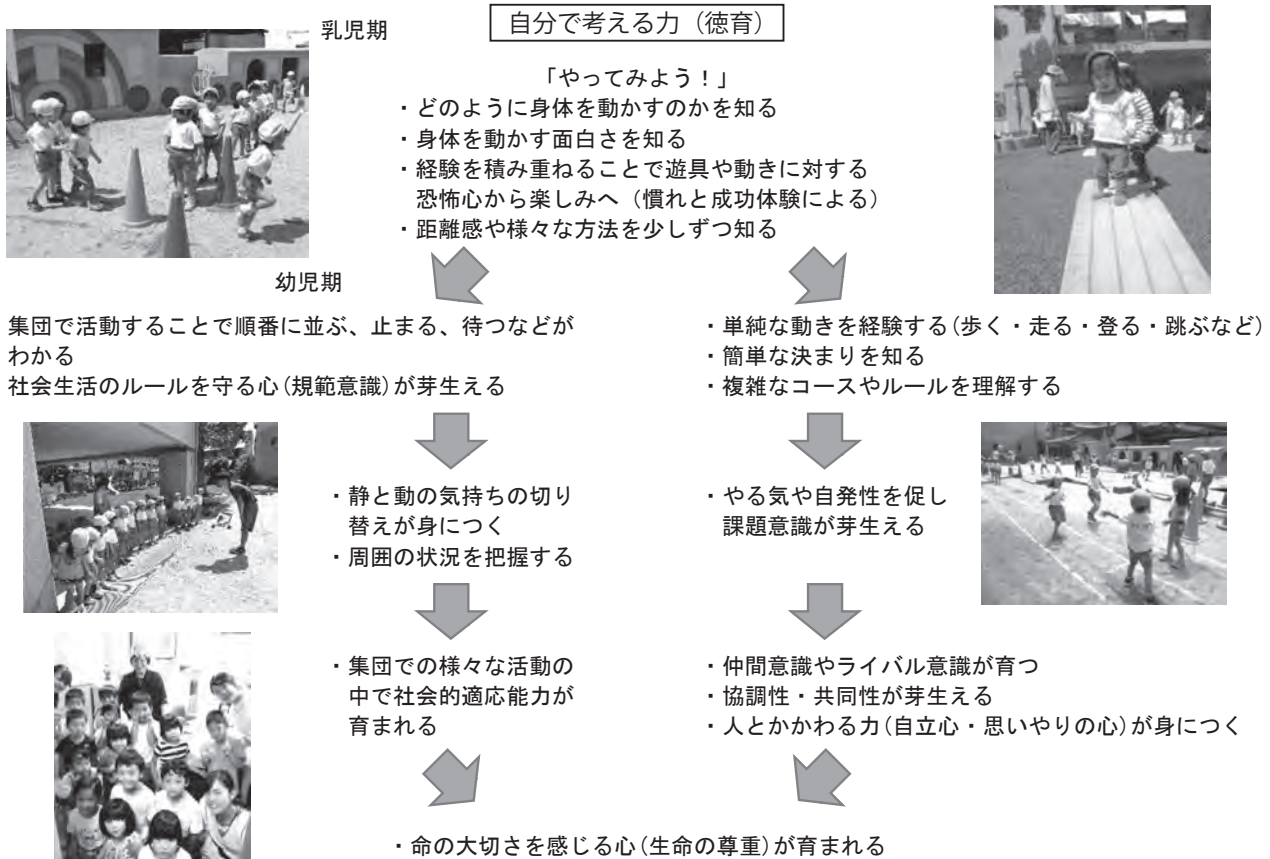
| | 乳児期 | 幼児期（3～5歳児） | |
|------|--|---|---|
| ジャンプ |  | 坂道ジャンプ  | 高さを変える  |
| | <ul style="list-style-type: none"> ・高さのある台（巧技台）から膝を曲げてジャンプする ・跳ぶことより楽しむことを重視する（恐怖心を取り除く） | <ul style="list-style-type: none"> ・坂道を利用することで少しずつ高低差がつき、安心して一定の高さにたどり着くことができる ・発達に合わせて高さを変え、坂道を駆け上がったあとにジャンプすることで跳躍感覚が養われる | |

| | 乳児期 | 幼児期（3～5歳児） | | |
|---|---|--|---|--|
| 跳び箱 |  |  |  | <ul style="list-style-type: none"> ・跳び箱を“跳び越えたい”気持ちを持ち助走をつける ・踏み切ったあと、両手を前方に付き、体重を支えたあと、跳び越える ・跳び箱を跳ぶときの掛け声「グッ・テー・パー」 |
| | <ul style="list-style-type: none"> ・高さのゆるやかな斜面をハイハイで登る | <ul style="list-style-type: none"> ・腕をしっかり伸ばし腕の力で1、2段の跳び箱の上に乗る ・発達に応じて高さを変える | <ul style="list-style-type: none"> ・踏み切り板の勢いを利用し、両足を揃えて跳び箱に跳び乗るその際、手は前方に着く | |
| |  | |  |  |
| <ul style="list-style-type: none"> ・手の平をついて進む動きと足の指でマットを蹴って進む動きを育む ・山の下りでは落ちないように手の平で身体を支えながら踏ん張る | | <ul style="list-style-type: none"> ・跳び乗ったあと、着地の際は両足で踏ん張ってバランスを取れるようにする |  | <ul style="list-style-type: none"> ・「パー」→足を広げて飛び越す |

| | 乳児期 | 幼児期（3～5歳児） | | |
|-----------|---|---|--|---|
| のぼり棒・綱のぼり |  |  |  |  |
| | <ul style="list-style-type: none"> 腕全体の力を使い、ぶら下がり、また指にも力を入れしっかり握り腕支持感覚が育てられる | <ul style="list-style-type: none"> 芝生ののぼり棒やボルダリング、そしてホールの綱のぼりなどのあそびの中で腕支持感覚を養う 腕全体の力や握る力、踏ん張る力を利用して上に進む | | |

| | 3歳 腕支持 | 4歳 前まわり | 逆上がり | 5歳 | |
|----|---|---|---|--|---|
| 鉄棒 |  |  |  |  |  |
| | <ul style="list-style-type: none"> 腕を伸ばして腕の力で身体を持ち上げる | <ul style="list-style-type: none"> 膝を曲げてへそを見て、身体を曲げる | <ul style="list-style-type: none"> 腕は曲げる 蹴り上げた足は頭上より後ろにする 腕の力で身体を引き寄せる | <ul style="list-style-type: none"> 逆上がり補助台を使用する | <ul style="list-style-type: none"> 補助台なしで逆上がりをする |

☆乳児期で腕支持感覚を育て、幼児期に段階を踏んで就学までに“逆上がり”が出来るように目標をたてています。



6. まとめ

サーキットあそびでは身体の運動量を補い、身体能力を伸ばすだけでなく、心の成長にも大いに関わっていることに改めて気が付くことができました。

また、様々な活動や行事においても培ってきた力を発揮することができています。

本園では年長児になると80名程が心も身体も団結し、その姿を発揮する大きな行事・目標があります。

①運動会の体育演技

自分のことだけでなく友だちの身体も手足でしっかりと支え合いながら技を決めます。また仲間意識が芽生えたことで互いを信頼し合うことができています。



②運動会のマーチング

様々な楽器（太鼓、シンバル、ハイハット、カラーガード等）を身につけ、バランスを取りながら隊形移動をしたり、周囲のことを意識できるようになったことで、友だちと動きや音を合わせ演奏することができます。



サーキットあそびについてももう一度見つめ直し、どういった役割や効果があるのかを考えていくうちに、サーキットとして成り立つまでには、乳児期からの積み重ねや経験が重要で、大きく関係していることが分かりました。乳児期に経験している動き（寝返り、つかまり立ち、ハイハイ、つたい歩き、歩く、走る、上り下り、ジャンプ等）は日々の日常生活の中で必ず使っている動きになっています。成長に応じて経験を積むことで複雑な動きや状況に対応することができるのではないかと考えました。また幼児期に向けては身体の動きが複雑になってくるのはもちろん、協調性やルールを守る大切さなどの規範を知り、身体能力以外の面も発達していきます。

現在園内では0歳児～就学前の子どもたちを教育、保育しています。また、専門的な体育講師の指導のもと、体育活動の時間を取り入れています。年齢に応じてコースも複雑になり、子ども自身で状況判断をする場面や、課題達成のために目標を持ち取り組む姿が見られています。

就学に向けて、身体の発達はもちろん、社会性や自分で考える力を養っていけるようにサポートしています。

7. 今後の課題

①引き続き体育講師から専門的な指導を受け園全体で保育教諭のスキルアップを目指す。

②地域との関わりをより深めていくことで、社会性やコミュニケーション能力を育ていける環境づくりを目指していく。

③学童期の子どもの育ちに、園で経験した様々なサーキットあそびがどのように反映されたかを捉え、今後のサーキットあそびの内容を改善し発展させていきたい。

講評：サーキットあそびを通しての育ち

評者：石川 昭義

サーキット遊びの多様な種目について、子どもの発達段階に応じたそれぞれの様子が描かれています。このサーキット遊びを「知・徳・体」と関連付けて捉えようとする試み、サーキット遊びの役割や効果を改めて考察しようとした試みはとても興味深いです。写真の1コマ1コマから、運動の要素が身体の発達とともに複雑に連動している様子が伝わってきます。

報告では「就学までに逆上がりができる」ことを目標に立てていることがうかがえます。幼保連携型認定こども園教育・保育要領に照らして、到達目標を設定することについては検討を要するところですが、実践報告としては目標設定に対する達成率を数値として示せるとよかったですのではないかと思います。

「自分で考える力（徳育）」のフローチャートの最後が「命の大切さを感じる心（生命の尊重）が育まれる」とされていることにはやや飛躍があると思われるかもしれません。運動や遊びを通してここに導くまでの説明またはエピソードがあると説得力が増すと考えられます。貴園では体育活動の時間として体育講師からの専門的な指導を受けている様子があります。今後の課題にもあげられていますが、その場合の保育教諭の役割あるいは専門性について考察を進めていくことが期待されます。

評者：清水 益治

次の2点が評価できます。①単なる運動技術の獲得や運動量の確保をこえて、サーキット遊びの中に含まれる「知育」「徳育」「体育」を見いだした点。②小学校以上の教育をも見通し、「知育」「徳育」「体育」を目指す保育を展開している点(参考：幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在

り方に関する調査研究協力者会議「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について(報告)」2010年11月11日)。

今後、次の2つのことを期待します。①体育講師に頼るのではなく、保育教諭が様々な運動遊びのなかに子どもの育ちを見いだして頂ければと思います(参考：杉原隆・河邊貴子「幼児期における運動発達と運動遊びの指導」ミネルヴァ書房、2014年。奈良教育大学附属幼稚園プロジェクトチーム「運動遊びで『からだ力』up!!」ひかりのくに、2014年)。②知・徳・体のバランスのとれた力が「生きる力」であるが、幼児期の教育は「生きる力の基礎」を培っていることを考慮し、幼児期の発達の特性を踏まえた実践を展開していただけることを期待します。

評者：馬場 耕一郎

本研究は、日々の生活の中から運動技術の獲得や運動量の確保を求める思いから始まっています。子どもの体力低下は、運動する量が減少したことによるものと考えられますが、その最大の原因は、子どもを取り巻く環境にあると考えられます。サーキット運動を実践できる環境を積極的に取り入れたことにより、健全な発達を促すように考えられています。

また、家庭では経験できない様々な身体を動かす経験に繋がっており、大変興味深く読ませて頂きました。乳児期から身体を動かす楽しさを知ること、大変重要でありその後の運動に対する意識に大きな影響を与えたいと思います。

今後、より充実したサーキット運動になるためにも、より年齢に応じた内容を吟味することが必要になると思います。何よりも継続して取り組むことで、運動技術の獲得や運動量の確保のみならず、友だちとの関わりなどの心の成長にも繋がると感じました。

音楽活動による人づくり保育の実践報告

～音体教育によって子どもが成長する。子どもたちの健やかな成長を願って～

岡山県・やよい保育園 森本 暢

【はじめに】

日本保育協会の機関誌「保育界」2017年5月号の保育研究発表の募集を見て、長年研究実践を重ね成果を収めている本園の音楽活動による人づくり保育の研究を応募しご指導をいただきたく存じます。

【やよい保育園の生い立ち】

本園は、岡山県津山市に位置する自然豊かな環境に恵まれた定員170名の保育園です。

保育園の関係する区域は、かつては純農耕地帯でしたが、昭和36年に国立津山高等専門学校が本地域に開設され脚光を浴び、特に住宅団地が相次いで造成された民有地の建設も進み、その後も新築転入が続き住宅地域として目覚しい発展を遂げました。津山市の東部と西部に高速道路のインターチェンジが設けられ市街地の周辺には企業が多く進出し女性の就労求人も活発になり保育に欠ける乳幼児も増えてきました。

本園の関係する16地区の町内会長、福祉関係者が相集い、やよい保育園設立委員を選出して奔走し津山市沼に昭和49年10月1日に定員60名で開園しました。(年度途中での開園で園児が集まるだろうかと心配しましたが、定員の1.5倍の入園申し込みがあり、嬉しい悲鳴となりました。)そこで早速に増築計画を進め、昭和62年9月には増築工事を行い、同年10月に定員増の入園式を行い定員90名になりました。その後も入園希望の増加に伴い再三にわたり増築・増員を実施して昭和56年4月から定員も150名に発展しました。

平成17年6月に津山市勝部に移転新築をし一時預かり保育・地域子育て支援センターなどの保育事業も行い、職員・保護者・そして子どもたちが共に成長する場として地域に根差した保育を心がけ現在に至っております。

【音体教育の導入】

当園は急激に発展し、年度途中での開園、施設の拡張と園児の途中入園、職員の増員等、慌ただしく過ぎましたので保育内容の充実が肝要と考え、職員全員でマーチングの指導者講習会に参加し音体教育の導入を決めました。

【創立10周年記念式典の開催】

昭和59年、多くの記念事業を実施して創立10周年記念式典を開催しました。式典の幕開けに年長児が和太鼓演

奏を披露し、園児の見事な演奏に会場の拍手喝采を博しました。その場に出席されていた来賓が全員参加の子どもたちの協力し息の合った演奏に大変感動され、幼児音楽普及のために津山市に多額の寄付を申し出られました。

【津山幼児音楽育成会の発足】

多額の寄付により、その受け皿の組織として津山幼児音楽育成会が発足されました。

そして津山総合体育館において幼児音楽フェスティバルを開催し、鼓笛の演奏演技を披露し多くの方々に感動を与えました。現在も津山幼児音楽育成会の主催による津山鼓笛ミュージックフェスティバルを毎年10月に開催しています。

また、平成元年より毎年2月に津山文化センターにおいて開催される津山幼児音楽祭に器楽合奏で出演しています。子どもたちのたたずまいの良さ、真剣な表情は自信に満ち溢れています。音楽活動は本園の代名詞と言えるほど大きな特色として定着しています。

保育者も子どもたちと共に成長していこうという思い、正面から向き合い一人ひとりを大切にかかわっていく心を持って日々接し音楽活動の指導にあたっています。

結果として、子どもたちのやる気や集中力が増幅し、よい姿勢で思いやりのある子どもに育っています。継続した取り組みの中で実践の結果は表れていますが「音体教育によってなぜ子どもたちがかわっていくのか、どういった成長がみられるのか」をもう一度振り返り、3年間積み上げてきた実践の中で考えていきたいと思えます。

【音体教育とは】

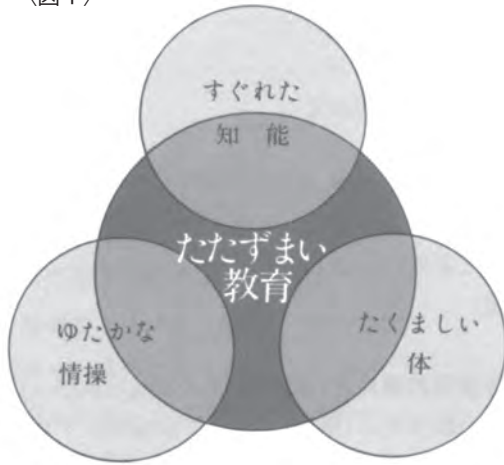
日々、子どもたちと接しかかわり指導するなかで次の基本理念を主に音楽活動を進めています。それは、

「幼児の心と体（脳と外体）を最も機能的に発達させ、芸術感覚、身体運動感覚の一如的な訓練によって幼児の持つ無限の資質を総合的に高める。」という理念の通り音楽と体育の融合としての取り組みをしています。その中で音体教育の目指すものとして、3つの柱があります。それは、

- ① たくましい体
- ② ゆたかな情操
- ③ すぐれた知能 です。

<※図1参照>

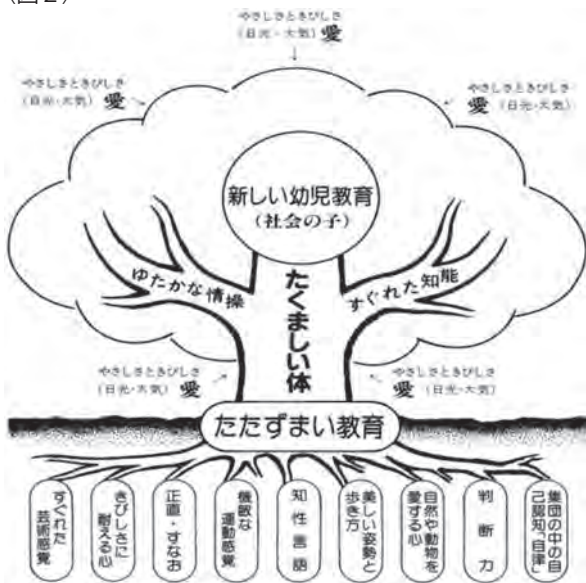
〈図1〉



音体教育は別に「たたずまい教育」とも言われ、子どもたちに心身一如の健全な社会人に育てるためのいとなみを総称するものとしています。

音体教育を大きな木に見立てると根の基盤を元にやさしさときびしさの愛情を受け、ゆたかな情操・すぐれた知能が育ち、たくましい体となり子どもたちの健全な成長に繋げていくことができています。〈※図2参照〉

〈図2〉



子どもたちの健全な成長を願って、私たち職員は常日頃からどう子どもたちとかわかり伝えていくか研鑽をしています。

【指導するにあたって】

子どもたちに指導するにあたって大切なのは、「ただ子どもたちに音楽が上手になってもらいたい」とか「個人個人の能力を高めるため」に行うものではないということです。あくまで健全な成長を願っての教育であり、子どもたちと保育者、保護者一緒にみんなで一つの目標

をやり遂げようとする中で集団生活での規律を学んだり共に協力する心をもてるようにしています。互いに共通の目標をもつことで気持ちを通わせ、友だちと協力し思いやりの心をもてるようになります。

「はじめに」の文章の中に記していますが当園では、「鼓笛マーチング演奏」「日本太鼓演奏」「器楽合奏」の発表の場を設けています。少しずつその日まで取り組み頑張ってきたことを自信を持って演奏演技します。

なぜこのような発表形態になるかと言いますと、就学前の子どもたちにとって国語や算数など勉強に関わる発表をさせるわけにはいきません。しかし、歌や音楽は人間にとって、小さな幼児期から身近に親しみ楽しむことができるものです。そこで音楽での表現活動をし、積み上げてきた取り組みを発表しています。

保育者は子どもたちに伝えていく立場になりますので、3つの格言を念頭におき、励んでいます。

1つ目は「自らのたたずまいを忘れるなかれ」です。

子どもたちに伝えていく立場である私たちにとって自分たちが正しい姿勢・美しい歩き方・すばやい動作など普段から気をつけ、正しく実践していかなければなりません。子どもたちは保育者のしている行動やしぐさを素直に吸収し学んでいきますので、非常に重要なポイントとなります。

2つ目は「情熱と愛の心を失うなかれ」です。

指導者として子どもたちに伝えたい、という熱い思いがなければ音体指導はできません。明るく、一人ひとりに寄り添い丁寧に、そして時にはきびしさも必要なこともあります。ねらいを明確にし、効率よくわかりやすく指導の時間を展開できるように日々、工夫を重ねています。

3つ目は「技術の練磨を怠るなかれ」です。

子どもたちに指導するからには保育者は情熱や愛の心はもちろんのこと、指導力が求められます。鼓笛マーチング・器楽合奏の編成など自分たちから学ぼうと園内ではもちろんのこと、県内外の研修や認定試験を受けて自己の能力を高めています。〈※図3参照〉

〈図3〉



【主な取り組み】

取り組みには3歳児から主に始まっていきます。手拍子をしたり保育者のたたいたりリズムを真似をするなどの「リズム応答」あそび。整列して自分の並び順を覚えたり、となりの友だちを見て正しく並べるか自分で確かめる感覚を養っていきます。鍵盤ハーモニカの活動もこの時期から少しずつ始めていきます。高い音や低い音の認識、自分の吹き方によって音が出るということを知り、約束事を守る中、楽しく活動しています。また、各名称（白鍵・黒鍵・マウスピースなど）も正しい呼び方で覚えていきます。楽器の用意、片付けも丁寧に扱うこと、大切にすることも伝えていきます。

集団でのあそびの中、集中する時間をもてるようにしています。

4歳児ではリズムあそび・パチあそび（小太鼓用のスティックを使用）などあそびを通しての活動、すばやく整列できるようにし、縦と横を合わせる意識を養っていきます。「気を付け・休め」「前ならえ」「足踏み」「左右の方向変換」などの基本動作を保育者の合図でテンポよく動きます。集団で同じ動きをすることは簡単なようで難しいですが、友だちを励ましたり合わせたりする姿や声掛けができるようになってきます。

おおよそこの年齢から「個」から「集団」での活動が多くなってきます。集中を長く持つことはできませんが日々の活動の中でねらいをもち、効率よく活動を展開していきます。

年長児と共に鼓笛マーチングの取り組みも始まり、4月から10月までの半年をかけて鍵盤ハーモニカの演奏演技を行っていきます。24m×24m四方のラインの中で隊形移動（フォーメーション）をしながら表現をし、自分たちでできるようになることで自信につながっています。<※図4参照>

〈図4〉



11月からは器楽合奏の取り組みが始まり各楽器のパートに分かれて演奏をします。年長クラスに向けて自分たちの目標が明確になり、「うまく太鼓がたたけるようになりたい」「この楽器をしたい」など意欲的に取り組めるようになります。

もちろん少しずつの基本動作を積み重ねてきましたので足踏み、方向変換の把握もはっきりしてきます。

5歳児は保育園では一番大きいクラスという思いからか姿勢、動作、挨拶、返事などたまたまの面で年下の子どもたちの憧れ、目標となり自分たちで引っ張ってこうとする自覚も芽生えてきます。基本動作では足踏みと前進の動作を複合的に行ったり、保育者から伝えられた動作をすぐに理解して表すことができるようになってきます。「人の話をしっかりと聞く」ということにもつながり集中力を持続させる力が大きくなっています。

鼓笛マーチングでは各パートに分かれ毎日15分ほどの練習を行っています。<※図5参照>

〈図5〉



半年をかけて3曲を演奏できるようになり、その中で鼓隊演技である各楽器の見せ場を作っています。担当の保育者がパートを受け持ちパート練習をして楽器を大切に扱い用意から片付けまで丁寧に知らせていきます。子どもたちにとっても保育者との信頼関係を築く上で大切な嬉しい時間となっています。子どもたちは非常に意欲があり子どもたちから練習の時間になると担当の保育者のところへ呼びに来るくらいです。

10月の発表本番では24m×24mのラインの中で年中児と一緒に約80名の鼓隊となり自分たちの力で入場から退場まで約20分間の演奏演技を行います。本番での自信に満ち合ふれた表情、真剣な眼差しに保育者、保護者の方々は感動の思いです。<※図6参照>

〈図6〉



11月からは器楽合奏の取り組みが始まり、2曲の演奏を目標とし活動していきます。全員が楽器に携わり指揮者の合図を見て合わせることができるようになります。また、曲想を感じることができ演奏する中で音の強弱をつけたり細かなリズムを打ったりと表現の幅が広がっていきます。保育園生活で経験したこと、多くの友だちと一緒に励ましあい頑張れたことを大きな舞台で発表します。

これらの活動を通して演奏や演技を上手に発表することのみが目的でなく、その過程の中で「人の話をきく」「集中するべき時間は頑張る」「友だちと協力し目標を達成する」「自分の姿勢を正す」など、これからの人生において必要不可欠な事柄を経験し、保育園を巣立っています。

【子どもたちにどのような成長がみられたか】

この活動によって子どもたちの生活の中での姿も次第に変わり大きな成長となっていくます。発表としては子どもたちがここまでの演奏ができるのかと驚かれる方もいますが、毎日少しずつの生活の積み重ねですので子どもたちに無理なく達成できています。

そのためには年間を通しての計画が必要となっています。保育の年間指導計画と同じように「音体年間計画」を作成し、活動の振り返り、反省をして次年度に活かすようにしています。各年齢に応じた計画を立ててつながりを持たせていくようにしています。あくまで保育の中の音楽活動であるため、音楽の活動が中心になってはいけません。活動の約束では例えば、

- ・楽器を大切に扱う習慣を身につけること。
- ・ふざけたり、おしゃべりをしたりしないことを約束し、練習に集中すること。
- ・あいさつや返事がしっかりとできること。
- ・よく話を聞くこと。
- ・打つとき、待つときの合図をよく聞くこと。
- ・準備、片付け、楽器の手入れや練習後の掃除などを、進んで手伝えること。

などがあります。日常の生活、あそびの中での約束事と同様、もしくは繋がっている事柄も多いです。この活動を行うことによって、子どもたちの可能性を伸ばしつつ、集団生活での規律も次第に確立していきます。

自閉症、広汎性発達障害等、個別に関わることがより必要である子どもに対しては1対1でのかわりを中心に行い、楽器のパート練習や隊形移動のフォーメーションの活動も保育者と共に一緒に進めていきます。本児のペースで進め励まし認めていくことで、嬉しさを感じることが出来ます。その思いを継続していき、全体での活

動の中でも楽しくできるように日々の積み重ねを通して計画性を持って行います。時間は必要ですが、どの子ども同じ舞台上で発表できるように、そして最後までやれたという達成感、自己肯定感を持って欲しいと保育者は愛情を持って接しています。

子どもたちが変わっていくという、心身の成長が見られることについてマーチングの取り組み（年長児4月～10月の半年間）を例に述べていきたいと思ひます。

『4月』

元気な挨拶をしたり自ら姿勢を正すこと、整列や足踏みなど友だちと一緒に同じ動きをし、保育者の伝えたようにすばやく動くことを意識しながら動作をするように活動します。時間は10分程度です。やりとげていく課題を明確にし短時間で集中してできるような内容にします。子どもたちが途中、間違えることがあっても最後までみんなと頑張れたことを十分に褒めていき、次回への意欲、自信につなげていきます。<※図7参照>

〈図7〉



手拍子のリズム遊びから小太鼓を使ってのリズム応答をします。保育者が打ったりリズムのマネをしてリズムを打ちます。見ている子どもたちも今頑張っている友だちを応援し静かに見るようにしています。

マーチングのパートに分かれ挨拶や楽器の用意、片付けも一つずつ伝えていき基本的なリズム打ちから演奏曲に取り組んでいきます。最初から上手にはいきませんが活動が終わったあと子どもたちは「たのしかった！」と言い、保育室に戻ってきます。

また、4月に保護者懇談会を開催し、年間の活動の説明や保護者からの質問に答えています。この会によって、保護者の方々の活動に対する理解や応援をいただける良い機会になっていて子どもたちを励まし、支えていただいています。

『5月』

園庭に24m×24mのラインを引き、線に沿って歩いたり、隊形移動に取り組みます。これをフォーメーションと言ひます。友だちと歩幅を合わせ、同じ速さで前進が

できるようにします。自分本位の速さではいけないことを学び、友だちと合わせようとする気持ち、考える心が養われます。

動きに慣れてきたら、実際に楽器を持って動きます。楽器を持って歩くことは子どもたちの喜びにつながります。一つ一つ出来ることが増えていきさらに意欲につながっていきます。そして、子どもたちから「練習がしたい」という言葉が出るようになり、やる気につながっていきます。

『6月』

だんだんと暑くなり、こまめな水分補給と休息の時間を取り、なるべく涼しい午前9時から短時間で取り組めるようにしています。1曲を演奏して進めれるようになり、楽器を演奏することが楽しいなど感じる事ができます。集中が切れてしまう子どももいますが、それでも途中で投げ出すことは無く活動の最後まで友だちと一緒に頑張っています。その場に入れるだけでも大きな努力として、保育者は認めていきます。前向きに、できないことができるようになったと喜べるようにしています。この夏の練習を乗り越えると子どもたちがひとまわりもふたまわりも大きくたくましく成長することを実感します。この時期から手応えを感じられるようになり、内容を理解したり覚えて自分のものにしていくスピードも速くなっていきます。

地域の方々からのお誘いをいただいて演奏出演の機会をいただくこともあります。発表をする場があることで緊張もしますがやり遂げた達成感、褒めてもらう充実感、友だちとの協調性が養われ、自信につながっています。

『9月』

9月になると、3曲目を演奏できるところまで進めるようになります。鼓笛フェスティバルの会場である体育館で練習をしたりリハーサルに望みます。体育館でするのでバレーボールやバドミントンの他のラインがある中自分たちの隊形移動の立ち位置の確認をしたり、歩幅で何歩歩いたら移動できるか感覚的にわかるようになります。演奏する音量も大きめで行うため、子どもたちから演奏できて楽しいと充実した言葉が聞かれます。初めての経験をしたり手応えを感じると本番への意欲につながり期待が高まってきます。保育者は子どもたちが自信をもって本番に臨めるよう楽器や機材の入念な確認を行います。〈※図8参照〉

『10月』

まとめの時期になりました。春の頃とは格段に自信を持って演奏演技ができるようになります。子どもたちの挨拶や返事も気持ちよくできるようになります。基本的にはこの24m×24mラインの中に大人は入りませんので、子どもたちの力を信じ、最後までやりきれるよう励まし、

〈図8〉



必要に応じて援助をしていきます。

こうして子どもたち、保育者、応援して下さる保護者の方々と共に本番に望んでいきます。

【まとめ】

～子どもたちにどのような成長が見られたか～

- ・明るく元気な挨拶や返事が進んでできるようになりました。
- ・美しい姿勢が自分で意識してできるようになりました。
- ・友だちと協力したり、集中して頑張ろうとする力が持続できるようになっています。
- ・『やるときはやる』という気持ちの切り替えができるようになりました。
- ・新たな活動に挑戦する前向きな姿勢や達成感・自信がみられるようになりました。

年齢ごとに連続的なつながりのある保育活動を行うことによって子どもたちの集中力、姿勢の良さ、敏捷性が養われ、そしてやる気や思いやりの心が育ち人づくりの基礎が培われています。

子どもたちの健全な成長のためには私たち保育者が、どう子どもたちに関わり声かけをし、どう接していくか日々学ぼうとする心で保育にあたる事が重要だと考えています。この教育方針は子どもだけでなく保育者も一緒に成長していくものと確信しています。これからも子どもたちのために職員一同励んでいきたいと思えます。

参考文献

- ・全日本幼児教育連盟 「幼児音体教育」
- ・全日本幼児教育連盟 「音体教育と発達障害」
- ・全日本幼児教育連盟 「新子供日本太鼓入門」

講評：音楽活動による人づくり保育の実践報告

～音体教育によって子どもが成長する。子どもたちの健やかな成長を願って～

評者：天野 珠路

33年間、ぶれずに「音体教育」を実践し続けてきた園の熱意と信念が感じられます。年2回の発表会で、その成果を目の当たりにした保護者の方たちが喜ぶ様子も目に浮かびます。特色ある「幼児教育」は地域の中で一定の評価を得ているのでしょう。

しかし、本文中にもあるように訓練と練習の積み重ねにより子どもを統制したり、大人も子どもも必死になっている様子に違和感を覚えます。日常の保育はどうしているのか、子どもの主体的な遊びはどのように展開しているのか、障がいのある子どもはどんなふうに参加しているのか、こうしたことが具体的に記されておらず、大人主導の音体育教育の成果ばかりが目立ちます。

保育指針にある保育の基本原則を踏まえ、表現の領域に関する実践はどうあるべきか、子ども自身の興味や関心から生まれる遊びと学びをどう保障していくのか。こうした観点で今一度職員全員で話し合い、そのうえで子ども主体の「音体教育」を再構築してほしいと願います。

評者：清水 益治

次の3点が評価できます。①「音体教育」という全日本幼児教育連盟の考え方に基づく園独自の理念を展開している点。②園独自の理念に基づく実践を発信しようと、投稿している点。③幼児教育の基本を外さないように、毎日短時間の取組を積み重ねていることを強調している点。

今後、次の3つのことを期待します。①単に発表会での発表を目指すのではなく、子どもが楽しんで参加しているか、子どもにどのような資質・

能力が身についているかに焦点を当てて、取組を振り返り、評価されることを期待します。②「音体教育」をさらに発展させて、幼児期の子どもの発達の特性を踏まえた、園独自の理念を構築し、その実践が普及するように努めて頂ければと思います。③実践報告としてまとめる場合は、理念→取組→成果が具体的に示されている方が読者である他の園にとって参考になるので、このことをふまえて投稿をしていただけることを期待します。

評者：日吉 輝幸

日々行われている保育の営みは、保育施設によってその形、手法は千差万別であり、保育所保育指針、認定こども園教育・保育要領の解釈と保育現場での実践は多様です。やよい保育園は『音体教育』をとおして①たくましい体、②ゆたかな情操、③すぐれた知能を育成することを主眼としています。また、保育者自らが3つの格言のもと、子どもたちの手本になるべく努力しているとのことで、特に『技術の練磨を怠るなかれ』の格言により、鼓笛マーチング、器楽合奏の編成などについて学ぶために、県内外の研修や認定試験を受けて自己の能力を高めているという記述には、少々驚きを感じました。

今回の実践報告書には、3歳児からのリズム遊びに始まり、4歳児のバチ遊び、隊形移動に向かう初歩、5歳児の鼓笛マーチング、器楽合奏の練習の様子が記述されています。筆者としては、日々の練習の様子のみならず、音体教育が苦手な子どもへの関わりや、音体教育時間以外の全く違う日常保育の場面で、音体教育の効果を実感できるような姿を、昨今求められている保育に照らして、もっと詳細に記述してもらいたいと思いました。

第12回 保育実践研究・報告集

平成30年3月31日発行

発行：社会福祉法人 日本保育協会 保育科学研究所

〒102-0083 東京都千代田区麹町1-6-2

アーバンネット麹町ビル6階

TEL 03-3222-2111 (代)

FAX 03-3222-2117

